
親父の楽しく険しい旅

てつまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親父の楽しく険しい旅

【Nコード】

N5038P

【作者名】

てつまる

【あらすじ】

起きたら街はゾンビが徘徊している。

ゾンビフリークとしては、そんな世界で暴れ回ってみたい！

そんな中年親父のゾンビ退治活劇を目指します。

連載中のおーい田中君？いや『死者の徘徊する街』はできるだけシリアス路線で頑張りますので宜しければそちらもどうぞ。

開幕（前書き）

起きたら家族は旅行。 1人取り残されたが…街にはゾンビ！
いざ！尋常に！尋常に！

冴えない中年親父の呆けかまし活劇の始まり！
は・じ・ま・り・-

徘徊の田中さんも応援してます。

開幕

「へつくしょん！ブエックション！」

俺は、止まらない咳に苛立ちながら、枕の横のティッシュBOXから乱暴にティッシュを数枚引き出して乱暴に鼻をかみ、そのティッシュを開き自分の風邪の悲惨さに途方に暮れていた。

どうやったら、こんなに汚い鼻水が出るんだよ！医者薬もまるつきり効きやしない。

トイレにも行きたいし、水分も補給しなけりや！と重たい身体を無理やり引き起こして、階段をとぼとぼリビングに降りて行った。

45歳になり、女房と娘2人（18歳と16歳）がいてるが、仕事、仕事にかまけている間に完全に家族との間に隙間が出来てしまっていた。

女房は、この世のすべての悪いことは全部俺のせいだと言わんばかりに責めたて、娘2人も完全に女房の味方と言う始末。
木曜日から寝込んで、早3日がたとうとしていた。

3日間の内、2回だけ次女がペットボトルにお茶を入れて部屋に來ただけで、飯さえ用意されない始末。多分、生死の確認に來たんだろう。大した期待はしてないから人生こんなもんだと割り切れるんだろうか？

典型的な駄目オヤジさ。

リビングに降りたが、はて？誰もいてる様子がない。リビングにポ

ツンと置かれたクリスマスツリーを見て、もう少してクリスマスだと気づいた。

机には昨日の夕刊が置かれたままになっている。今日って朝刊の休刊日か？

「買い物でも行つてんのか？」

話す相手もないのに誰に聞いてんだか…

冷蔵庫からスポーツドリンクを引っ張り出して、なみなみとコップに注ぎ込んで一気飲みほした。

その目先にあるカレンダーに記され赤丸を見つけて、家族が不在の理由が分かった。子供達が冬休みに入り、ボーナスもたんまりと出たんで2泊3日の温泉旅行に行つたみたいだ…

風邪で3日も寝込んでいる親父をほったらかして……相変わらずだ

……

仕方なく、トーストを焼き、インスタント珈琲をいれて、木曜日の朝刊から順番に読み始めた。

『S県で怪奇現象！人喰い発生！』

てか、俺はスポーツ新聞じゃなく、それなりの一流紙の朝刊を読んでいるんだが？

詳しく読むと、S県の山あいの町で、熊に襲われたか何かの死体を新聞配達人が見つけ交番に飛んで行き、警官と二人で戻ると消えていた。

血溜まりがあるので、何がしかの事件があつとみて警察の鑑識が調べたの結果、A型とO型の血液が検出された。と……

自分の背中がゾクゾクとするのが分かった。

かく言う、俺は生粋の『ゾンビ』フリーク。

下手くそだが、コミニティーではゾンビ小説も連載してるんだ。

しかも、いつでも世紀末に対応出来る用品まで準備万端なんだぜ！

まあ、興味のない人や……いやいや多分マニアにも引かれる程の凝りかただが……好きなもんは仕方がねえじゃないか！

まさしく、事實は小説より奇なり！か？

急いで夕刊から次の日の朝刊とさらに今朝の朝刊まで読み進んだが、残念他の記事はなかった。

まあ、当たりまえだのクラッカーだわな。（若い人は誰の台詞はネットでも調べてくれよな）

無意識の内に2枚のトーストを平らげていた。

人間の集中力ってえのは凄いもんだわ。

新聞記事を見て以降、身体のテンションが変わったみたいで、あれほど苦しかった鼻づまりも嘘のようにナリを潜めている。

ふと、時計を見ると19時を回っていた。カーテンと雨戸で覆われ

た窓にすっかり時間感覚が麻痺していた。

まあ、前後不覚で爆睡してたら時間感覚が麻痺してても当然なのかもしれない。

起きているにも関わらず連絡もないと非難されたらたまらないので、女房に電話でもと携帯を開いたところ、大量のメールと着信の嵐。携帯電話の留守電も一杯になっていた。

珍しいこともあるもんだと着信履歴を見ると、女房に長女に次女に職場の上司に同僚、挙げ句に普段連絡のない妹に大学の同期に知り合いの近所の交番勤めの巡査部長と10件以上！

ホイホイ。本当にゾンビでも出たんじゃないかな。と思うほどだ。

留守電1 長女 10:00

「お父さん！風邪大丈夫。私達は予定通りにS県の極楽温泉に着いたからね。連絡先はメールしとくよ。」

留守電2 女房 11:30

「お父さん。私です。起きたら電話もらえる？てか…まだ寝てるん？今、旅館の放送で緊急事態とかで部屋に鍵をかけて出るな。とか流れてるんやわ。念の為、此方に迎えに来る用意しといて、軽自動車は家の駐車場に置いてあるから。」
本当に、折角の温泉旅行が台無しやわ！」

留守電3 次女 12:12

「お父さん！助けて！旅館の周りに血だらけの人が20人くらい居てて…玄関を叩いてるねん！テレビ見たら、全国で発生してるって

……

今、旅館の放送でみんなで大広間に集合してバリケードを作るから集まれって、3人で大広間に避難するから助けに来てな！」
後ろで女房や長女がバタバタとしている音がしている。

「本気かよ」

背筋をゾツとさせながら4つ目の留守電を確認した。

留守電 4 14:45

「拓さん！鈴木（巡査部長）です。まだ発表はされてないんですが……あちらこちらで奇病が発生して……それが拓さんの得意分野のゾンビとまるつきり同じで、外出禁止令と非常事態宣言が16時に発表になります。私は署に全員参集がかかって……」録音時間一杯で途中で途切れた。

慌てて女房に電話するが、電話口から聞いた声は女房ではなく無情な声のアナウンスだった。

「只今、回線が非常に混み合っております。暫く経ってからもう一度お掛け直し下さい。」

勿論、家の固定電話も同じ結果だった。

連絡がつかないことをあれこれ考えても仕方がないので……

「まずは、腹ごしらえと武器だな！」

レンジでチンする食材を適当にレンジに放り込み、3階の自室に戻りクローゼットの中のスーツの奥にある大型のバックパックとその隣のバットケースを引っ張り出した。

2階に運び終えたところでレンジが出来上がりを知らせていた。

ピラフと焼そばをほうばりながら、テレビをつけてN。Kにチャンネルを合わせると……

頼りないおっさん（一応、内閣総理大臣って言われてるが…ね）が非常事態宣言と外出禁止令の宣言をしているVTRが流れていた。

直ぐにアナウンサーが現れ、首相をはじめ政府首脳は洋上の海上自衛隊の艦艇に移り臨時政府を設けたらしく、野党を中心避難声明が続出し国民を裏切る行為と受け止められても、仕方がない対応だと説明していた。

画面は切り替わり、自衛隊の展開について、飾りの一杯付いた制服の自衛官が説明をしていた。

張り出された日本地図を見たところ、北海道以外の地域に発生している様子だった。

S県には自衛隊の駐屯地もあり、温泉地も比較的近いので大丈夫にも見えるが…如何せん戦闘したことがない軍隊だからなあ。

それから30分に渡り、自衛隊の基本的な作戦行動と、現時点で把握出来ている奇病の説明があった。

説明を聞けば聞くほどゾンビそのものじゃないか！

それでも、日本人（政府？自衛隊？）はゾンビと認めてないところが空々しいほど脳天気だ。

その時いきなり、メールの着信音が部屋に響いた。

通話は駄目みたいだが、メールは何とかなってるみたいだ。

15:30 長女

『自衛隊の人達が救助に来てくれた！

自衛隊も救助に出た半数の部隊と連絡が不通になってるらしくて、ここに来た自衛隊の人達も三分の一がやられたらしい。で、基地に戻るのとは諦めて旅館に立てこもることになりました。電話は全然つながらないのでメールします。

いつ頃来れそう？』

メールも到着するのに数時間近く経ってやっとみたいだな。リアルタイムの情報は諦めるしかないみたいだ。

しかし、自衛隊の部隊が半数もやられているのに、個人の父親がどうやって簡単に其処まで行くんだよ！普通にお迎えに来て貰うような簡単な言い方すんなよ！と毒づきながら

『今、19時45分メールを受信した。そちらに向かう。期待はするな。自衛隊すらかなわん相手に父ちゃん1人でS県まで行けるか検討もつかん！』

とりあえず、送信ボタンを押した。

「おい、おい…嘘だろ？」

送信中にアンテナの表示が一本ずつなくなり、結局、送信出来たのか出来なかったのかわからない内に圏外になってしまった。

お約束のライフラインが無くなってくるパターンだが……早すぎないかい？まだ発生して数時間じゃないかよ。

国内の通信インフラってえのはそんなに脆弱なのかよ？

念の為に携帯電話を充電器に刺して、予備の電池やなんやらを引っ張り出し机に並べた。

サバイバルショップで購入した黒色のタクティカルスーツを着込んだ。

タクティカルスーツには通常のエルボー（肘）・ニー（膝）パッド以外に、手首から肘にかけての部分に薄いチタン鋼板を防刃繊維のケプラーを3重で覆ったサポーターのような対噛み付かれ用パッド（と言っていいのか？）も特注で作って貰った。が縫い付けられている。それでも予算の関係上左腕分しかないが……

店主も生粋のゾンビフリークだったので、商売抜きに楽しんで作ってくれたみたいだった。

流石にジャパンオタクは力強い。

更に、刃渡り15センチのサバイバルナイフを右胸上のケースに装着し、右腰の少し後ろ側に3段伸縮の特殊警棒を差し込み、その他のポケットやらにタバコやジップライターやらフラッシュライトやらをねじ込んだ。

次は長物か。

時代劇さながらに鞘（特注品だぜ）に鉛芯入りの木刀を入れて肩かけにし、同じく鞘に入った刃渡り刃渡り60センチの^{マチェット}蛮刀を鞘ごと右足の踝から膝にかけての部分に括りつけた。

この蛮刀は、近所の鉄工所の親父さん（社長）に無理をお願いして、

軍用の官給品と同じ炭素鋼で作ってもらい、勤めている元岐阜の関の刃物職人に何度も焼き入れをして貰った刀身が肉太の一級品で防錆加工にオリーブドラブ色に塗って貰った奴だ。しかも、『突き』が出来るように先端の折り返し部分にも特別に刃を入れて貰っているんだ。

更に、バンテージを巻いたソフトボール用の細身のバット。（これも、鉄工所の親父さんに加工して貰い、内部に強化用の軽量の粘着ジェルを流し込んで貰っているんだぜ。なんせ、人を殴る用途に作られたもんじゃないから、独自改良ってやつだ）

更に、お次は飛び道具だ。

ボウガンやアーチェリーはあまりも捻りがない。俺が用意したのはスリングショット。早く言えば、『ばちんこ』テレビCMできゅい！きゅい！って言う18禁のじゃなく。

子供の頃に遊ばなかったか？Y字形の木に輪ゴムを何重にも巻いて、ビー玉や小石を飛ばすやつだ。

飛ばすのは、18禁のパチンコ屋からパクってきた（正確には1円で借りた）銀玉だ。簡単に補給できるし、小石でもOK！対してかさばらないのも都合なんだが……

結構、銀玉がジャラジャラと五月蠅いのが玉に傷つてところかな。だから、一応は玉は音がしにくいようにした平たい缶ケースに50発ずつ5箱ほどある。力一杯引いて撃ち込めば何とかなるんじゃないだろうか？

しかし、既に20時15分。

窓から見る限り、今日は曇り空だったのか？明日が曇るのか？空一面にどす黒い雲が覆っていて格段に視界が悪そうな夜だ。

鴨がネギを背ってなんとやらだな。

おや、おや…… お向かえの親父が既に…… 血だらけでヨタヨタと歩いてるじゃないか！

手に光る赤色棒を持って歩いてるってえことからして、お決まりのゾンビは生きていた時の習性にそった行動を取るは事実と言っことになりそうだ。

うーん。ゾンビ小説もバカにならん。

窓から外を眺めてる場合じゃなかったな。

都心から電車で30分のこの辺りまでゾンビがいてるってえのは、かなり広範囲に被害は拡大してるってことだな。

まずは、順ちゃんがいてる可能性のある警察署からクリアーして行くか！

俺の長い旅の始まりだった。

開幕（後書き）

感想待ってるぜ！

第一歩（前書き）

2 話目です。

活劇の予定ですが…毎度のこだわりが抜けずに……モタモタしてま
す

第一歩

装備をしこたま身体中に身に付けて1階に降りた俺に、我家の3番娘、野良猫から家猫に華麗に転身した黒猫のドロンジョが

「ニヤァ〜ア」(飯は？ボヤツキー)

と階段の上で催促している。

何時帰れるか？

帰るつもりだというのがおこがましいが……

はてさて、どうしたものか？

バイオハザードでは、犬とカラスはゾンビになったが猫は登場してないよな？

映画でも、犬は無視されて、ノコノコと銃砲店に入って行ったよな？

しかし、ミャーミャー言われてゾンビに追いかけられるのは面倒くさいし……

まあ、元を正せば野良猫なんだから、はぐれたらはぐれた時か

俺は階段を上がり直し、猫の餌をバツクバツクに詰め込んだ。

「なあ、ドロンジョさまよ。あんたの大好きな姉ちゃん二人を助けに行かなきゃなんのだわな。付き合うか？」

わかったのか餌が欲しいのか

「ニャア~~~~ン」と犬の遠吠えのような返事をした。

「ついてきな！」

あっ！それと腐った人間の肉は喰うなよ。何せ、お前らはネコ科。ライオンの親戚筋だかな。」

俺の足元をスリスリしてるところを見ると、ついて来そんな感じなので、とつとと、出るとするか。

一応2階の窓から明かりを消した状態で外を見た限りではゾンビはいなさそうだった。

しかし、200メートル先の町内会長の家はこうこうと明かりを点けたままなので、3分匹ほど家の前にたむろされていた。

静かに、静かに玄関を開けたつもりだが、意識してると案外デカい音がすることに気付くな。

いつもなら、道路にはそれなりの交通量があるはずだが……外出禁止令が守られているのか？

まあ、それ以上に血だらけの死体が歩いて、襲ってくるんだから普通は外出なんてしないわな。

素早く車に駆け寄り、ドアを開けて運転席に乗り込んだ。

自分で車のドアを閉める音にビックリしながら、ドロンジョを忘れ

ていたとキョロキョロと見まわすと、ちょこんと助手席に座ってやがった。

「ニヤ！」（間抜け！私はそんなにドジじゃないよ！）

しかし、習性つてのは怖いもんだ。やっぱりゾンビだけじゃないな、人は普段の習性が間違いなく出るわ。

あれだけ、音には注意といいながら、焦れば焦る程デカイ音をだしてしまう。

車のドアなんかいつも同じで勢いよく閉めてしまった。

あれこれ迷っても仕方がないか。

メーターのガソリンを確認しところ、良かった！満タンだ。

実はこいつも（車）対ゾンビチューン車なんだ。
チューンと言っても車体からナイフが出るとかミサイルを装備してるかという攻撃を主体に置いたのではないんだぜ。

1ボックスの軽自動車だが

まず、タンク容量を通常の45リットルから5割増の63リットル。

荷台背面に20リットルの予備タンクと予備タイヤ（スペアじゃないぞ）

ウィンドガラスは、はめ込みのところは通常の1.5倍の厚み、電動は重さのギリギリで1.2倍。人間の手では絶対に割れない。はずだ…

エアバックも非装着にしている。

何故って？映画や小説では簡単にゾンビを車で轢いているが…何体も轢いてたらエアバックが作動するはずなんだか……ご都合主義なのか、触れられていないんだ。

バンパーは外側は割れにくい軟性樹脂性だがバンパー自体は鋼材で骨組みして、車体には小型のショックアブソーバーで繋いでいる。衝撃に強く簡単には割れずにかつ相手には確実に衝撃を与える予定なんだか、力学的に正しいのかはわからない。

まさか、各パーツメーカーに人を轢いても大丈夫ですかとは聞けないだろ？

あとは、寒冷地仕様のバッテリーの二重化にライト関係の強化に追加ってところかな。

ルーフポッドもつけているので非常食も適当にはあるんだ。

まあ、この車なら便所のことを考えなければ500キロ程度なら無給油で、ほぼ1週間なら独自で過ごせるんじゃないかな。

セルスターターを回してエンジンを灯してギヤをドライブに入れて静かに駐車場を後にした。

一旦停車し、見納めとなるかも知れない我家を見上げた。

「！」

見上げた視線の片隅のバックミラーには、町内会長の家の前から3体のゾンビがこちらにヨタヨタ歩いて来る姿が映し出されていた。

俺は、アクセルを踏み車を街の中心部に向けた。

数分も走らないうちに、家の周りにゾンビがいなかった理由や車の往来がなかった理由がはつきりした。

この街の駅を中心とした一角はあちらこちらに放置や衝突したらしき車が放置されていた。

18時に非常事態宣言がされたわけだから、その数時間前からゾンビが大量に発生してたみたいだ。

車は衝突の際にガソリンが漏れたのか、燃えていたり、くすぶつていたりしていた……

地面には所々に血が撒き散らかされている。

まさしく、映画のバイオハザード2のアリスが病院から出てきたシンとそっくりだ。

「肝心の主役のゾンビが見当たらないな？」

言いながら、自分が主役をゾンビと認めてしまっていることに苦笑いしてしまった。

まだまだ、主役の座を明け渡したとは認めたくないな。

事故車両・放置車両が道路一杯に埋め尽くされていて、さすがの軽自動車でも隙間を縫って走るのは無理そうだ。

仕方なく、俺は車を歩道に乗り上げて歩道を走ることにした。幸いに見える範囲の歩道に死体などは見当たらないので気兼ねなく走らせてもらわせた。

電力は活きているみたいで店舗や街灯で街中は明いから助かるな。

ドガ――ン

爆発音に思わずそちらに目を向けたら、車が派手に吹き飛んだ瞬間だった、ガソリントankに火がついたんだろう。

「すげえ」

思わず見入っていたら、ドスン、ゴリツ・ゴリツと音がして車が何かに乗り上げ、一瞬ハンドルを取られてしまった。

直ぐバウンドしたかのように地面に着いたかと思ったとたんに後輪が同じ動きをした。

慌ててブレーキをかけて、思わず車から降りて後ろを見に行ってみると……

見事に……ゾンビをひき殺していた。

左腕の肘から先がなく、顔半分の皮膚や肉もなく頬骨が見えていた。映画や想像の世界では、見慣れたつもりであったが流石に実物を直視すると胸糞が悪いな。

俺には、両手で合唱のポーズを取って冥福を祈ってやるしかなかった。

ガシャン！と音がした。

ビクッとした俺は音の方向に顔を向けた瞬間に、現実を思い知らされた。

そこには3体のゾンビが、映画よろしく両手をキョンシーのように前に出しだらしく上下しながら迫って来ていた。

1体が道路に設置されていたごみ箱にぶつかった音がなければ、俺は奴等の腹の中に納まっていたかも知れない。

初めてのゾンビ退治は、よそ見運転でのひき殺しだったが自分の意思で武器を持ち初めてゾンビに対峙することに、不思議と恐怖はなかった。

俺はジリジリと車の運転席の方に後ずさりをし、運転席横に立てかけてあった、木刀を鞘から抜き出し、見よう見まねの正眼の構えをとり、ゾンビを木刀で殴れる距離までにじり寄り

「いっけえ」

木刀を振りかぶり。先頭のゾンビの頭めがけて力一杯振り落とした。

「へッ？」

あまりに力一杯振り落としたので、力みすぎてゾンビの右肩を思いっきり叩いた状態になってしまった。

ゾンビは身体を右方向にガクリと下げたが、歩みは止まらなかった。

やばい！俺の心で何かが弾けた。

瞬時に木刀を構え直し、改めて先頭のゾンビの頭に木刀を叩きつけた。

両手に何かを叩き潰した感触を味わいながら、先頭のゾンビを回避するように左側から寄ってきたゾンビに思いつきの前蹴りを食らわし後方に弾き飛ばし、もう1体の右側のゾンビに向かって思いつき木刀を突き出した。

大きな口を開けて飛びつくように迫って来ていたゾンビの口の中に木刀は吸い込まれていき、見事に頭を貫いていた。

ゾンビの身体に足をかけ蹴り飛ばすようにしながら木刀を引き抜き蹴り飛ばして転がっているゾンビに向かい、頭を思いつき足で甲で蹴り飛ばした。

クリーンヒット！正にロベカルの弾丸シュートも真つ青なくらいにキレイに入り、ものの見事に首が変な方向に向いていた。

蹴り終え、周囲を見回しながら3体のゾンビを木刀で突つつきながら、死んでいるのを確認した。
大丈夫なようだ。

木刀についた血を、倒れているゾンビの服の比較的きれいなところに擦り付けるようにしてふき取り、車の運転席に戻り、ロックをした後に、ハンドルに覆いかぶさるように突っ伏した。

思わず、大粒の涙がポロポロと目から溢れ出していた。

ゾンビという化け物とはいいながら、『人』と同じ形の生物を殺したのだ。

「うおおおおおおーっ」

これが、最初で最後の涙にしよう！この先には、もっと多くのゾンビを殺さないといけないんだ！

「ゾンビになりたくてなったんじゃないよな？

生きていたら色々なことがしたかったんだろうな？

もっと楽しいことを味わいたかったよな？

死ぬときは人間らしく死にたかったよな？」

生まれたから初めて大声を出して泣いた。

「にゃん、にゃん、にゃん」

ドロジョが心配してくれているのか、ダッシュボードに駆け上り俺の頭をやさしく撫でてくれていた。

俺はひとしきり泣き尽くした。

「行こうか？」

ドロジョは未だダッシュボードに座り込んで俺を見つめてくれていた。

倒した3体を改めて見直した、必死で気がつかなかったが、最後に蹴ったゾンビは学ランを着た学生だった。

「童貞だったのかな？」

男として、そうではなかったことを祈りながら車を発進させた。

歩道作戦は成功みたいで比較に順調に車は警察署に近づいて行った。警察署まで後少しと言うところで助手席のドロンジヨがさかんに鳴き声をあげはじめた。

最初は気にもせずに車を進めたが、ドロンジヨに左腕を引っかけられてしまった。

「何なんだよ？」

車を止めて、会話ができるはずもない猫を相手にしている自分を滑稽に思いながらも、さっき慰めてくれたドロンジヨを無視もしにくかった。

ドロンジヨはいきなり後部座席から後部トランクスペースまで軽やかに飛び跳ねて行き、しきりに後方に対して鳴き声をあげていた。

何か大事な物でも見過ごしたか？

仕方なく、車を徐々にバックさせて行くと50メートルほどバックさせたところで亡き止んだ。

何があるんだ？と周囲を見渡すと、左後方10メートルほどのところにゾンビが10体近く競うように空に向かって何かを掴むような仕草をしていた。

「何だぁありゃ？新興宗教の信者の集団ゾンビ軍団か？」

車の天井が邪魔をして何に向かって争っているのかわからないんで、

俺はサンルーフ（通常のサンルーフより50%増しで広くしている。本当ならツインサンルーフにしたかったんだが……）の開閉スイッチを開にした。

1人じゃ、さっきみたいに死角が出来るからな！
開いたルーフから上半身を出した俺が見たものは……

萌え萌えの制服姿、しかも股下数センチと言うスカートをはいた女の子が電柱の中ほどにしがみついている光景だった。

相手も既にこちらに気づいているらしく、しがみついている手のひらを小さく振っていた。

この寒空に何時間しがみついているんだろか？見上げた根性だな。

叫ばないところを見ると、ゾンビが音に反応することもわかってあるみたいだ。

1、2、3、4……14か！14体のゾンビに白兵戦では勝てる気がしない。

飛び道具しかないか。

俺は、ゾンビ達から目を離さずにバックパックを車から引っ張り出して、目的のスリングショットを取り出した。

確か、底に磁石を仕込んだパチ玉ケースがあったはずだ。

お目当てのケースを見つけて、車の屋根に固定して、玉を取り出してゾンビに向かって撃ってみた。

玉はゾンビの肩辺りに当たった。

流石に簡単には頭に当てられないな。しかし、間違いなく身体には
めり込んでいるから、狙いさえよければ……

第1歩（後書き）

感想待ってます！

第二步（前書き）

自分の作品に癒やされています。

第二步

もう少し右上か？若干の修正をして先ほどより強くゴムを引いて2発を放った。

命中！だったが……狙ったゾンビの奥にいた奴の耳辺りに当たったようで、当たったゾンビはそのまま崩れるように倒れていった。

結果オーライとしておこう。

3発目も狙ったゾンビではない奴の目に当たり、崩れるようにして集団の中から消えていった。

余りにもラッキーヒットに馬鹿らしく思いながらも、4発、5発と

……

黙々と俺はパチ玉を撃ち続けた。

集団の数が減るほどにラッキーヒットは少なくなり、後5匹となったところで1匹がこちらに気づいたようだ。

1匹だけ、電柱を離れて両手を前に突き出してこちらに向かって歩き始めた。

まさしく、真正面にいてる状態だ。

段々とコツが掴めてきた俺は慎重に狙いを定めて、必殺必中の1発を放った。

見事にパチ玉は額の真ん中を射抜き、膝から倒れてこんでいった。

それから5発で、4匹のゾンビを始末することが出来た。

23発のパチ玉で14匹のゾンビを倒したことになる。これって効率がいいんだろうか？命中率としては60%位だよな。
おっと！くだらない計算をしてる場合じゃないぞ。

電柱のところへ車で行くのは放置車両の関係で諦め、もしもの場合に備えて車のエンジンはそのままにして、周りを警戒しながら車から降りて電柱に近づいた。

（お約束の他の生存者に車を奪われましたなんてまぬけな話しは、映画か小説の中だけにしてもらおう、俺はキッチリと予備キィーで施錠はしてるから、あゝ鍵！鍵なんて心配は無用だ）

電柱の真下に到着して、声を掛けようと上を向いた俺の目には、ピシクに包まれたまあるいピチピチのお尻が飛び込んできた一部真つ赤な部分まで丸見えだった。

思わず見入ってしまった後に、降りてきてからが気まずいかな？と思ひ直して数歩下がってもう一度上を見上げようとした途端に

「右横！」と叫ぶ声がした。

声の主を確認する間もなく、右を見ると……男子学生が手を突き出して迫って来ていた。

先ほどの戦いで余裕がついたのか、俺は2歩、3歩と下がりながら背中の木刀を抜き終えた途端に、木刀を突き出しながら一気に学生の顔目掛けて突進した。

木刀はものの見事に学生の喉元から首を突き抜けた。

学生の腹辺りを蹴り出すようにして木刀を引き抜いて、周りを見回したが他にはいてそうになかった。

改めて電柱に目を向けると、そこには少女の姿はなく、慌てて視線を下けると器用に電柱を降りるお尻が見えた。

おい。おい。スカートが捲れ上がってんぞ！

この世代（娘と同じくらいだろう。学生服着てるんだから）が、扱にくいのは骨身に染み込んでいるんで、敢えて後ろを向いて見ていませんよ。とPRしておいた。

ドン！とぶつかられたが……周りにはゾンビがいないことは確認済みだったので、落ち着くまでしゃがみつく少女を放っておいた。

大声はゾンビを引き寄せるのがわかっていいるのだろう。

声を押し殺して泣いている。

そりゃそうだわ。この地獄のような状態をみたら……泣かずにはいられない。

2〜3分ほど経ったところで、50メートルほど先にゾンビが2匹ほど現れたのを見て

「嬢ちゃん。悲しいだろうけど……」

また、襲われるのはもっと悲しいだろ。

車まで行けるか？」

俺の襲われると言う台詞にびっくりと反応して、少女の身体が僅かに離れた。

「車はわかるな？ 静かに素早くな！」

俺は、ゾンビが現れた方向から目を離さずに車に戻り始めた、距離が離れていたこともあり無事に車にたどり着き後部のスライドドアを開けて少女を入れ、続いて俺も後部座席に乗り込んでスライドドアを閉めロックを掛けた。

少女は俺が運転席ではなく、後部座席に乗り込んできたことを勘違いしたのだろう身を固くし硬直してしまっていた。

俺はそんな少女を無視して、後部座席の後ろから中型のボストンバックを取り出し、更にその横のボストンバックから厚手のバスタオルとハンドタオル、ウェットティッシュを引っ張り出した。

それら一式を少女の横に置き、黙って運転席に戻りかけるために少女と真っ直ぐに相對する形になった。

更に、見間違えることなど出来ないように硬直は増し、目には大粒の涙が溢れんばかりに溜まっていた。

あちゃー！こりゃあ、完全に誤解されちまってるわ！

下手に声をかけない方が得策と、そのまま黙って運転席に移り運転席に収まったのち、おもむろにに振り返って運転席と後部座席との間にある仕切り用のカーテンを引いた。

「嬢ちゃん。怖がらせて悪かったな。ボストンバックに娘の着替え

が入ってるから……ビニール袋は外側のポケットに入ってる。まずは履き替えな。気持ち悪いだろ。

俺は、前から来てる奴らを挽きながら移動するから、嬢ちゃんの相手をしてる間ないから……」

返事も待たずに車を発信させた。

まあ、ピンクのパンツの半分が赤く見えたと言うことは……まあ、そのだな……怖くて……お漏らししちゃったってことだろう、いい年頃の娘さんに直には言いにくいからなあ」

微かに、止まっていた息が漏れる音とクスツと笑ったような声が聞こえた。

ゾンビは20メートルほどに迫ってきていて、やっぱり狭い歩道では避けて通るのは無理そうだった。

真正面から挽き殺した場合、タイミング悪くフロントガラスにぶつかられるのは、強度と見映えから考えてもできるだけ回避したい。

仕方なく、狙いをすませてできるだけ、車の四隅に引っ掛けるようにハンドルを小刻みに左右に動かし既に遅いかも知れないが、後部座席に一言かけた。

軽いショックが連続して車体から伝わり、見事に2匹のゾンビを左右に吹き飛ばすことに成功した。

数メートル先で一旦停車しバックミラーを覗いたが、カーテン柄が見えただけだった。自分で閉めておいておおぼけだわな。

改めて左右のドアミラーで確認したところ左側のゾンビは車が衝突したかなにかで折れた街路樹に頭から突き刺さっていた。

右側のゾンビは、左足？が千切れかけていて、立ち上がるとしても足が使えないのでひっくり返り、それでもまた立ち上がるとしてひっくり返っていた。

延々とやっていそうな……鬼気迫る感じに、得も知れぬ不気味さを感じて、俺はアクセルに置いた足に軽く力を加えて車を前進させた。発車間際にドアミラーの向こうではゾンビが3度目に挑戦し、前回と同じようにひっくり返えっていた。

運転席と後部座席を仕切るカーテンが静かに開き、少女が伏し目がちに現れた。

バックミラーで少女の顔色を確認しながら

そっぴゃあ、噛まれか？とか引つかかれたか？って聞いたかな？
聞いてないよな？いきなり襲われたらヤバイよな。

気付かれないように顔をかくふりをしながら、さりげなく左胸元のサバイバルナイフをいつでも引っこ抜ける体制で少女を観察した。結構巨乳だ。て、こらあ！どこ見てんねん。1人で呆け突っ込みしててもしょうがない。本来の目的の観察に戻るう。少女は、少し顔がうつすらと赤い感じ以外は特に変わった様子は見られなかった。

「た、助けただいてありがとうございます。そ、それと汚れた……その……あの……パ、パンティまで！

後で洗濯してお返しします……でもどうやって洗濯したらいいか……。」

ポロポロと涙を出してビニール袋に入ったパンツを握り締めていた。普通の中年なら洗わずにそのまま下さい！てなるんだろうが……女系家族の我が家では、お漏らしパンツなんぞでびびってなんかいられない。

内緒の秘密だが（人に話したのがバレたら3日は飯抜きだぜ）………濁った血だらけのパンツが洗濯機に放り出されていることなんざあ日常茶飯事なんで……珍しくも何ともなかった。

まあ、少女のパンツを履いたお尻は可愛かったがな。

「そんなことはいいから、気にしないでいいよ」

「にやああああー」

まるで私を忘れてませんか？てな具合にドロンジョが少女の隣に力ーゴルームから飛び込んできた。

「うわあ？猫ちゃんだ！」

少女はガバツとドロンジョに飛び付くよう勢いで抱き寄せた。

「かつわいい」

少女に頬ずりをされてドロンジョは

喉をゴロゴロと鳴らしていた。

稀代の女殺しのドロンジヨ姉さんはあつと言つに少女の心を掴んだようだ。

「にやややゝん」（ボヤッキー、女性はこうやっておとすんだよ！アンポンタン！）

雌猫のくせして女たらし（去勢してるのに雌と言つていいのか？）……たあ、生意気な猫だ！晩飯抜いてやるからな！

何にせよ良かった。少女に笑顔が戻ってきていた。

「参ったな」

思わずばやいてしまつてから、少女が後ろに座っていることに気づいた。

少女はドロンジヨをグツと強く抱きしめながら

「ど・どうかしたんですか？」

「いや、そんなに心配するほどのことじゃないから……警察署に行ことしてたんだが……」

この道からじゃ残念ながら、無理みたいなんだ。」

警察署に向かう道には、事故車両や放置車両が道一杯に広がっていた。

「警察署に避難するんですか？」

相変わらずドロンジヨを抱きしめながら少女はたずねてきた。

「うん。一応知り合いの警察官がいるんでね。もしかしたら、武器とかも手に入れることが出来るかもしれないしね。しかし、かなり迂回しなくちゃ駄目みたいだ。」

「しかも、一旦郊外に出なきゃならないから……な。」

「郊外は駄目なんですか？人が少ないからバケモノも少なくないですか？」

「いや、郊外だと今晚の天気じゃ……見通しが悪すぎてね。わざわざ危険なところに行くのも、考えどころなんだわ。かと言って安全な場所もないしね。」

さてさて、どうしたものか？

一旦、家に戻ると言う手も無きにしも非ず何だが……。

市街地まで一本道。夜の時点で様子見の連中が日の出から一斉に動き出したら……ヤバイよな。この状況で渋滞は……考えられないぞ。

一気に郊外を抜けるか？ある程度警察署の近くまで移動した方が得策か？

「あのう。」

「ん？何だい？」

「ここから、郊外に出て警察署に向かうって言うことは、桜木町から松木町に出て池波町から警察署に向かうんですか？」

俺は、頭の中で地図を思い浮かべながら、少女の言ったルート之地

名を思い出そとしていた。

「桜木町と松木町はわかるんだが…池波町が、ピンと来ないなあ。」

「池波町は、ほら先月ディスカウントストアが出来たところ辺りな
んですけど…」

なる程！あそこか！警察署まで車で2分くらいだな。

「道はわかったけど…君、何か当てがあるの？」

「ディスカウントストアの500メートルくらい手前にコンビニがあるんですけど、ご存知ですか？」はて？在ったっけか？家からディスカウントストアに向かった場合は通り過ぎりことになるんだよな。いかん、わからんわ。」

「いやあ、ディスカウントストアから奥はほとんど行ったことがないから、記憶にはないなあ。で、コンビニがどうかしたのかい？」

「私、そこでバイトしてるんです。改装してて、明日の19時オー
ブン予定なんです。」

エコステーションコンビニってコンセプトで太陽光発電と蓄電池で、
3日間は停電でも大丈夫だって、店長が言っていました。

24時間なんですが、今はシャッターが降りてますし、店長やバイ
ト君の自家用車がイタズラされて困ってて、改装に併せて従業員用
の車庫が店舗横にあって、車を降りたら外に出ないでお店に入れる
んです。」

「そりゃ、現時点ではベストな避難先だけど……鍵がなけりゃな」

小説でも有り得ないベタな展開に……でも鍵がないんです。でもトイレのガラスを破ったら！なんてパターンか？を期待してしまうじゃないかよ！

「あ、あの……店の鍵と車庫のコントローラーなら持ってるんですけど……」

バイト君は私用で無断利用しそうだし、店長は一昨日から赤ちゃんが産まれるとかで奥さんの実家の九州で……

明日は本部の応援と私でお店スタートさせるんで………」

んゝん 思わず抱きしめなくなる展開！助けて良かった。

俺達は、郊外に向けて発進した。

第二步（後書き）

ご意見、ご感想 お待ちしております

休憩前（前書き）

えーっと、多分 年内最後の投稿になります。

山田さんの方とこちらと、どっちが迷ったんですが……

親父の方がサクサクとすすんだんで……

小説情報で評価点が入るのが快感になってきてます。宜しければ、是非是非評価して下さいね。

本年はご愛読いただきありがとうございました。
読者の方々に2011が素晴らしい年になりますようお祈り申し上げます。

来年も宜しく願います。

では、良いお年を！

休憩前

コンビニまでの道のりでは、5体のゾンビを引っ掛けるだけで、10体以上の集団は避けて通るようにした。

次の角を曲がれば目的地というところで道には20体ほどのゾンビがたむろっていて、どうしたものかと悩んでいると

いつの間にか、道案内だとか言ってドロソジョを抱いたまま助手席に収まっていた少女が、眉間に皺を寄せてゾンビ達を指差して

「あのバケモノ達……いつもお店の前で騒いでる連中ですよ。うちって、店長が空手3段でバイト君もムキムキマツチョなん……店の周りやお客さんにはちょっかいは出さないんですけど………毎晩、どっかから湧いて来る中坊なんです。」

てことは、生前の行動習慣が反映されるとすればいずれはコンビニ前に集まってくる可能性が高いつてわけだ。

20体を挽き殺すとなると、車のダメージが心配だな。近寄って、スリングショットで始末するか？

悩んでいると、いきなりバックミラーにライトが反射した。

すげえ勢いでダンプカーがこちらに走ってきている。

思わず路肩に車を寄せるとその脇をかなりのスピードで過ぎ去り、その勢いのまま、たむろするゾンビに突っ込みあっという間に10体ほどを、その巨大なタイヤに巻き込んでいき、ブレーキをかけて

横滑りで止まり器用に切り返し残りのゾンビを全て挽き潰して行った。

ダンプカーのタイヤはゾンビの血と油でベっとりなんだろう、走り去るダンプカーは微妙にスリップを繰り返して遠ざかって行った。

「……………」

少女は助手席で目前で20体のゾンビが次々に潰されて行くのを啞然と見ていた。

おいおい！そんなに馬鹿みたいに口開けてっから……………涎垂れるぞ！

注意をしようとした時に少女は我に返り、涎に気づいて『じゅじゅじゅっ』とすすり

「い、今の見ました。大きい車って凄いですよね。

あんなに、勢いよくされると、怖いとか気持ち悪いとかじゃなくて、バケモノがかわいそうになっちゃいますよね。

窓を開けてたら、グチャ！グチャ！って音が聞こえたんでしょうね！」

よほど涎顔が恥ずかったんだろう、喋れば喋れるほどドツボに嵌っていつてるぞ！

「……………。見た？」

「あん？」

彼女の名誉のためにしらばっくれることにしてやった。

「おじさんって、優しいんですね。あんなに大きな音で涎を嚙って……気づかれない方がおかしいですね。」

もう！今日は さ・い・あ・くうくう。お漏らしに涎顔に！？」

「きやややや」

自分でお漏らしをバラして、顔を真っ赤にして俺をバシバシ叩いてどうすんだよ！

ひとしきりバシバシ叩いてから

「ごめんなさい」

「気にすんな。それより、邪魔者がいなくなったんだ。早速、寢床となるコンビニに出発だ。」

コンビニの前には、1体の年老いたゾンビがいた。

「山田のじいちゃんだ！」

「知ってるの？」

少女は暗い顔で頷いた。この後の老人の末路がわかっているからだ。

「80過ぎてるのに、商品出していると直ぐにお尻触ってくるセクハラ爺ちゃんなんだ。止めてって言っても人生唯一の楽しみだって……」

セクハラ爺ちゃんの話をする時は少し明るくなっていたが……

「でも、殺さなきゃなんないんでしょ？」

また暗い顔に戻ってしまった。

「爺ちゃんのあの姿の方が不憫だと思わないかい？」

ただ、食欲…人肉だけが生きがいになっちまってるんだ。」

俺はある決意を決めて、車の周囲を見渡し他のゾンビがいないことを確認して、運転席から降りて助手席側にまわりドアを開けた。

「エッ？な、何なんですか？」

俺は黙って彼女の手を引いて車から下ろした。

振り向くと爺ちゃんが手を前にしながら、ヨタヨタとこちらに向かっていた。

俺はバットを持ち爺さんに近づきながら、少し屈んだ感じで爺さんの手の届かない範囲から、力一杯に膝頭を叩いた。膝の皿を曲がる方向とは逆にぶん殴ったんで、爺さんの右足は普通なら曲がらない方向に曲がってしまい、ばったり地面に倒れ込んだ。

さっき轢いたゾンビと同じように必死に手をつつかえて立ち上がるうとしているところを、申し訳ないが左肘を同じようにに叩き、続いて右肘を叩き潰した。爺さんを地面に這いつくばるしか出来ない状況にした。

注意深く周囲を確認し（助かるのは明日オープンと言うからか、店

は宣伝用にだろうが目一杯照明を照らして(くれた)彼女に近づき右足の鞘から^{マチェット}蛮刀を抜いて、彼女の右手に握らした。

無言で厭々と駄々をこねる彼女に向かい

「いいかい。君がバケモノと呼んでいる、そいつらはゾンビなんだ。動いてはいるが……既に死人なんだ。

たゆまない食欲のためだけに生きて、ひたすらに人肉を食べることにしか興味がないんだ。

咬まれたら勿論だが、多分引つ搔かれたりしても奴らの仲間入りするだろう。

今！今のうちに奴らを殺す覚悟を決めておくんだ！

次、遭遇するゾンビは……仲の良かった友達かも知れない。もしかしたら大好きなお母さんや家族かも知れない。

俺だって……いつまで君を守るかわかったもんじゃない。

もしかしたら、俺がゾンビになって君を襲うかもしれないじゃないか。

警察も……多分……自衛隊もあてには出来ないだろう。

自分の身は自分で守らなきゃならないんだ。」

納得したのかはわからないが、少女は^{マチェット}蛮刀を両手で握りしめて、這いつくばるゾンビに対峙する位置まで自分で歩いて行った。

少女はたつぷりと3分は固まったようにじっとしていた。かわいそうだが……乗り越えて貰わなきゃなんないんだ。

俺は心を鬼にして、少女自身が殺さない限り自分は手を貸さない決心でいた。

固まったその場を変えたのは、爺さんゾンビだった。

左足が動くことに気がついみたいだ、それまでやたらと腕を動かそとしていたのを断念して？左足だけで器用に少しずつ前進しようとし始めた。

「ヒイッ！」

そんな状態でも、自分に迫ろうとする……自分を食べようと必死に近づこうとしているゾンビの醜悪な姿に少女は小さく叫びをあげた。

少女はおもむろに蛮刀を引き上げて、ゾンビの眉間に真っ直ぐに突き入れた。

「バイバイ……エロ爺ちゃ……ん」最後は嗚咽にまみれた泣き声にかき消された。

俺は必死に泣き声を押し殺している少女を、後ろからそっと抱きしめてやるしか出来なかった。しかし、何時まで泣かせておくわけにはいかない。

ゾンビの額に突き刺さったままの蛮刀はきつく握りしめられていたが、出来るだけ優しく指を一本一本と剥がしていき、爺さんの服で血をぬぐい取り鞘にしまった。

かなり離れたところだが数体のゾンビが見えたところで、俺は少女の顔を覗き込み少女の目の焦点が定まっていることを確認し

「さあ！車に戻って店ん中に入るぞ。1人で車まで歩くんだ！大丈夫だろ！」

「もう、結構おじさんってスパルタなんだね。もう少し甘えさせて

くれたっていいじゃん！」

少し笑顔が戻ってきたみたいだ。

「見てみな！」

俺は駐車場の右外に向かって真っ直ぐにバット指した。

「うわあ〜。いち・にい・さん・しい・ごう。まだ、その後ろにも居てますよ。やっつけないんですか〜？」

泣いたクセにもう笑ってやがる、現金な年頃だわな。

「馬鹿なことを考えるんじゃないっ！戦うのは最後の最後だよ。

見つけたたんびに始末していくなんざあ。命を捨てるようなもんだ。やり過ごせる時には、無理はしないほうがいいって」

たつたと車に戻り始めると

「『攻撃は最大の防御なり』って言いますよ？」

追いかけてながらも、しつこく食い下がってきた少女に

「俺たちや、非戦闘員なんだよ。攻撃力もないのに、何が『攻撃は最大の防御なり』だよ！こんなときには、三十六計逃げる勝ちだよ！」

車に乗り込み、ドアロックをかけ彼女の指示通りに店の奥まったところにある従業員用の車庫に車を入れた。

いつでも、車で避難できるように最低限の物資だけを持ち出した、確実にドアがロックされていることを確認した後、振り向きながら少女にたずねた。

「店に入る方法は、店の表玄関と、この車庫からの扉以外にある？」

少しの間考えから少女ははつきりと断言するように言った。

「店の裏に扉が1つあります。けど、最後に出るときに内側からチーンロックをかけているんで、裏口からは誰も入れないかと思いません。」

車庫には、車で入る場合はこのコントローラーで扉を開けます。それ以外は、もう一つの車庫の横に出入り用の扉があります。今は鍵を閉めてます。扉の鍵は、店長と私だけしか持ってないです。内側からは暗証番号で開けるんです………

車庫から、店への出入りはそのキーBOXに暗証番号を打ち込むんです。暗証番号といっても、バイト用の社員番号ですけど」

「キーBOXに暗証番号を入力して出入りか！コンビニもハイテクになってんだなあ」

俺は、思わず関心してしまった。

「その代りにタイムカードとかはないんです。入店する暗証番号を入力した時点がスタートなんです。だから、シフト時間の30分前と1時間後までしか入力を受付ないんです。今は、店長がいなくて、私の番号はオールフリータイムで入力できるんですけど……」少女はそう説明しながら、テンキーの数字をタッチしていた。

「ピーー」という認証音と同時に「ガチャッ」という鍵が外れた音

がして、少女は左手で扉を押しながら右手で壁のある電気のスイッチを押した。

入ったところは通路のようになっていて、少女はほとんど10メートルほどの通路を進んでいった。通路が途切れたところに従業員用だろうか？トイレがあり、右側に店に通じていると思われる扉があった。丁度レジの横側の死角に出て回り込むようにレジに入るようになっていた。

誰もいない売り場は、思っていたより大きく感じられた。

「誰もいないと、結構広く感じるもんだね。」

田舎者のように、キョロキョロとしながら俺は店の中を何を探す訳でもなくブラブラした。

「通常のコンビニより30%程広いんだそうです。確かに前のお店より広くなりましたよ。何か、普通のスーパーみたいに冷凍食品なんか豊富になったんです。」

オープン前だから、惣菜パン、菓子パン、おにぎり、お弁当なんかはないですけど……」

「あつ！2階に夜勤用の仮眠室があるんです。仮眠室と言っても、普通の2LDKの部屋なんです。冷蔵庫やお風呂もあるんです。」

もう、日付が変わる時間になっていたので、二人で手分けしながら数日分程度の食料などを買い物かごに放り込み数度と2階を往復した。

さらに、俺たちは1階で何とか工夫すれば入れそうなところ、例えばトイレの小窓などを補強したりした。（とは言ってもガムテープ

と段ボールと、車から材料と道具を使い入りにくいように針金で窓に蜘蛛の巣みたいな蓋を作り、ネジで壁に取り付けただけだが」

補強しながら1階の間取りを覚え、扉を開ける暗証番号などを教えてもらいながら作業をして、気がつくと深夜の2時を過ぎていた。

2階に上がる途中で少女はダウンしてしまい、何とか抱きかかえて2階のベッドまで運び寝かしつけた（既に食料を運び入れた時に暖房をいれておいて助かったぜ！）ところで、本来、風邪引きでくたばっていた俺の身体はゾンビ騒ぎで溢れ出していたアドレナリンを使い果たんだろう、グルグルと回る天井を眺めながら俺の意識も、遙か彼方に吹っ飛んでいった。

休憩前（後書き）

ご意見・ご感想 是非是非 お待ちしております。

休憩／第三步（前書き）

2011年の第1弾は田中さんにゆずりましたので、親父は第2弾で投稿させていただきます。

今回、初めて名前が出てきます。

ご愛読の程宜しくお願いいたします。

休憩／第三步

「なあ、俺たち付き合ってもう2年になるじゃん！17歳で経験してないカップルって校内でも少数なんだぜ。なあ、今度のクリスマスには・・・なっ！」

そんな、無視するなよ！可愛い顔が台無しだぜ。俺だって、操を立てるって言つか・・・

コンパや飲み会でのお持ち帰りのチャンスも全部けってるんだぜ！」

「H・H・H！会えばエッチがしたい、したい、したい、ばっかりじゃん。雰囲気も何もなくて女の子がそんな気分になるわけないじゃん！今の君の顔って・・・盛りのきた猿みたいな顔になってるよ。」

「そんなこと言うなよ。この間だって手前まではいったし、お前も結構濡れてたじゃん。あの時のお前の顔が忘れられないんだよ！な！今度のクリスマスあたりで、結構洒落たラブホも友達に聞いてあるんだ。」

「もう・・・離してよ！重たいってば！ゾンビに追いかけてまわされていうのに・・・何呑気なこと考えてんのよ、馬鹿！」

きやああああ～出た・出た・出た！その角から一杯出て来てる！いやああああ～っ」

「に・逃げるぞ！走れよ！」

「駄目！腰が抜けて動けないよ！助けて！おぶってよ！」

「や・やだよ！てか、お前をおぶったら走れないじゃん！追いつかれたら喰われるんだぜ！ごめん！俺逃げるわ！お前も何とか切り抜けるよ！」

「あ！ヒロ！ヒロ！……女の子を残して逃げるなんて最低！誰か助けてよ……」

•

「早く逃げないと危ないじゃないか！何をやってるんだ。直ぐそこまでゾンビが来てるんだぜ！……胡桃ちゃん？……」

「誰？」

「あっ！やっぱ胡桃ちゃんだ。俺！工藤信一！ほら、幼稚園の時」

「えっ？工藤君って小学校の時に引越したんじゃないかったっけ」

「用事で今日来たんだけど、思いつきり変なことに巻き込まれちまって！バットが手にはいったんで何とか無事だけど、ほら立てるか？」

「工藤君！後ろ後ろ！」

「てめえ〜！くたばれ！くたばれ！胡桃ちゃん逃げろんだ！」

「はあはあはあ．．．ここまでくれば何とか．．．いや！また来たぞ！ヤバイあつちからも．．．胡桃ちゃん！俺の肩に乗って！早

く！早く！電信柱によじ登るんだ！早く！」

「工藤君は？」

「俺は、胡桃ちゃんが登ったら直ぐに続くから……早く」

「工藤君！工藤君！早く登って！早く！」

「ごめんな！一人じゃ電信柱の登り棒には手が届かないんだ。出来るだけ、やつつけるから、誰かが助けに来るまで頑張るんだぜ！久しぶりに会えて良かった。最後までくじけるなよ！」

おーーーーーら！かかってこいや！バケモノども！！殺ってやらう
」

「工藤くん！工藤くん！いやあああああああ~~~~」

「たつく！アンタが仕事！仕事！を言い訳にして、家の中のことを何もしないから子供たちが真似るんだわ。いい加減にしないよ！」

「俺が仕事をしているから、みんなが飯を食えてるんじゃないか！」

「ハン？『金』だけ持って帰ってたら子供は育つって言うの？食事の用意をしたり、勉強を教えたり、主婦をなめるんじゃないわよ！そんなに、仕事をしているのが偉いのなら、私だって主婦業をしているのよ、見合う給料を出さないよ！」

「ハア？そんなの出つこないじゃないかよ。毎月だってギリギリだろが！」

「誰が遣り繰りしてると思ってたんのよ！全部、私がやってんだからね！足りなかったらパートにだって行ってるし、アンタ、一度だって私に働いて下さいなんて、頭下げたことある？何時だって私が先々を考えているから家がなりたってたんじゃないの！ぼけえ！」

「ほら、都合が悪くなるとすぐに黙りこくるばかり、そんな姿を子供に見せるから子供も真似するのよ！いい加減にしろさいよ！黙ってるんなら出で行きなさいよ！役立たずが！」

「叩くなよ！叩いたって、何の解決にもならないじゃないか！」

「きiiiiiiiiい！悔しい！悔しい！アンタなんか死んじゃええばいいのよ！」

「工藤くん！工藤くん！工藤く~~~~ん！！！」

「痛い、痛いってば」

「ん？」

俺は、寝てたのか？おおっ！このぶよぶよしたのは何だ？えっ？女子高生？えっ？俺、女子高生に手出しちゃったの？

「痛いって！」

女子高生の奴、寝ぼけて男の名前を叫びながら叩いてきてやがる！

「あつ！そうか！昨日はゾンビ騒ぎで……この子を助けたんだけ！」

痛いって？死んだら痛いかわからないじゃない！痛いのは生きてる証拠だよ、工藤くん！生きてて良かった。あんな奴にバージンをあげないで良かった！工藤くんにならあげれるよ！く・ど・う・く・ん（ハート）

「くん。え・えっ！工藤くんは私の目の前でバケモノに食べられちゃったんじゃない？誰？……」

いやあああ。どこのおじさんなの！」

少女は、いきなり夢から覚醒し、ベットの隅に飛んでいくように逃げながら

「誰ですか？何で私と同じベットにいるんですか？って言うよりか、やったんじゃないでしょうね？」

少女はいきなり、スカートを捲り自分のパンツの中に手を入れた。

「大丈夫だあゝゝ。

でも、私のパンティーと違う！お・じ・さ・ん！何をしたんですか？

えっ？何を笑ってるんですか！失礼じゃないですか！」

「いやいや！笑ってすまない。昨晚は、お漏らしに、よだれ顔に……今朝はパンツに手えつ込んで……『大丈夫だあゝ』だろ、思わ

ず笑っちゃって……失敬・失敬。」

思い出したようだな。少女は真つ赤な顔をしてベットの隅でモジモジとし始めた。

「あのー昨晩は助けていただいてありがとうございました。で、寝ぼけて叩いちゃったみたいで……すみません。」

「まあまあ、気にしないで！あんなむごい経験すれば、誰だって嫌な夢の一つや二つ見ても当たり前だよ。」

「そういえば、自己紹介もまだだったね。俺は、近藤雄一<こんどう ゆういち>。一応結婚もしてるし、娘も2人いてる。こんな状況だから、信用しろとは言いにくいが……一応は紳士だからね。」

「私は、根本胡桃<ねもと くるみ>17歳です。鈴蘭台高校の2年です。」

「くるみちゃんか！鈴蘭台だったら3年生に近藤由真<こんどう ゆま>って知ってる？上の娘なんだけど」

「近藤さんって、生徒会の書記で……背で高くてポニーテールにしている人ですか？」

「そうそう！その父親！」

と無邪気に雄一は自分を指さしていた。

何か、無邪気なおじさんだな！悪い人ではないそうね。そうよね、昨日もわざわざ助けてくれたんだから。その上、ここまで連れてきてくれたし。

少女は、につこりと雄一に微笑みかけた。

いいなあ〜美少女の笑顔は、しかも巨乳だし・・・よこしまな親父と化している雄一であつた。

「まずは、食事だな。その後に情報が入手出来ないか検討しよう。さつきはすまなかつたね。君をベットまで運んだまでは記憶があるんだが・・・そのまま、俺もボタンキューだったみたいだ。

もし、今晚もここに籠城するんなら、俺は部屋の隅で寝袋を使うから。」

それから、俺たちは手分けして作業に取り掛かった。くるみちゃん、1階の店舗で、ポテトやから揚げを作るといつて降りて行った。

彼女が食事を作ってくれている間に俺は、窓から外の様子を確認したが、やはり昨日のことは夢や幻ではなく現実のことであつたことを痛感できるように、そこには多数のゾンビが闊歩していた。

相変わらず携帯電話は不通で、俺は1階にある固定電話から発信が出来ないかと確認をしたが、110番は混線しており、携帯電話にはやはり不通であつた。警察署への直通電話番号も混線の状態らしく、寒々しいアナウンスが流れるだけであつた。

テレビは、殆どのチャンネルがテロップで各地域の避難場所を流しているだけであつた。その中で唯一生の情報を流しているのが、あるFMラジオ局であつた。

そのラジオ局は、県庁所在地の中心街にあるガラス張りのビルの4階と5階に局を構えているらしく、緊急放送用に2週間程度は放送を維持出来るように、人員や設備や備蓄品を備えているらしかった。

また、ガラス張りのおかげで早くに異変に気づき局内への通路の防火扉を作動させたため職員30名ほどが無傷で残っているらしかった。

「では、今までに確認出来た内容を整理します。街を徘徊しているバケモノは映画や小説のゾンビそのものと思われます。よく聞いて下さい。むやみに外出は避けて下さい。

まず、ゾンビに襲われて死亡した場合は100%ゾンビとして生き返ることになるみたいです。

噛まれたり、引つかかれたりして傷を受けても、数時間で死亡してしまいゾンビになってしまいます。

ゾンビは、頭部への打撃で脳を破壊するか、頸椎や背骨を折るか破壊しない限り死ぬことはありません。

市内の大病院の観察医に先ほど電話が繋がり、ゾンビが生物科学上で餓死などで死亡するかと聞いてみましたが、死体が歩き回ること自体の説明がつかないことと、食した人肉をどのように消化してエネルギーとしているかの構造が不明なため、検討もつかないとのことでした。

常識で考えた場合、血液の循環がなくなることによって身体は死後硬直と言って硬くなるのですが、ゾンビは腐乱していくだけの様子です。

また、通常は人間として身体の各機能、特に筋肉などはある程度の負荷がかかる場合に力を弱める本能が人間には備わっています。ゾンビはその本能のリミッターがない様子で非常に強い力を持っているそうです。

え、今、偶然に。市に出ていた中継車でゾンビから逃げることに成功して車の中で籠城しているクルーから連絡がはいりました。

・・・・・・

えっ？これ？こ・これを読むんですか？・・・・・・いんですか？

失礼しました。あまりにもショッキングな内容だったので、本当にこのままお伝えしてよいのか判断に苦しむのですが・・・・中継車のクルーによると、近くの避難所に向かっていた自衛隊と警察の混成部隊がゾンビと対峙して全滅し、さらに全滅した部隊の警察官や自衛官がゾンビとなり避難所の避難民を襲い始めたということです。クルーは取材で同行しており、1名被害がでしたが幸運にも逃げることに成功したそうです。

政府は、自衛隊を再整備しているとの情報也未確認ですが届いております。

また、先ほどスタッフがインターネットで確認したところ、この現状は日本ばかりではなく、欧米やアジア、アフリカ大陸でも発生している模様です。

では、電源の確保の為に一旦放送を中止し、次回は20時に1時間状況をお伝えします。

なお、感度がよければですが、唯一被害のない北海道のFM局が不定期ですが、政府の発表を流しております。○。Hzでご確認下さい。ー

なんてこった、全世界で発生だ？てことは、アメリカの援助は期待出来ないってことだよな。在日米軍はどうするんだろう？今更、本

国に戻っても間に合わないだろうし、火力や戦力から言えば自衛隊なんかとは比べ物にならないと思うんだが、たしか、在日米軍の司令官って、親日家で奥さんも日本人だったよな！日本に展開してくれていたらありがたいんだが、沖縄や横須賀の状況次第ってことかな。

俺は、念のために北海道のFM局に周波数を設定したが、この時間に放送がないのか？受信出来ないのか反応がなかった。一応、何かを受信できた場合を想定して音量を落としてそのままにしておいた。幸いこの地域の電力は活きているようなので、電気の心配をする必要はなかった。

そうしている間に、彼女が料理を用意して持ってきてくれた。フライドポテトから揚げを揚げて、電子レンジで煮物にお米をチンしてポリユームたっぷりの朝食を用意してくれていた。朝食といっても、2人とも起き出したのが11時近くなので実質的には昼食だった。

食事をしながら、現在までに判明した状況を彼女に説明した。泣き叫ばれたりしたらかなわないところであつたが、なかなか頭のいい子のように、置かれている状況をそのまま受け止めてくれた。

「これからどうするんですか？」

「このコンビニをベースキャンプみたいにして、まずは近隣で武器になりそうな物を確保しないといけないな。今の装備では俺1人分だしな。」

「近藤さんは、どこかに行かれる予定ではなかったんですか？それより由真先輩とかご家族はどこにいらっしゃるんですか？」

「ああ、家族ね、俺が風邪を引いて寝込んでいることをこれ幸いにS県の極楽温泉に旅行にいつちまいやがったんだ。そこにもゾンビが現れたらしいが、自衛隊の救助が来て客と従業員と自衛隊で旅館にバリケードを築いて籠城しているらしいんだ。」

まあ、行けるかどうかは分からんが一応父親なんでね、救助に思っただけを出たところなんだ。

普通に考えたら、到着出来るはずはないんだけど。俺って、ゾンビマニアなもんで、こんな時にも対処できる装備とか持ってるし・・・もし、生き残った暁に再開でもしようもんなら、助けに来なかったと3日は文句言われるからな。」

近藤さん笑いながら言ってるけど、家の中では虐待されてるんだあ。普通はお父さんが風邪ひいてたら、旅行なんかいかないもんね。結構かわいそうなんだ。

でも、もしかしたら、浮気とかして家族に相手にされてないのかもしれないわ。そしたら嫌だな。当分2人つきりかもしれないのに・・・どうしよう

「なんで、家族にそんな仕打ち・・・。風邪引きで寝込んでいるのに放っておかれるんですか？由真先輩ってそんなに冷たい人には見えないんですか？」

いやあゝ やさしい娘さんだなあゝ 心配してくれてるんだ。俺は、有頂天に家族といかに、嫌、家族というより嫁と不仲になったかを延々と10分近く喋ってしまったていた。

なあに！ドン引きの内容じゃん！私は昼のテレビのみの。ん。じやないんだから、私に喋ったってどうしようもないじゃんか！でも、なんか、悪びれず喋っている近藤さんって憎めないなあ。結

構かわいい感じだな！

「奥さんと不仲って・・・てつきり浮気かと思っちゃって！違ったんですね。良かった！」

「何が良かったのかは分からんけど、こんなおっさんが浮気なんかできるかよ！」

おかしい、鼻を鳴らして自慢してる。子供みたいだな。でも、結構シブ面でいい感じと思うんだけどな？でも、私ってファザコンの気があら・・・かな？まあ、いい人みたいだから安心し・・・ように

「ところで、くるみちゃんのご家族は？」

「私のところも、お父さんとお母さんと弟が北海道に旅行に行ってるんです。本当のお父さんじゃないんですけど・・・弟も・・・でも、北海道は安全なんですよ。ちょっと安心できました。」

「ごめん。悪いことを聞いたみたいだね。」

「いえ、全然問題ないです。義理ですけど真面目でいいお父さんです。弟も10歳も離れた小学生なんで結構かわいいですし・・・なにより、お母さんの幸せそうな顔が見れるのが一番です。」

私はバイトもあるし、クリスマスも近いんでデートとかもあったで・・・

でも、デートの相手・・・結構イケ面で格好いいんだけど何かあると『やらせろ』とかエッチばかりが目的みたいな奴で、あっ！まだ何にもしてないですよ。ゾンビを前にして一人で逃げちゃった

んです。

その時に、偶然に幼稚園の時の幼馴染が助けてくれて……グスン・グスン……私を逃がすために電柱に登るのに肩をかしてくれたんです。自分一人では登れないのを承知の上で。最後は電柱に近づくゾンビに……」

少女は途中から嗚咽を鳴らしながら、その幼馴染が命がけで電柱に逃がしてくれたことを説明した。

「そうか。」

でも、男が女の子のために命をかけたんだから本望だと思うよ。悲しいかな、ゾンビになっちまったら自分が他の生存者を襲う羽目になるんだから辛いけどな。その彼が徘徊せずに死んでることを祈るよ。」

「グ・グスン。大丈夫です。彼は誰も襲うことなく……最初に襲った……その……近藤さんに……」

その先は大粒の涙・涙で少女は声が続かなかった。

「そうか、電柱の時の学生君か。彼を目で追っていたから俺にも注意することができたんだ。」

悲しいことだけど、彼が他の人を襲って犠牲者を増やさなかったことがせめてもの救いだよ。ほら、泣いてばかりいたら駄目だ。月並みだけど、その彼の分まで生き延びなきゃ！

この先はまだまだ長いんだ。湿っぽくなるのはこれで最後にしよう。

さっ！早く食べて体力をつけて、明るい内に近隣、出ければ警察署

の状況や武器の入手など、やらなきゃならないことは山ほどあるんだ。元気だして！」

近藤さんは家族を探しに行くんだから私は邪魔者だよ。早く何でも自分で出来るようになって近藤さんに迷惑がかからないようにしなきゃ！くるみはこの先、自分が置いて行かれることを覚悟した。

「はい。……そうですよ。頑張って生き抜かなきゃだめですよ。」

近藤さんもS県にご家族を救い出しに行くんでしょう？私は足手まといだから……当面はここにいれば食べることはできるし……気にしないでS県に行ってくださいね。」

「おいおい、つれないこと言っこなしだぜ。まあ、家族は家族で助けに行くことには変わりはないんだが……正直一人ではキツイとっているんだ。くるみちゃんに会う前にもゾンビと対峙したんだが、やはり後方とか死角があるんで単独行動ではS県まではむりだと思っているんだ。ただ……」

「ただ？……ただ、何なんですか？」

少女は、置いていかれない様子に安堵したのか、若干首をかしげながら雄一をジッと見つめた。

いやいや、そんなに見つめられると困るんだが……下手なアイドルよりかわいいじゃないかい！これが、萌え萌えってやつか？

「この惨状がいつまで続くのか全然検討もつかないんだ。このまま、無傷の人達が自宅で籠城して2、3日や1週間位でゾンビが餓死するかも知れないし、もしかしたら、逆にゾンビは餓死はせずに籠城

している側が食料がなくなり、外に出てきて一気にゾンビに襲われてゾンビが大量発生するかも知れない。

このコンビ二でなら太陽光発電があるから最低限の電力はあるし、水も食料もたんまりとあるから一人や二人なら数ヶ月でも籠城できるだろう、つまり、直ぐに死ぬことはないんだが、S県に行くとなると死と隣り合わせになるってことなんだ。

自衛隊も再編成されているらしいから、ここで籠城していれば助かる確率は動き回るより高いだろう。だから、君にS県まで一緒に行こうとは言いにくいわけなんだ。

冷たい言い方かも知れないが、俺だって・・・家族に連絡が取れずならしばらくここに籠城する方を選ぶさ。だがS県に居てるのが分かってるんで行かざるを得ないだけさ。

S県のことについては、俺と来る来ないは君の判断に任せるよ。当面、そうだな今日明日は警察署の確認や武器の確保があるんで、ここを根城にするから・・・その間は付き合ってもらうよ。今後の君のための武器なんかも探さなきゃいけないしね。

さあ、残りを食べよう。せつかくの飯が冷めちまう。」

「あの、私が付いていくと迷惑ですか？足手まといになりませんか？一人でここに籠城するなんて・・・耐えられません。連れて行ってください。お願いします。」

俺は、真剣な顔の彼女にこれ以上危険な真似はさせたくなかったが・・・彼女の眼に負けてしまった。

「分かった。俺は全力で君を守るが・・・後は『運』次第だぞ！」

「本当なら・・・近藤さんが気づいてくれなかったら・・・私は今頃外に居てるゾンビの一員でした。でも、今はこうして生きています。近藤さんのおかげなんです。」

「ニヤン！！！！！！」(ボヤッキーじゃなくて、アタイがアンタを見つけたんだよ！)

ドロシヨ様が忘れるなど猛然とPRをしながら、ここが自分の居場所とでもいうように、くるみの膝の上に飛び乗り、ゴロゴロと喉を鳴らした。

食事も終了し、明るい内に警察署の状況を確認すべく俺たちは駐車場に降りていった。

「くるみちゃんは何か運動とか武道とはやってたのかな？」

見た限りは、運動をしているようには見えなかったが『人は見かけによらない』という諺もあるので、念のために確認を試みたところ

「最近はやってないですけど、小学1年から中学3年まで剣道をやってました。一応初段で県大会でも、個人5位なんです。ね！結構二の腕に筋肉があるでしょ？」

といいながら、細い腕を俺の前に突き出していた。その腕で木刀が振れるのなら、俺の嫁さんなら電柱を振り回せるんじゃないかと思うほどだった。

「ほら、触ってみてくださいよ。」

無邪気にくるみちゃんは、俺の右腕に身体をぴったりとつけて自分の腕を俺の左手で触らせようとしていた。

正直に言えば二の腕の筋肉より、俺の右腕に押し付けられたプヨプヨの丸い弾力のある物体の方に気が行ってしまった。また、これが

柔らかいんだわ。若いつてのは、いいねえ。

「経験者なら、この木刀を持って動いてもらおうかな。」

俺は、担いでいた鞘に入った木刀を外して彼女の目の前に突き出した。彼女は、木刀を鞘から引き抜き、軽くブンブンと素振りでもするかのよう木刀を扱った。

「普通の木刀より重いですよね。芯に何か金属でもしこんでいるんですか？でも、結構いい感じのバランスじゃないですか。近藤さんも剣道の経験者なんですか？」

そうなのか？俺は剣道やらの格闘技については殆ど経験がなく、自己流のゾンビ格闘戦用の練習しかしたことがなかった。（といつても、自分がどんなにバランスを崩しても相手の足を払ったりバランスを崩させたりして、とにかく相手をひっくり返す、亀さん仰向け起きれません殺法なんだが・・・）

あの親父の自身ありげな顔は、自慢の一品を作れたことだったみたいだな。そう言えば、社長の奴無事に生き残ってるのかな？

S県で家族の安否を確認したら、社長の工場（兼自宅）に様子を見に行こうか、帰り道だしな。てか、自分で言うのもおこがましいが、またまた無事に帰る気満々だな。

「いや、俺は経験者じゃないんだ。対ゾンビ兵器として有効そうなので知り合いに作成してもらったんだ。かなり加工しているんで、簡単には折れないということだから思う存分ぶった叩いても大丈夫だと思うぞ。」

「わかりました！何か、忍者みたいですね。『セーラー戦士！くるみたん』って感じですか？」

てか、セーラーじゃないでブレザーですけど・・・」

うっっん。これがまさしく萌え萌えってんだろうな。おいおいクルクル回るなよ！スカートが捲かれて・・・パンツ見えてんぞ！まあ、見えても自分の娘のパンツじゃ萌えないわな。

「おい！クルクル廻ってつとパンツ丸見えだぞ！さあ、出発するか
ら車に乗って！」

駐車場の扉が開き、俺たちは安住の場所から危険な街中へと車を走
らせた。

「これが、このコンビニの見納めなんてことにはならないですよ
ね？」

少し切なさづくるみちゃんがコンビニに振り返っていた。

「大丈夫。と信じるしかないさ。こんな状況になっちまったら、信
じれるのは自分だけさ。まあ、俺達の場合はお互いが信じあい助け
合うことさ。」

「そうですよね。生き残れますよね・・・どうせ死ぬのなら
お風呂に入っておきたかった。それに・・・（バージン）のま
までは死にたくないですから、頑張ります！」

「えっ？何のままでは死にたくないって？ごによごによじゃ、わか
んねえよ！」

「気にしないで下さい。私の問題ですから。」

もしかしたら、このおじさんが初体験の相手だったりして・・・って考えすぎかな？でも、完全に白馬の王子様と同じ状態だし、このままずっと一緒だったら・・・きゃあゝゝゝ、エッチ！

「おいおい。何を顔を真つ赤にしてんだ？しょんべんなら早めに言ってくれよ！女の子は男と違って場所を選ぶからな！」

「近藤さん。女の子に向かって『しょんべん』はないでしょ！それってセクハラ発言ですよ！」

突然車が蛇行して、くるみはとっさにダッシュボードにしがみついた。

な・何があつたの？ゾンビ？

休憩 第三步（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第三步 武器調達（前書き）

小説の執筆を携帯からPCに変更して少し長めにしています。また、その内に携帯からに戻るとは思いますが・・・出来ればPCから執筆するようにします。

第三步 武器調達

蛇行する車にびっくりして、ダッシュボードにしがみついたくるみは、助手席から見える範囲にゾンビがいないことに気づき、運転席の近藤を見た。

近藤は、蛇行する車を何とか自分のコントロール下に置こうと、必死に慌しくハンドルを操作し車の態勢を戻そうとしていた。近藤のハンドル捌きのおかげか、車は何とか態勢を取り戻したので近藤は静かに車を徐行させた。

「な、何があっただんですか？」

「ごめん、ごめん。道路が濡れていたんで……てっきり、血かなんかだと思ってそのまま突っ切ったんだが……どうやらオイルが何かだったみたいだ。

何で、こんなところにオイルが撒き散らされているんだよ！」
「た

その時、くるみは少し離れたところに横転している巨大な車を見つけて指差していた。

「あ！あれ！あれって昨日の大きな車じゃないですか？」

くるみに指摘され方向を見ると、確かにダンプカーが横転していた。近藤は、慎重にゆっくりと車をダンプカーに近づけていった。

「昨日のダンプかどうかはわかんねえが……タイヤには相当な血糊みたいのがついてんな。たぶんゾンビを轢き殺しまくって、タイヤが滑ったんだろう。」

「ほら、向うを見てみな……凄え数のゾンビが潰されてる。」

近藤が顎で指す方向を見ると、潰された人型が何十と地面にこびり付いていた。

「！・・・・・・。す・すみません。どめて・・・・」

やべえ！くるみちゃんの顔が、真っ青になつてゐる！いや、今度は赤くなり始めているぞ！

慌てて、車を止めた近藤は、念のためにバットを手にしながら助手席を回ってドアを開けてくるみを車の外に出した。

「うげえええええ。うげえええええ。ごほっ！ごほっ！」

先ほど食べた食事が消化され始めた状況で、くるみの口から大量に吐き出されていた。

しまった！女の子なのに……いきなり、アレを見せたのは不味かったなあ。

周囲を警戒しながらも、近藤はくるみの背中を楽しになるようゆっくりとさすってやった。

「ごめんな。いきなりは・・・ショッキングだったよな・・・
いや、本当に申しわけなかった。」

近藤はオロオロしながらくるみに平謝りをしていた。

ひとしきり胃の中の物を吐いたくるみは、右手で近藤の言葉を遮り

ながら

「いえ。いいんです。近藤さんの……ゲホッ！げほっ！……近藤さんのせいじゃありません。

私が弱いから……ゲホッ！げほっ！……もう直ぐ、直ぐに落ち着きますから……」

数分後、くるみは少し落ち着きを取り戻し、近藤の差し出したペットボトルの水で口の中の苦くて酸っぱい味を消そうと口をゆすいでいた。

「ハアハアハア……やっぱきついですね。覚悟はしてたけど……やっぱり怖いです。」

くるみはブルブルと震えだしていた。

近藤は優しく、くるみを抱きしめ大きな手でくるみの肩をしっかりと抱き、ゆっくりと車に誘導し助手席に座らせ、自分は運転席に乗り込んだ。

「道のと真ん中だと危ないからね。車の中ならばらくは心配ないから……その……」

「

何かを言いたたげな近藤であつたが……言い出すことが出来ずに、車中はしばらくの間静寂に包まれた。

静寂を破つたのは以外にもくるみであつた。無理やりに、少し引きつった笑顔をつくり、ことさら元気そうな声をだして

「ごめんなさい。心配かけちゃって・・・あのまま外にいたら、またゾンビに狙われるんですね？それに比べれば・・・潰れた死体は襲ってこないんだから。」

慣れなくっちゃいけないんです。さっき、近藤さんに言われたばかりなのに、私って・・・

弱虫になっている場合じゃないです。」

かわいい顔に似合わず、芯の強い女の子だな。僅か30分足らずで何とか普通に話せるようになったじゃないか。
この娘となら、この先も乗り越えられるかもしれないな。

近藤は、くるみの精神力に感心していた。

「正直、これで駄目になったかなって思っちゃったよ。でも、君は強いよ。大丈夫だ。俺が保障するよ。」

少しぎこちない笑顔を作りながら近藤はくるみを励まそうと声をかけた。

「ハイ。頑張って、生き残りたいです。頑張って、生き残れたら北海道に旅行に言ってるお母さんに会えますよね！」

「そうだよ！その意気。『生き残る』ことが大切だ。こんな世になつたけど、希望を捨てちゃいけない。希望は一旦捨てちゃうと、なかなか次に拾うチャンスが来ないんだ。」

希望さえ持っていれば・・・こんな世でも何とかなるもんさ。
ある格闘家の、名言と、俺は思っているんだがこんな言葉があるんだ。

『人は歩みを止めた時に、そして、挑戦をあきらめた時に年老いて

いくのだと思います。

この道を行けばどうなるものか、危ぶむなかれ、危ぶめば道はなし、踏み出せばその一足が道となりその一足が道となる、迷わずゆけよ行けばわかるさ。」

何故、こんな世界になったのか、生物兵器なのか？奢れる人類への神の鉄槌なのか？そんな難しいことはわかんねえ。

今の、俺達に出来ることは『生きる』ことだけなんだ。

生きれば、多分・・・何故こんな世界がいきなり現れたのか分かると思うんだ。いや！こんな世界でも生き残りことで抵抗出来るんだ。進むしかないんだ。

こんな、親父とのコンビで申し訳ないがね。生き続ければ、また違うパートナーと出会うだろう。普通の世界と同じように出会いがあるんだ。今は、ちよつと・・・非現実的な異常な状況なだけさ」

「なんか、わかったような、わからないような・・・感じなんです、要は『行くっきゃない』ってことなんですよね？」

近藤は、車のアクセルを踏みながら

「そう。進むしかないんだと俺は思う。警察署に向けて出発進行だ。」

くるみの胃の中は空っぽになったが、近藤との絆はいつそう深くなっていた。

やっぱり、運命の人なのかな？友達は初体験は経験豊かなおじさんがいいとか言ってたけど・・・あゝこんな時に私ったら何考えてんだろ。ダメダメ！

何か、激しくブツブツと言ってるけど・・・青くなったり赤くなったり、面白い娘だよな。娘達ともこんな感じで接することが出来りゃいいんだが・・・どうなるかねえ。

二者二様にそれぞれに悩んでいたが、辻や街角から現れだしたゾンビが悩む時間を生き延びることに専念する時間に変えてくれた。

「右方向に、えーっと・・・１０・・・１４いや１３体。その後ろにもいてる！結構できましたよ！気持ち悪いのが・・・」

現代っ子は頭の切り替えが早いみたいだな。人間ソナーみたいにゾンビを発見する度に数を数えて報告してくれるのはいいんだが・・・報告されてもどうしようにもないもんな。もういい加減に返答の仕方がなくなってきたぜ。

「近藤さん！次の交差点を左に曲がったら、警察署の前ですよね。警察、どうなってるんでしょうね」

「まあ、パターンの言えば、避難者が傷を隠して避難所に入り発病して内部から崩壊していくってパターンが一番想定されるんだが・・・順ちゃんが、俺の小説を読んではずだから・・・旨く行けば、避難者の受け入れは身体検査後ということもあるかもしれない・・・んだが・・・」

ハンドルを切って警察署の正面が見えた瞬間に、悪い方に予感が当たっていることが判明した。

警察署の正面玄関は開け放たれていて、ところどころに血溜りや壁に血飛沫が着いていた。

「どうやら、悪い方のパターンの方みたいだな。さてと、どうした

ものかな。」

俺は車を減速させながら、警察署を注意深く観察した。

「あつ！」

「あれって」

俺とくるみちゃんは同時に声を上げていた。

警察署の3階の窓から見える通路部分の途中に机が何かなんだろう、バリケードが作られていて警察官や避難者達が通路に存在するのが見えた。

同時に、バリケードには20体以上のゾンビがたかっているのも見えた。警察官達が慌てていないところを見るとバリケードは機能しているようにも見えた。

しかし、3階に俺達2人が助けに行くのは不可能だろう。20体なんて相手に出来る訳がない。

はてさて、どうした物かと考えあぐねていると、突然正面玄関から数名の警察官と避難者らしい一般人が飛び出してきた。どうやら3階に逃げ遅れたらしい。

「誰か出て来ましたよ」

隣でくるみちゃんも気づいたみたいだ。申し訳ないが、ここでくるみちゃんの判断能力のテストをさせてもらおうとするか……

「で……、助けに行くべきかどう思う。くるみちゃんは？」

「えっ！何で、私に聞くんですか？」

「いいから！くるみちゃんなら助ける？どうする？」

「うーん。」

くるみはジッと、飛び出してきた人々を観察して……

「駄目です。みんな。どこかしら怪我をしているように見えます。ゾンビに付けられた傷だったら……私達も危険にさらされますよね？近藤さん。」

「ご名答！多分、あの中の何人かはゾンビに傷をつけているんだろう。」

俺はくるみちゃんの冷静な判断力に満足しながら、車をバックさせていた。

「え？何故、後ろに下がるんですか？」

くるみは、逃げ出てきた人々から目を離さずに近藤に質問した。

「逃げてる奴らに気づかれたら嫌だろう？助ける訳にもいかないし、ゾンビみたいに轢き殺す訳にもいかないだろ。なら、気づかれないようにした方が、気が楽になるってもんだよ。」

言いながら、振り返るようにしながら車をバックさせている近藤に對して、くるみは肩を叩き

「もう、下がらなくてもいいみたいです。逆方向からゾンビが来て

襲われてますよ。」

無言で近藤は更に数十メートル車を下げたところで停車した。

私に、悲惨なところを見せないように気を使ってくれたんだ。やっぱり近藤さんって優しいなあ。

「さて、警察は使い物にならないということが判明した訳なんだが、くるみちゃんの覚悟が出来ているならもう一度行ってみたいんだが・・・いいかな？」

「私は・・・近藤さんに付いて行くって決めています。だって1人じゃ、10分も持たずにゾンビに殺されちゃいますよ。」

「よし！行くぞ」

近藤は再度警察署に向かって車を前進させた。警察署正面のロータリー型の進入路をゆっくりと進みながら、近藤はあるものを探していた。

「くるみちゃん。黒塗り・・・いや真っ黒で窓ガラスも黒い車があるか周りを見ておいてくれないか？車の形はこれと同じで四角いBOX型か、もしかしたら前が少し突き出しているタイプかもしれないとにかく、それに近い車を探してくれ。」

ゾンビが近づき始めたから、俺は奴らの相手があるんで宜しく頼んだぞ！」

言いながら、近藤はグイッとハンドルを切り、ゾンビを跳ね飛ばす算段を頭に浮かべながら車を加速させた。

「黒い車で四角い車ですね。」

くるみは、前後左右にくまなく目を向けて該当する車がないか探し始めた。

何度目かの軽いショック（近藤がゾンビを跳ね飛ばした振動）の後、車が曲がる瞬間に駐車場の奥の方に黒っぽい車があったのが見えたような気がしたくるみは

「戻って下さい。駐車場の奥にそれみたいのが見えたように思います。」

近藤は、車を急停止してくるみの指差す方向を確認し車をそちらに向けて進ませた。程なく、駐車場の奥に到着したところ、近藤が指示した通りの車が止められていた。

「おっ！これこれ！出勤前だったみたいだな。装備が積み込まれてたらしいんだがな・・・くるみちゃん！車から出るけど・・・いいか？出来るか？駄目なら残っていいからね。」

近藤が車のロックを外したところで、くるみは木刀を握る手に力を込めて、少し震える膝を左手で叩きながら

「私も行きます。何にも出来ないかも知れませんが、近藤さんの目の代わりくらいにはなりますよね！」

近藤は、くるみの目をじっと見つめて・・・大丈夫だと判断した。

「よし！行こう」

2人はドアを開けて車を降り立った。

「くるみちゃん、駐車場の入り口方向と・・・その建物からの出入り口の方を注意してくれるか？俺は、車の周囲を確認するから！」

言うや否や、近藤はバットを構えながら黒い車の後ろに歩いていった。くるみは駐車場の入り口と警察署からの出口を交互に見ながら、震えそうになる膝をこまめに足踏みをしながら耐えていた。

大きな音を立てて、突然建物のドアが開かれたと思ったら、近藤と同じ様な黒い服を着た人間が2人飛び出してきた。何か分からない言葉を発しながら手に持っていた拳銃を扉の奥の方に向かって構えた途端に

パン！パン！パン！と後ずさりをしながら撃ち始めた。

「あつ！あぶない！」

くるみが叫ぼうとした瞬間に、2人は車止につまづき、そのまま仰向けに倒れて後頭部をしたたかに地面にぶつけ動かなくなった。地面にはうつすらと血が滲み出していた。どうやら受身を取ることも出来ずに、後頭部を直撃して脳震盪を起こしている様子だった。

「どうした！銃声はどこだ？」

近藤はバットを振り上げながら車の後方から飛び出してきた。

「近藤さん？」

しゃがみこんでいた、くるみは思わず立ち上がり、声の方向を確かめた。そこには2名の特殊部隊隊員がゾンビにたかられ無残にも全身に歯をつきたてられていた。

「くら！目えつむるな！」

近藤は3体のゾンビを相手の必死にバットを振り回して戦っていた。

私が・・・私が、加勢に入らないと・・・行け！くるみ！行けるみ！

くるみは自分を必死に鼓舞し・震えをこらえながら立ち上がり、キリッとした顔で口を真一文字にひきしめて、ゾンビに向かって摺り足で素早く近づきながら

「きえつつ！ つーきいいいいー」

くるみが近藤を横から襲おうとしていたゾンビに渾身の突きを放った。木刀は見事にゾンビの後頭部を貫いていた。

くるみは突いた木刀を渾身の力で引き抜き、今度は自分に向かってきたゾンビに対して

「めえええええゝゝんっ」

と飛び込むような姿勢でゾンビの頭めがけて木刀を振り下ろしていた。元々、ある程度の重みを持たせた木刀は経験者の見事な『面』でゾンビの頭を見事に粉碎していた。

「やるじゃないかよ」

残る1体を退けた近藤がくるみの横に現れ、2人で黒服を襲っているゾンビに対峙した。

近藤がおもむろにバットを左手に持ち替えて、蛮刀を引き抜きゾンビににじり寄っていった。ゾンビは喰らいつくことに必死になっっており近づく近藤に気づいていない様子だった。

その様子を感じた近藤は、一気にゾンビの頭に蛮刀を突き刺し始めた。3体目のゾンビに蛮刀を突き刺したところで、残りの2体が近藤に対して手を伸ばし始めたが、近藤の逆方向で構えていたくるみの木刀に頭をくだかれていた。

「ハアハアハア……」

くるみは、膝を折り流れる汗のなか必死に息を整えようと足掻いていた。

まだまだよ。まだ来るかも知れない。早く息を整えないと……
優しく肩に手を置かれたくるみは

「まだ、まだ……ですよ。まだ来るかも知れないですよ。少し……震えてますけど……直ぐに直りますから……」

言いながら膝を震わし立ち上がり、まるでボクサーがファイティングポーズを取るように木刀を構えた。

「力を抜くんだ。緊張したら駄目だ。
良くやったよ！くるみちゃん。自信を持つんだ。大丈夫だ。2人で

10体近いゾンビを殺ったんだ。大丈夫大丈夫。……………
さあ、こっちへ来て手伝ってくれ。」

近藤はくるみを黒い車に連れて行き

「申し訳ないが、車の前で警戒しておいてくれ！ゾンビが見えたら教えてくれ。」

ガシャッ！近藤は黒い車の窓ガラスをバットで叩き割っていた。
割れたガラスをバットで払い、手を突っ込みドアロックを外し車の
ドアを開けた。

「よっしゃ！有る！有る！くるみちゃん、ゾンビは大丈夫か？」

「はい。駐車場のかなり先に何体かいますが、こちらには気づいて
いないみたいです。建物の中からも出てくる様子はないです。でも
さっき襲われた人達がゾンビにならないですか？」

くるみの注意はどちらかと言えば、先ほど襲われた黒服の2人組み
に向いていた。

「大丈夫だよ。止めを刺してあるから、よし……………こちらに来
てくれるかい」

それから、近藤とくるみは数度、近藤の車と黒い車の間を行き来し、
3箱の木箱と数個のダンボールを積み込んだ。

「くそ。これ以上は積み込めないな。でも最高の獲得品だからこ
れで良しとするか。」

くるみちゃん、車に乗って！」

車に乗り込み、お互いにスポーツドリントで喉を潤すと近藤は狭い車の奥に移動し、工具をつかいMP-7Aと刻印がされていた木箱の蓋をあけ始めた。

「よっしゃ！これこれ！これがあれば百人力だぜ！」

箱の中には、自動拳銃より少し大きめの銃が3丁とパーツか何かのような部品が入っている箱が収められていた。近藤は口笛を吹きながら、黒光りする兵器を箱の中から取り出していた。その銃は、H&K社社製（ヘッケラー＆コッホ）のPDW<個人防衛火器>MP-7Aであった。

PDWとは、簡単に言えば^{アサルトライフル}自動小銃と拳銃の中間に位置してサブマシンガン（サブマシンガンは通常の拳銃用の弾丸を使用する）より威力のある銃器であり、

小銃より携帯性に優れ、短機関銃のように片手でのとっさの取り扱いが可能で、短距離でなくともボディーマーに対して効力を持つ銃器である。

^{ファブリックナショナル}

代表的なPDWとしては、FN社のFN P90が有名であり、MP-7AはP90に対抗してドイツのH&K社が開発したPDWである。4.6mm×30専用弾薬を使用し、15・20・40と3種類の弾倉が用意されている。また、ピカティ・レール（小火器用の規格化・システム化されたオプション取り付け台であり、光学スコープ、特殊スコープ、タクティカルライトなど、増え続ける小火器の付属品とバリエーションに柔軟に対応するため、オプション取り付けのためのレールシステム）が標準で装備されており、フラッシュライトやレーザーモジュールの取り付けが出来る様になったいる。

近藤は他の箱やダンボール箱を次々とこじ開けて行き、中身を確認していた。

それ以外の箱の中身は、ざっと以下の通りである。

G36KV自動小銃（ドイツ連邦軍に正式採用されているアサルトライフルで機動性と特殊任務での使用を目的とした銃身を短くしたカービン型でピカティニーレールと伸縮式兼折り畳みストックが装着されたモデル）3丁

MP5SD5（世界中の特殊部隊で利用されるサブマシンガンMP-5シリーズの内装式サイレンサー＜消音装置＞を装備した固定銃床モデルでバースト＜3点射＞モードが追加されたモデル）4丁

レミントンM870ショットガン（世界中の軍隊などで使用されている散弾銃）2丁

H&K P46自動拳銃（MP-7Aと同じ4.6mm×30弾を使用する自動拳銃）4丁

H&K USP9ミリ自動拳銃（P8の名称でドイツ連邦軍に採用されている拳銃 9ミリパラベラム弾を使用）8丁

S&W M586 回転式拳銃（357マグナム弾を使用する回転式拳銃）4丁

上記、銃器の弾薬・弾倉・光学スコープ・レーザーダットサイト（赤い光で的に光を当てて照準を簡単にするもの）・フラッシュライト・予備パーツ・日本語の取扱説明書・ホルスター・弾倉ポーチ・タクティカルベスト等々……

「こんだけありや、取扱うことさえ出来りや、鬼に金棒だよな。と。
・・・装填済みのマガジン（弾倉）はどのくらいあるんだ・・・。
・・・
当座は、MP7AとUPSとP46でいいとして・・・ほいと、
MP7Aが40本にUPS用が10本とP46用が30本か、まあ、
当面はOKだな。空のマガジンもダンボール箱1杯分ほどあるし・
・
試射して、結果で警察署内に入るか検討するとか・・・。」

近藤はMP7AとP46のピカティニーレールにレーザーダットサイト等を取り付けて2丁つつ引っ張り出して、それぞれのマガジンを10本づつもって運転席に移った。

「近藤さん・・・それって拳銃ですよ？何であの車にあるのを知ってたんですか？」

「ああ、くるみちゃんは知らないと思うんだけど、日本の警察にもSATって言う特殊部隊があるんだ。そのSATの中ではこの県の部隊は優秀だね。」

丁度、来年の4月から装備の更新があるんで、各国の銃器メーカーと言っても国策なんだろうが、新型の装備をその国の特殊部隊の実地訓練付きで売り込みに来てたんだ。その評価をこのSATが実施しているんだ。

丁度、昨日から、ドイツのGSG-9って言う世界最高峰の特殊部隊が来てたんだ。だから装備があるはずだと睨んでたんだ。

誤解があるといけないが、俺って、説明したかも知れないが小説を書いて・・・その小説に適当に創作した装備なんだが、拳銃の予備の弾が入ったマガジンの装備方法が以外と好評だね。ここに勤める友達がそのSATの装備担当で、試験採用してくれてて、本来

なら今日がテストだね。話しをつけて見学させてもらう予定だったんだよ。

おツと！ゾンビの野郎どもが近づき始めてるな。ちつとばかり、テストとしゃれこむか。」

近藤は、天井のサンルーフの開閉スイッチを操作し、サンルーフが開くと運転席の座席に立ち上がり上半身を天井の外に出した。

「くるみちゃんも練習してもらうからね。まずは、後部座席に移ってくれるかな？」

まずは、そこにおいてあるスパアの買物籠の小さな奴に、座席に転がっているマガジン・・・黒い奴、そうそう。それを詰め込んでくれるかい。それを外にだして、底に磁石がついてるから天井に固定してくれる？ そうだな場所は丁度くるみちゃんと俺の間の所に・・・そうしたら、一旦車の中に戻って。」

くるみが言われるとおりにした後に、車の中に身体を引っ込めると、近藤はなにやら拳銃を右の脇下に吊り下げていた。

「さあ、これをもって。重さは2キロくらいだから。」

くるみは、近藤が渡すMP7Aを恐る恐る受け取った。

「まだ、弾は入っていないから大丈夫・大丈夫。心配しないで・・・」

「これから言うことは、しっかりと覚えること！命にかかわるからね。OK?」

コクツと首を振るくるみに満足して様子で近藤は話しを進めた。

「まず、右手。くるみちゃんは右利き？よし。右手で銃を持って・
・そうそう。引き金は分かる？そうそこが引き金。引くと弾が飛び
出すから・・・その横に絵が書いてあるだろ？レバーがあるだろ、
それが一番上の時は何も出ないんだ、一つ下にするると絵の通りに1
発弾が出る。その下だと、引き金を引いている間弾がでるんだ。ま
あ、マガジンに弾が有る限りだけどね。
で、引き金の上のレバーを下げると入っているマガジンを外すこと
が出来るんだ。」

今度は左側を見てもらん右と同じ物がるだろ。左右とも同じ働きを
する。その少し後ろに出っ張りがあるだろ・・引いてみて・
・そうそう、マガジンをいれて最初の弾を拳銃の薬室って所に入れる
操作をするレバーなんだ、一回薬室に弾をいれたらマガジンを変え
るまで、撃つたんびに自動的に入れ替えされるから・・・でも気
をつけて欲しいのがその穴から空薬莖という弾が発射したあとの残
りみたいな金属が飛び出してくるんだ、結構熱いから注意が必要だ。
それと、マガジンを入れたら・・・絶対に人に向けないこと。ゾ
ンビには向けてもらわないと困るが、『人』には向けないこと！暴
発っていつて、もしものことがあるといけないから。

次は、引き金の前に折りたたまれたグリップみたいなのが・・・そ
うそれそれ。それを前に出すようにしたらグリップになるから・
・そして一番後ろの・・・そこ、そこを引っ張ると肩当のストック
になるから・・・

OK！OK！で横の出っ張りのスイッチを入れて、軽く引き金に人
差し指を添えてみて、出っ張りから赤い光が出るだろ？その光を
狙ったところに当てて引き金を引くと弾がそこに向かって飛んでい
って目標に当たるんだ。もしかしたら、調整が必要かもしれないが・
・・わかった？」

くるみは、言われたことを数度反復し、MP7Aと近藤を交互に見

ながら

「な・何とか・・・分かりましたけど・・・もしかして弾を入れて。ゾンビを撃つんですか？私が？」

「木刀で殴るよりは危険が少ないはずなんだ。まあ、弾が機関部に引っかかるジャムって動作が発生することもあるから・・・100%とは言わないが、距離さえ取れば。圧倒的に有利で安全なんだ。勿論、弾切れもあるから木刀は常時持参だけだな。論じるより慣れるだ！テストするぞ。」

「ハ・ハイ・・・」

くるみは、近藤の勢いに負けた感じで後部座席から身を乗り出した。

「おあつらえ向きに、40メートル程はなれたところに10体程いるな。くるみちゃん、多分銃声がしたら、他のところからもウジャウジャよってくるから・・・その覚悟はしておいてくれよ。車に乗っている限り、直ぐに危ないってこたあないからな。」

では、その長いマガジンを取って長いのは40発の弾がはいっているから覚えとくんだぞ。・・・常に俺と斜めの位置に居てくれよ。後ろから頭を吹き飛ばされるのはかなわないからな。

マガジンを入れたら、さっきの出っ張り『コッキングレバー』を引いて、初弾を薬室に入れるんだ。

よし、そこまではOKだ。レバーを単発・・・1発出るところにセットして・・・

おいおい！銃口がこっちを向いてるって！親指で下げるんだ。OK・OK！

では、ゾンビに銃口を向けてみて・・・赤いドット（点）が見える？

よし！見えたら、出来るだけ頭部に赤い点を・・・そうそう、赤い点が頭部を達したら、ゆっくりゆっくりと引き金を引くんだ。力いっぱい引くと銃口が跳ね上がって上に飛んでいっちまうから・・・

じゃ！やってみて。」

もう！近藤さんは簡単に言うけど・・・そんな簡単に当たるはずないじゃない！私はおまわりさんでもなけりや兵隊さんでもないんだよ！

文句を言いながらも、どこかで近藤を信用しきっているくるみは、言われたとおりにゆっくりと引き金を引いた。

「タン！」

と音がして、肩に軽い衝撃が発生したと思った瞬間に、狙ったゾンビの頭が一瞬揺らいだと思った途端に、頭からピューツと血が噴き出してゾンビは地面に倒れて起き上がらなくなった。

当たったの？えっ？銃ってこんなに簡単なの？衝撃も殆ど無いし、結構簡単なんじゃない？・・・でも・・・まぐれかも知れないし・・・もう一回やってみようかな？

くるみは、再度赤い点をゾンビの頭に重ねて引き金を引くと、同じようにゾンビは地面に倒れて動かなくなった。

「こ・近藤さん！まぐれじゃなくて！当たりました！これ、楽です！遠いからあんまし怖くもないし・・・」

うれしそうに自慢するくるみを見ながら

どんでもない娘っ子だな。MP7Aで、いくらレーザーダットとは言え・・・天性のもんだな！たまげた、たまげた。

「よっしゃ！その調子で全部任せたぞ。俺は、ちょっと遠いのに挑戦してみるから・・・」

そう言いながら、近藤は光学サイトの照準器で150メートルほど離れたところにいるゾンビを狙い始めた。

風は殆どなし！この照準器を信じてみるかな・・・っと

「タン！」

「ちっ！少し低いか！」

近藤の放った弾丸は。ゾンビの首元に命中していた。勿論致命傷ではあるが15センチから20センチは的が外れたことになる。

その後、近藤は同じ様な距離のゾンビ2体を利用してほぼ狙い通りのところに着弾できる世に照準器を調整した。

その頃に、くるみは1発も外さずに10体のゾンビを撃ち倒していた。

「近藤さん！全部当たりました！」

ニコニコと、近藤に褒めてもらえるのがうれしいとばかりにくるみは笑顔で戦果を報告した。

「凄いじゃないか！くるみちゃんは才能あるんだな。
少し移動するから・・・くるみちゃんはそのまま待機しておいてくれるか？」

「ハーーーーイ！了解です。隊長殿！安全装置もセットします。」

くるみはおどけて敬礼の真似事をしながらも、ちゃっかりと安全装置はセットしていた。

苦笑しながら、近藤は車を駐車場から出して、警察署の正面に向けた。正面には20体あまりのゾンビが音を聞きつけ署内から出てきているところであった。

「くるみちゃん！練習だからね！今度はフルオート。レバーを一番下にして左右に振るようにして撃ってみて、最初に当たったところを見て適当に銃口を調整するんだ。頭にこだわらなくていいから・・・マガジン交換の練習のつもりでやるんだ。」

「分かりました！」

答えながらくるみは、連射にレバーをセットしてゾンビに向かって引き金を引いた。最初に胴体を狙いながら徐々に銃口を上げ行き最後の数体には頭部に弾丸を命中させていた。カチツと音がして弾が無くなったことを知ると、くるみは、習った通りにレバーを操作しマガジンを自分で抜き取り、新しいマガジンを挿入して、コッキングレバーを操作し初弾を薬室に装填して再度射撃を再開した。

最初の銃撃で動きの鈍くなっているゾンビは次の掃射で更に5体程が頭部に弾丸を浴びていた。

「くるみちゃん！次のマガジンで単発にして残ったゾンビに止めを

刺してやって！それで、マガジンを換えるときは、仲間に分かるように『リロード』と大きく叫ぶんだ！」

「ハイ！リロード！」

前回と同じ工程でマガジンを交換したくるみは、単発にモードを切り替えて、残りのゾンビに再度の死をプレゼントしていた。

これだけくるみちゃんが使えとなると、他の装備をチェックを試射したら、順ちゃんの救出を兼ねて署内に乗り込めるかも知れないな。

第三步 武器調達（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第四步 救出作戦（前書き）

すみません。

公私共々…自分ではコントロール出来ないほど忙しくて…

毎日の通勤途中での執筆で精一杯です。

よって……登場人物が少なくて、前話の確認が少なくて済む、こちらを更新させていただきます。

3月まで時間の目処がつきませんので……

暫くの間、携帯執筆で親父さんとくるみちゃんの間、冒険で勘弁下さい。

第四步 救出作戦

甲高い銃声に警察署内からだけでなく、周辺部のゾンビも次々に警察署に集まってきた。

道路から警察署に入るロータリーにはかなりのゾンビが見て取れた。

あまり、音は出さない方がいいみたいだな。そうすると、次はMP 5SD5か。

「くるみちゃん。籠を外していったん車内に戻って。安全装置はキツチリと掛けてな。」

言いながら、くるみが座席に戻るや否や近藤は車をバックさせて、駐車場の奥に向けた。

駐車場の一番奥に停車させた近藤は

「これで10分か15分は時間が出来ただろう」

と言いながら後部座席に移ってきた。

更に、後方の荷台から黒っぽいベストと新しい銃器と予備のマガジンを引っ張り出した。

2着のベストのあちらこちらに予備のマガジンをつっ込みながら

「MP用の装填済みのマガジンは15本しかないのか。」

ベストにマガジンを入れ終わり、近藤は考える用につぶやいた。

おもむろに再度荷台に身体を突っ込んで、小さな箱を2個とマガジンを5本引っ張り出してきた。

箱を開けながら

「くるみちゃん。俺の作業を見ながら真似して、この空っぽのマガジンに弾を詰めてくれるか。」

近藤はくるみが見易いように手元をくるみの目の前にして、弾を入れ始めた。

「へえ、弾を段違いに入れるんですね。

え、少し前から斜めに入れると入れやすいですね。」

くるみは器用にマガジンに弾を込めていった。

「30発入るからね。別に数えなくてもいいから……入らなくなったところで次に移って。

任しいいかな？俺は違う用意をするから」

と再度荷台に身体を突っ込んでいた。

一心不乱に残りの3本に弾を込めたくるみは、目の前に差し出された新しい銃器をしげしげと見つめた。

「今度は違う奴ですか？」

「今度はゾンビが多いからね。こいつはMP5と言っただ。さっきのより、弾の届く範囲は狭いんだが、横に書かれている絵を見て

もらえるかな？3発の絵があるよね。そこにレバーをセットすると1回の引き金操作で3発の弾が発射されるんだ。

まあ、30発のマガジンで1回3発だから10回しか撃てない計算になるけど……

普段は1発づつ撃って、ゾンビが増えてきたら『バースト』、あつ！3発発射の言い方ね。に切り替えるんだ。出来る？」

くるみは、弾の入っていないMP-5をいじくりまわしながら

「ここが、最初に弾を入れる操作のレバーで合ってます？それ以外はなんとなくわかります。」

しかし、これって左手はマガジンのところを掴んだらいいですか？」

くるみはそういいながら、射撃姿勢をとった。

「完璧！OK！OK！それと、そのMP-5は、消音タイプなんです殆ど音がしないからね。感じで行けばブブブブって感じかな？なら、ちよつと重いけどこのベストを着てくれるかな？」

「結構重たいですね。剣道の『胴』をつけた感じ見たいです。重さは違いますけど。マガジンを交換するときは、この背中のところから引く張りだすんですか？」

戦争映画だと、ベストの前から出しているように思うんですけど？」

「その通り！その背中の忍者の刀みたいなマガジンポウチと背中からわき腹のポウチが俺が考えたやつなんだ。このベストだと、通常の使い方以外で、両背中まで6本両わき腹8本計14本が余分に持てるんだ。但し、その分重いけどな！」

「本当は、それに拳銃も持たせたいんだが、まだ練習していないし、音のことを考えるとMP-5の方がベストだからね。」

まだ、フロントのポウチにかなり余裕があるだろ？荷台からさつきと同じ箱を取って空のマガジンに弾をつめれる？後5本くらいはベストにいれても動けるだろう？

本当はMP7Aのサプレッサー（消音器）を使って貰いたいんだけど1個しか見つからないんで、マガジンの関係上俺が使わせてもらうよ。」

そっついながら、近藤はMP7Aの空マガジンに弾をこめていた。

二人の用意が出来た時には、既に30体程のゾンビが30メートル近い距離に迫っていた。

30体を車で引くか、銃撃するか悩んでいた近藤に対してくるみが

「近藤さん。ベストに入らないマガジンが3本あるんで練習してもいいですか？」

しかし、前向きだし、射撃の腕も玄人はだしだし、ある意味えらい娘さんを拾ったもんだな。

「OK！開けるぞ。出来るだけ、楽にしてやってくれ！あのまま歩き回らせるのは不憫だからな。」

「ハイ！かわいそうだけど、あのままで生きた知り合いを襲う方がかわいそうですよね。まずは、1発つつテストします。」

ゾンビに対して銃撃を加えながらくるみは

「本当に、軽い感じ！

これで人を殺せるなんて・・・信じられない！。

それに、赤いマークが合さった瞬間に引き金を弾けばいいだけだし・・・音もデッカイ携帯電話のブルブルみたいだし・・・」

くるみは、バーストを使いながらも2本のマガジンで、楽々と30体を葬りさった。

「近藤さん。私って結構使い物になります？」

後部座席に座り込みながら笑顔でくるみは近藤に問いかけた。

少し、難しい顔をしながらくるみと視線を合わせれるようにバックミラーを調整し

「くるみちゃん。ここまですが簡単だからといって、油断したらだめだぞ。

今の君は、車の中からの射撃だから、外しても襲われないという安心感が心の安心になって冷静に引き金を弾けるんだ。

本当の戦いになったら、10メートルや5メートル、悪ければ1メートルといった近距離で確実に仕留めるか、相手を動けなくしなきゃなんないんだ。

その時に冷静に引き金を弾くことができることが一番大事なことになるんだ。

それとマガジンの交換の時もだ。大体、相手が接近してるときに限って弾がなくなるんだ。だから出きる限り今のマガジンで何発撃つたかを数える癖をつけるんだ。

まあ、数えることに夢中になっても仕方ないけど・・・」

ごめんよ、本当は凄い結果で褒めてあげべきなんだろうが・・・ここで有頂天になってしまうと、この先に不幸フラグがたっちまう

といけないんからな。

おーおー、涙ぐんじまったよ。言い過ぎたかな？でもな、この先を生き残るためにはこれも試練だと思ってもらわなくっちゃ・・・

近藤は、やさしい声を掛けなくなるのをグツとこらえ、前方の警察署への突入方法や周辺のゾンビの様子を伺うことに頭を切り替えた。せ、せっかく……頑張ったのに、少しくらい誉めてくれたっていいじゃん！別に車から出たって、離れた所から撃って当てればいいだけじゃん。役にたちたいと思ってるだけなのに……

考えるだけで、何故だか涙がこぼれ落ちるくるみであつた。

二人の乗る車が、何体かのゾンビを跳ね飛ばして警察署の正面に出た時、音を聞きつけて現れていたゾンビ達は、正反対の方向に（近藤達は警察署を正面にして南側の駐車場から出て来た。反対方向には警察署の武道場と安全運転協会の建物があるだけであつた。）争うように千鳥足で両手を突き出しながら行軍していた。

「何だ？一体全体向こうに何があるんだ？」

前方の音を確認しようと運転席の窓を僅かに開けた近藤の耳に、微かに怒声が聞こえた。

「近藤さん！何か声が！」

「シッ！静に！」

「ヤバい！多分。さっきの特殊部隊の奴らが武器確保の決死隊だったんだ。勘違いして、誰かが打ってでたんだ！多分、武道場だ！くるみちゃん！上から援護してくれ！

構わないから手当たり次第に撃つんだああー。」

近藤はサンルーフのくるみがバランスを崩さないギリギリのスピードで車を加速させた。

「やばい！やばい！ぞ。武道場からあれだけの声が聞こえるところを見ると、結構な人数で飛び出してる可能性が高いぞ！

せめて、木刀かライオット・シールド（警察の機動隊などが持つ盾の透明なポリカーボネート製の物）でも持って打って出てくれよ！」

あせる近藤は気づいていなかったが、到着を優先すべきだと考えたくるみは、車の進行方向で跳ね飛ばさないと進めない邪魔なゾンビに的を絞り、バースト射撃で頭部を打ち抜いていた。

それでも、何体かのゾンビを正面衝突気味にひき殺しながら車が曲がり角を曲がり武道場前に到着した。

「ウソ！だろう？・・・・・・」

そこには、優に100体を超すゾンビがわれ先に武道場の階段に向かっており、武道場の階段ではライオット・シールドを持つ20名程度の警察官とその後ろの同数程度の木刀を構えた警察官が、ゾンビの群れと一進一退の攻防を繰り広げていた。

「ちくしょう！こつちからだと・・・・取り敢えずぶっ放すって訳にはいかないじゃないか！流れ弾が当たっちゃまう！」

「近藤さん！外すと警官を撃っちゃいそうです！どうすればいいですか？」

くるみが軽快に発砲していたMP-5の銃口を空に向けて、困った顔で近藤に指示を求めてきた。

近藤は、自分自身も銃をとりサンプーフから身を乗り出した。手にしている銃器は、MP-7Aではなく、G36KV自動小銃が握られていた。

「くるみちゃんは、音につられて寄って来るゾンビに注意しながら前方のゾンビの下半身！特に膝を狙って撃ってくれ！まずは動けなくするんだ！」

ちよつと五月蠅い音がするからね！それと車をひっくり返されるとヤバイから、近づいてくるゾンビには十分に注意頼んだぞ！」

言うや否や、近藤はG36自動小銃を前方のゾンビ目掛けて乱射し始めた。

近藤の持つG36には100発の弾丸が装填された特殊なドラム型のマガジンがとりつけられていた。

近藤が乱射を始めたのと、階段前の警察官の前線が破られたのがほぼ同時だった。

近藤は、ゾンビを這い蹲らせ当座の脅威を取り除こうと必死に銃口を左右に振りながらゾンビの下半身に目掛けて5・56ミリ弾を撃ち続けた。

しかし、既に階段の前線は崩れ落ち20名以上の警察官はゾンビの群れに飲み込まれていた。

狙う射線上に警察官がいなくなつてことに気づいたくるみは、周囲に近づくゾンビに注意を払いながら、武道場の入り口のゾンビの頭に向かって発砲を始めた。

近藤が3つ目のマガジンを撃ち終えた時点で、武道場前にいたゾンビは全て、再度の死を向けえたか、はいずり廻る危険の少ないゾンビに成り果ててていた。

自動小銃を助手席に放り出した近藤は

「くるみちゃん！後マガジンはどのくらいある？」

「まだ10本以上あります。近藤さんのパウチ分は手付かずで残ってます！」

「よっしゃ！降りるぞ！覚悟はいいか？」

背中がゾクリとする感覚を、必死に押さえ込み僅かに震える声で

「大丈夫です。行けます。」

くるみは車から降り立った途端に、むせかえる程の『血』の臭いに思わず膝を降りたい気分になった。

更には、その顔面蒼白のくるみに向かつて、下半身が銃撃でボロボロになったゾクリが何体も這いずり近づいていた。

叫びたい気持ちをグツと飲み込み、MP15の銃口を這いずるゾンビの頭に向けて、1体1体、頭を撃ち抜いていった。

「大丈夫かあ！足元に気をつけるよ！多分、信じられない力があるはずだかな！」

近藤は、見える範囲で動いているゾンビの頭をMP7Aで撃ち抜きながらくるみの様子を確認した。

少し、顔が青いが…これぐらいは耐えてくれ！

祈るように想いながら

「よし！地面の奴らは片付いたぞ！

一応、俺の足跡をなぞるように付いてくれるか！」

くるみは無言で頷くとMP7Aの銃口を近藤に向けないように、そして近藤が警戒していない方向に向けながら、左右の地面を注意深く確認し、近藤の後に続いた。

武道場の階段を上がりきり、無残に引きちぎられた警官の姿に心の中で手を合わせながら、更に歩みを進め、近藤は前方の武道場の中の音に意識を集中した。

武道場の中を窺っている二人の後方で、襲われた警官の中でも比較のきれいな骸が2体ビクンと動き出した。

ゆっくりとした動きで起き上がったゾンビは、足を引きずり2人にじりより始めた。

ガチャン！

何かが倒れたような音におもわず振り向いたくるみの、ほんの1メ

ー
ル先に1体のゾンビが手を差し出しながら近づいて来ていた。

「……………」

第四步 救出作戦（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第五歩 悲慘な結末（前書き）

なんなんでしょう？予想外にアクセスしていただき、これまた予想外の総合評価ポイントをいただき……

これに応えなきゃ、男がすたると……年も考えずに徹夜＋通勤途中、タバコ休憩、食事中、ありとあらゆる時間を利用して第5話を執筆。

無理しすぎましたので少し休憩を貰うかもしれませんが……読んでやって下さい。

しんどいくせに12000文字の第5話……何やってんしよ
うか？

第五歩 悲慘な結末

声にならない悲鳴を上げながら、くるみは咄嗟にMPⅠ5の銃口を持ち上げると途端に引き金を引いた。

カチャ！と音がただけで弾は発射されなかった。

『それとマガジンの交換の時もだ。大体、相手が接近してる時に限って弾がなくなるんだ。』

くるみの頭の中には先ほどの近藤の言葉が木霊していた。

駄目！食べられちゃう！

くるみは、おもわず目を閉じ、立ち尽くしてしまった。

ドンとぶつかられ、くるみはそのまま地面に倒されてしまった。

首筋に暖かい息がかかり

「ゾンビって死人のくせして…まるで人間みたいじゃん…」

とくるみは末期の割には冷静に分析していた。

「痛てええじゃないかよ！この糞つたれめが！くるみちゃん！起きて横に行つて！」

恐る恐るきつく閉じた目を開けたくるみ…

左腕をゾンビに噛まれながらも、必死にその頭にMPⅠ7Aの銃口

を押し付けようとしている近藤が見えた。

ブブツと音がして、近藤を襲っていたゾンビが頭から血を噴き出していた。

覆い被さったゾンビを蹴り飛ばしながら、近づくもう1体に銃弾を打ち込み、身体についた土埃を払いながら、立ち上がった近藤に、泣きじゃくったくるみが飛びついてきた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。私のせいで近藤が噛まれちゃって……ごめ………」

後は声にならずに泣きじゃくるだけであった。

くるみに抱きつかれながら、近藤は困り果てた顔をしていた。

左腕の装備の説明はしてなかったよな？ こんだけ心配させて……どうやって説明したらいいんだ……？ と言うか……胸が……胸がぶよぶよで……これ以上は身体に変化が出そうでヤバイ！

近藤は、引き剥がすようにくるみを突き飛ばす形になりながらも、何とか下半身の変化に気づかれる前に離れられたことにホッとしていた。

「噛まれ奴に抱きつく奴があるか！ 噛まれたらどれ位でゾンビになるのかもわかってないんだぞ！」

叱る近藤に対して目に一杯の涙をためてくるみは叫んだ。

「だって、だって……私のせいで近藤さんが噛まれたんだよ？」

近藤は左腕を前に突き出しながら、一歩くるみに近づいた。

「見てごらん？どこからも血なんて出てないだろう？」

心配させて……今更ながらの説明になったけど……実は左腕のこの部分にはチタンって云う金属が巻いてあるんだ……」

くるみは、言われてしげしげと近藤の左腕を見て

「ほんとだ！白っぽい金属みたいのが見えます！！ってことは、近藤さんは無事なんですよね！」

再び飛びつこうとしたくるみを制しながら、自分の左腕の噛まれた所を見た近藤は背筋が凍るほどビクリしていた。

「防刃繊維のケプラーを3重にして……それが噛み切られたのかよ？」

日本刀ですら2枚がギリギリだったのに……人間の口でか歯つてリミッターが外れるとすげえな。気をつけないと次はヤバいな！」

「もう！何で教えてくれなかったんですか！ばか・ばか・ばか！」

左腕に気を取られているうちに、くるみが飛び込んできて、両手で近藤の胸を叩いた後に力一杯抱きついてきた。

ゾ・ゾンビもヤバいが……くるみちゃんも違った意味でヤバいつて！

近藤は、何とか、ギリギリで大人の威厳を保ってくるみを優しく遠ざけて

「早く、マガジン交換して！奥に入るからね。残弾には充分に注意

をして！」

近藤は、再度後方から襲われることがないように、襲われた警官達を眺め直しゾンビ化しそうな警官の頭に銃弾を撃ち込んだ。

2人は武道場の中に入った。武道場とは言っても普通の体育館と同じ作りであった。

一部に畳などがひかれており、床全面で柔道や剣道と利用するエリアが区分けされていた。

武道場の一番奥の扉にゾンビが数十体押し寄せていた。

「くるみちゃん！あの奥に、多分避難した誰かがいてるんだ！行くぞ。もうさつきみたいに手遅れは嫌だからな。」

近藤とくるみはマガジンを引っこ抜き、弾が装填されていることを再確認して、早足で武道場の中ほどに移動した。

2人の銃はサプレッサー（消音器）により、大した音も立てずに、次々にゾンビの頭部に銃弾を浴びせていった。

最後のゾンビが倒れてところで、近藤が扉に向かって走り出した。

その後ろをくるみが後方にあたる武道場の入り口を警戒しながら後ろ足でゆっくりと進んでいた。

扉にたどり着いた近藤は扉を叩きながら

「誰か！誰かいてますか？外のゾンビは退治しましたから、無事な

ら扉を開けて下さい。誰か！」

何度目かの呼び掛けに

「あなたは誰ですか？どうやってゾンビを退治したんですか？」

女性の声が問い合わせてきた。

かなり警戒してるな！まあ、しょうがないわな。

だいたい、こんな世紀末状態じゃ……女性は真っ先に男性からの性的蹂躪や陵辱を恐れるからなあ。

近藤はくるみを呼び、扉への呼びかけを代わって貰った。

くるみの呼び掛けで安心したのだろう。

静かに扉が開けられて、回転式の拳銃（警察官が普段所持している、S&Wエアークウェイト）を両手で胸の前に構えた姿の30代くらいの婦警が一人出てきた。

くるみの姿を確認したところで、扉の中の仲間に声をかけやっとな扉の中から人々が出てきた。

3名の制服を着た婦警、1名の私服の女性刑事？（同じく拳銃を所持）と中学生と小学生らしき子供の男女が7名。そして、全身のあちらこちらに傷を負い、血だらけの男性警官が3名、中学生男子2名の肩を借りていた。

近藤とくるみは男性警官を見て、顔を見合わせた。

間違いなく、先ほどゾンビに襲われた警官達の生き残りだな。

かなり、顔色も悪いところから見ても…長くはもちそうにないな。

近藤はそれとなく、中学生に指示を出して、怪我をしている警官を少し離れたところに横にならせた。

近藤は、様子を見に行こうとしている2名の婦警を引き留めて状況を聞き出そうとした。

「助けていただいてありがとうございます。私は組織犯罪対策課の藤井巡査部長です。

こちらが、交通課の中野巡査長、高橋巡査。それと生活安全課の石井巡査長です。怪我をしている2名は警備課の木村、中村巡査長です。

子供達は、署の柔道教室のメンバーで昨日親御さんに連絡が取れなかったので……ここに残ってもらった子たちです。

男性の警官は全て先ほど、ここからの突破を試みて全滅してしまいまして、現状では、年齢も職位も私が一番上になんで……」

「そうですか……でも、何で突破を試みることになったんですか？」

「個人携帯無線で本館で立てこもっているメンバーから、武器庫と、その……」

言いにくそうに藤井巡査部長は、近藤とくるみの持つ銃器をチラッと見た。

「これですか？言ってもいいのかわかりませんが、SATの装備班

の鈴村巡査部長をご存知ですか？彼から今日のG S G - 9 の訓練の見学の許可をいただいてまして、もしかしたら武器が入手できるのではないかと、1時間ほど前にここに来たんです。

運よくG S G - 9 のバンを発見して、拝借した次第です。えっーと、緊急事態だから窃盗だとかって野暮なことは言つこ無しですよ。ね。」

近藤のとぼけた笑顔で気が緩んだらしい藤井は

「G S G - 9 のことまでご存知なら。

連絡では、武器庫とG S G - 9 の装備を確保するための決死隊を、2隊結成して行動に移すと・・・G S G - 9 の隊員の方も4名いらつしゃいましたし、彼らは大型の自動拳銃を所持されていましたので、強攻策に出たのだと思います。

警察署の外のゾンビをG S G - 9 の装備で排除するので、排除、つまりそれなりの銃声が聞こえて30分後に、こちらも盾を使い武道場から突破。G S G - 9 が援護にこられる予定だったんです。

警備課の大半は懐疑的でしたのですが、警備課の課長がこのままでは食料もなく何れは、討つて出るしかないので、賭けるしかない判断されました」

「そうですか。我々の銃声が誤解を招いたんですね。申し訳ありません。」

近藤の苦痛に歪む顔を見て、藤井のみならず近くで話を聞いていた石井と中野が口々に

「あなたが悪いなんてことはありませんよ。」

「そうですよ。我々は警察官なんです。死んだ仲間も、こうやって

子供達が生き延びたので・・・満足しているはずです。この子
たちを助けてくれたのは紛れもなくあなた方なんですから」

「ありがとうございます。そう言っていただと、少しは気が楽に
なります。」

しかし、この状況では助けたとは言えません。まだ敷地内には数多
くのゾンビが徘徊していますし、ここを脱出して安全な場所を探さ
ないと・・・」

「近藤さん!!」

怪我をした警察官を距離を置き警戒していたくるみが鋭く叫んだ。

事切れた二人は、新たな動く屍として息を吹き返してしまった。血
まみれの身体を不器用に動かしながら立ち上がろうとしている。

「子供達を！ 出きるだけ悲鳴は我慢させて下さい。」

昨日からの世紀末の蠢くゾンビを見続けている子供達は、音がゾン
ビを引き寄せることを十分に学習しており、気丈にも、中学生が男
女を問わず小学生からが叫び出さないように口を押さえたり、見え
ないように立ちふさがったりしていた。

その中学生達の姿を確認して、近藤とくるみは冷静に生き返った警
官に銃弾を撃ちこんで2回目の永遠の死をもたらした。

「兎も角、武道場を出ましょう！ここに留まっても大量に入ってこ
られると袋のネズミ状態になっちまう。」

自己紹介が遅くなりましたが、俺は近藤雄一。あっちの女子高生が
根元胡桃さん。俺たちも昨日知り合ったばかりの急造のペアです。

よろしく。」

挨拶も済み、近藤を先頭にして一同は武道場を出ることにした。

しかし、13名か？この人数をどうやって守る？残弾も乏しくなってきたいるし、はてさてどうしたものか？

考えながら武道場の階段を降りている時に、近藤の足に落ちていたライオット・シールドがあたった。静かにライオット・シールドを拾い上げた近藤は後ろを向き男子中学生と婦警のうち大柄な中野と高橋を呼んだ。

「このライオット・シールドを持ってもらえるかな？現状では武器が少なすぎる。この状態でゾンビに襲われると俺とくるみちゃんだけでは手が廻らなくなるだろう。」

ゾンビに対峙した時に、このライオット・シールドを盾にしてゾンビから身を防いでくれ。透明だから・・・ちよつとばかり赤い染みがあるが・・・な。相手も見えるし、旨く使って盾ごと体当たりするって方法もあるし・・・出きるか？」

近藤は特に最後の言葉は男子中学生に投げかけた。二人とも警察で柔道を習っているので、平均よりは大きいが、所詮は子供である。ましてや、やんちゃなワル餓鬼という風でもない普通の中学生であった。

二人とも少し、泣きそうな顔をしながらも、落ちていたライオット・シールドを拾い上げると

「小学生は助けてやらないと、一人じゃ何にも出来ないし。先生（柔道を教えている警察官）は、弱いものを助けるため、弱い心を鍛

えるために柔道はあるんだって言ってた。そんなことは綺麗事だとは思うけど、誰かがやんなきゃなんないんだろ。」

その少年の肩を後ろから叩きながら

「私も、中学生だし・・・子分（小学生）共を守んなきゃね！あんたたちですら『ヤル！』って言ってたから！

あつ！八木沢 香です。女で、達也や和也ほど役には立てないですけど、こう見えても道場では一番強いんで力にはなると思います。」

そう言い放って、地面に落ちているライオット・シールドと木刀を拾い上げた。

「OK！まずは、直ぐそこに車を止めてあるんで、そこまで頑張ろう。」

3名の中学生は小学生を囲むようにして移動し始めた。また、囲まれている小学生の中でも6年生の男子2人が4年生の2人の女子の手をしっかりと握り4年生の男子は二人で手を繋ぎ団結が形成されていた。

無事に車にたどり着いた一行は近藤を警戒に残し、くるみは車の中にあるスナック類と飲み物を配り終わると、黙々を空のマガジンに弾丸を詰める作業を繰り返していた。

子供達が無事に食料に手を出し始めたことを確認して、中野は後方を警戒すると車の後ろに行き、出きるだけ早く交代できるようにと高橋が急いで配られた食料を口に運んでいた。

藤井が子供達の世話をしている間に、くるみの横に石井巡査長が近寄り

「装填手伝うよ。こっちの弾をいれたらいいのかな？」

くるみの答えも聞かずに、石井は4・6ミリ弾をマガジンに詰めだしていた。早々に食料を食べ終えた男子中学生も弾丸装填の輪に加わり、あっという間に9ミリ弾の30発マガジンと4・6ミリ弾の40発マガジンが50本ずつ、5・56ミリ弾の30発マガジンが35本が出来上がった。

装填されたマガジンを自分のポウチに満タンにしたくるみは、車後方で警戒している高橋の様子を見てから、前方を警戒している近藤と交代をした。今の所、警察署の正面玄関から死角の位置というところが効を奏しているのか、ゾンビは1体も現れなかった。同時に警察署内からは発砲音すら聞こえず、署内の武器庫に向かった決死隊も失敗したのだらうとの憶測が、全員の頭の中をよぎっていた。

近藤は、荷台の木箱を開けて装備を引っ張り出して用意していた。用意を横で見ていた石井巡査長は、頃合を見計らい少し離れた前方にいくくるみを呼びに行った。

車に戻ったくるみは、近藤から新たな装備を手渡された。

刑事テレビの刑事が使っているような脇の下に拳銃をつるしているシオルダーホルスター、太もものに固定するホルスター（勿論ズリ落ちないように腰ベルト付き）。少し大きめのウエストポーチ。

シオルダーホルスターには左に自動拳銃P46（ダットポイントレザー付）、右には予備マガジン3本。レッグホルスターにはMP-7A、ウエストポーチにはP46用の交換マガジン（8）とMP-7Aの交換マガジン（5）。さらには、ベストに拳銃用のマガジ

ンポウチに3本のP46用マガジン。(MP-5、MP-7A、P46)

「近藤さん・・・凄く重いんですけど？全部持たなきゃ駄目なんですよ？」全部の装備をつけた重さに圧巻されていた。

同じような装備(G36とMP-7A、P46)に、さらにバックパックを背負う近藤は苦笑いしながら、両手を顔の前で祈るように合わせて

「ごめんな。まともに戦えるのは俺たち2人だけだし、重すぎて動けないか？」

「ううん、剣道の練習でこれくらいの重さで動く練習はしたことはあるから、何とかかなと思います。」

無理をしているのは顔を見ればわかるが、13名を引き連れて動く為にはくるみにも負担を掛けるしか方法がなかった。

「近藤さん。こちらも用意が出来ました。」

組織犯罪対策課の藤井巡査部長は、基本的なSATの訓練課程を受けていたということ

G-36とUSPと予備弾薬。

石井巡査部長も射撃の上級者とのことでUPSと予備弾薬を渡されていた。残りの婦警は実銃をともに取り扱ったことさえない状況なので、そのままS&Wエアークウェイトを持ち、藤井と石井の予備の弾丸を受け取っていた。

警察署に到着した際に目撃した立てこもっているらしい階は、刑事課や警備課の階らしく、救出できれば戦力になる可能性が高いことわかり、同時に、近藤の友人である鈴村巡査部長は、元々武道場に居たが武器庫の鍵を保管しているということで単身で武道場から武器庫に向かったことが判明した。

どちらにせよ、現有のメンバーでは確実に子供達を守ることは厳しいということは明白なので、無理をしても警察署内の救出を決行することで全員の意見が一致した。

運よく、中野巡査長の自家用車（１BOX）が武道場の駐車場に止められていたことから、中野、高橋両名が子供達を乗せてコンビ二へ先に避難することにさせた。

車を見送った後に、４名は近藤の車に乗り込み、警察署の正面玄関に向かった。

「………ということは、駐車場横のドアから入るより、正面玄関からの方が距離も近いし、通路も広いということですね？」

「そうです。旨く行けば、正面玄関に隣接する警務課で携行無線がまだ残っている可能性がありますし、PCパトカーの鍵も何本かの予備が入手できるはずです。ただ、署内の窓口なんで……身を隠すことは出来ないと思います。」

「わかりました。では、先頭は俺、次いで石井さん、藤井さん、くるみちゃんの順番で入ります。１階での署内の探し物はお二人にお任せします。俺とくるみちゃんは周囲の警戒に当たります。１階が終われば、階段から、俺・石井。藤井・くるみのペアで動いていきます。弾切れに十分に注意してください。お互いにマガジン交換時は声を掛け合ってください。いいですね。質問はありますか？」

言いくそうに石井が

「マガジン交換って言うんですか？」

「リロード！」って言うんです。

「それと、出きるだけ、撃った弾数は覚えておく方がいいです。石井さんの拳銃に入っている弾数は……」

くるみは答えも求めて近藤に視線を送った。

「15発だ。1マガジン15発。ちなみに俺とくるみちゃんの拳銃は20発。」

「了解しました。くるみちゃん、ありがとね。」

石井はやさしく、くるみに微笑みながら言った。

「じゃあ、行きますよ。石井さんの拳銃には消音器がついていないので、出きるだけ俺から離れずに居てください。出来れば、2階に上がるまで発砲する状況にならないことを祈りますよ……それと、通路に倒れている死体には十分に注意してくださいね。通りすぎたら後ろで蘇って襲ってきたなんて冗談ではすまされませんからね。血で滑りやすくなっているかもしれない。兎に角注意を怠らないで下さいね。」

近藤は、警察署の階段に一步足を掛け、軽やかに音を立てずに入り口に近寄っていった。

入り口にもたれかかるようにし胸ポケットから小さな鏡を取出した、鏡には伸縮性の棒状の握りがついておりそれを無造作に伸ばし、鏡を入り口から室内に差込、見える範囲を確認したところ、入り口右手の受付カウンターらしきところに5、6体、左手の方向に4体ほどがあてもなくユラユラと揺れて立っていた。他には動かない死体しか見えなかった。

近藤は追いついて来た入り口の逆方向に位置するくるみに向けて手で合図をした。右方向を指差してから指を6本。左方向を指差してから指を4本。

くるみは頷き、指で自分を指して右方向をさした。（くるみからすると直進方向）

なるほど！直進して銃撃するほうが遣りやすいってことが。確かに、わざわざ室内に入ってから方向転換する必要もないしな。

近藤は指で丸をつくり、OKのサインを返しながら、くるみを指差して指を1本、自分を指差して指を2本と指示をした。

再度、頷いたくるみは、数度の軽い深呼吸を行い。スッと警察署内に足を踏み入れた。間髪いれずに近藤も署内に踏み入った。

くるみは、冷静にカウンター付近にいた6体のゾンビの頭に1発ずつ弾丸を撃ちこんでいった。

くるみと背を併せるように、近藤もMP-7Aから4発の銃弾を発射させながら4体のゾンビを葬った。

近藤の手招きで残りの二人も署内に入り、藤井は携行無線機へ、石

井はPCの予備鍵を求めてカウンターを乗り越えて警務課の机に向かつて散っていった。

「くるみちゃん！ 凄いじゃないか！ もう、特殊部隊の隊員並みの腕前だよ。くるみちゃんとなら、安心して背中を任せられるよ。」

周囲を警戒しながら近藤はくるみに話しかけた。

「銃が上手に撃てるって……女の子としては……微妙なお褒めの言葉なんですけど？ ……定期試験にゾンビの射撃のテストなんてないですね。」

でも、褒めてもらえるくらいの腕前なら、こんな、私でも『人』を助けることが出来るってことなんですよね。」

その時、警務課の奥まった通路から10体ほどのゾンビがいきなり現れた。藤井や石井の立てる音に引きつられてきたのだろう。

「俺が殺る。くるみちゃんは周辺の警戒を継続して！」

ゾンビに気づかずに携行無線を探している藤井巡査部長の背後のゾンビにむかい近藤はMP-7Aを向け、スコープを覗き込みながら1体、1体と藤井巡査部長に近づくゾンビを撃ち倒していった。

「駄目だわ。緊急事態だったから、全部持ち出されているみたいだわ。」

予備の携行無線の引き出しまで確認したが、携行無線を発見することは出来なかった。

一方、脱出に利用できるようにPCの鍵を探していた石井は、警務

部長の執務机横の棚に鍵があることを思い出して探していたが、その辺りでゾンビと警官が激しく攻防したのであるう、机も棚も激しく損傷したり、ひっくり返えされたりされていた。

あきらめかけた時に、粉々になった棚の隙間に鍵の束が落ちているのが石井の目の隅に写った。

机が邪魔をして手が届かないことに苛立ちを覚えながら、机に身を預けてガラクタ状況になった棚の隙間に左腕を突っ込み必死に伸ばして鍵の束を取ろうとしていた。

「ん？石井さんは何をやってんだ？」

目の隅を掠めた石井の行動を疑問に感じて視線を戻した近藤は、石井がガラクタの中に腕を突っ込んでいるのを見て

「石井さん！駄目だ！隙間に手を入れたら駄目だ！」

石井は、静かに行動しろと言っていた近藤が大きな声で何かを警告していたので、改めて聞き直そうとした瞬間に、左腕に激しい痛みを感じて、思わず叫び声をあげていた。

「いた・だ・だ・だ・あ・あ・あ・あゝゝ」

隙間から引き抜いた腕には、無残にも肉を喰いちぎられた後が残っていた。足が動かない這い回ることしか出来ないゾンビが偶然そこにいたのだった。

噛まれた！自分もゾンビになるんだ・・・そう分かった瞬間に石井は無意識のうちの大声を上げていた。

「いやあああああ！いやだあああああ！死にたくないよ・・・」

その叫び声につられて、警務部の奥の通路から続々とゾンビが現れ始めた。

「ダ・ダ・ダ・ダ・・・」甲高い射撃音が室内に響いた。

警務課の奥の通路から2メートルも離れていないところにいた、藤井は突然現れたゾンビに軽いパニック状態になって、G36自動小銃をフルオートでゾンビに向かって撃ち始めたのだった。

咄嗟にフルオートで撃ち始めたので、狙いは定まらずに銃口は2、3体のゾンビの足から胸に向かって斜めに走り、ゾンビを僅かによるけすだけに終わり、大半の銃弾は室内の壁に撃ち込むことになってしまった。

石井を狙って室内に溢れ出てきたゾンビの半分が藤井に目標を変更してきた。

ヤバイ！ヤバイいぞ！藤井さんの位置だと俺もくるみちゃんも流れ弾を考えると援護射撃が出来ないじゃないか！

素早く、射線から藤井を外そうと移動しかけた近藤に対してくるみが警告を発していた。

近藤の後方の通路や階段からも信じられない数のゾンビが溢れかえり始めていた。

近藤は、藤井を気にしながらも迫るゾンビに後ずさりしながら銃弾を浴びせ、くるみのいる入り口の方方向に下がるしか方法が無くなっ

た。

「落ち着いて！落ち着くのよ！」

藤井は自分に落ち着くように言い聞かせながら、G36の空になったマガジンをリリースして、ポウチから新しいマガジンを引き出し装填し、コッキングレバーを操作し、迫り来るゾンビに向かって撃ち始めた。

しかし、ゾンビとの距離が近すぎて、数体のゾンビを撃ち殺したところで横から現れたゾンビにG36小銃の銃身を掴まれ手放さざるを得なくなり、銃ごとそのゾンビを押し倒し、腰のホルスターからUSPを引き抜き、その額に銃弾を浴びせた。

藤井のほぼ前面に扇状に集まり出したゾンビに、必死にUSPを撃ちながら藤井は一步、一步と後退していった。

近藤さんとするみちゃんが援護してくれるはずだから・・・もう少し、もう少し後方に下がらなくちゃ！

がむしゃらに狙いをつけては一番近いゾンビに対して引き金を引き続けた藤井であったが、後ずさる足が机の角を踏み、バランスを崩したところで踏ん張ろうとしたもう片方の足が地面に横たわる死体を踏みつけてしまい、大きくバランスを崩して後方に転がるようにこけてしまった。

一瞬、何が起きたのかが判断できなかった藤井であったが、起き上がる間も無く座ったままの状態の後ずさをしながら、迫り来るゾンビに向かって右手を上げて銃を構えようとした時に自分がこけてしまい、拳銃を手放したことに気がついた。

駄目だ！と目をつぶり自分の死を悟った瞬間、藤井の顔の横にUSPを握った腕が現れて矢継ぎ早に引き金が引かれ迫るゾンビの数体を撃ち殺した。そう、既に噛まれたしまった石井の横まで後退していたのだった。

「噛まれた！噛まれた！ちくしょう！ちくしょう！死ね！死ね！死ね！」

と叫びながら石井はマガジンが空になるまで引き金を引き続けた。

藤井は、スライドが後退した後もUSPの引き金を必死に引き続ける石井の手から、拳銃をもぎとり、自分のポウチから新しいマガジンを装填し、迫るゾンビを撃ち始めた。

「石井さん！大丈夫？ここは、私に任せて逃げて！早く逃げて！」

石井が噛まれたことに気づいていない藤井は懸命に近づくゾンビを撃ちながら石井を逃がそうとしたが

「噛まれた！噛まれた！噛まれた！噛まれた！噛まれた！噛まれた！」

と石井が狂ったように同じ言葉を呪詛のように叫び続けることに気がつき、同時に近藤とくるみからの援護が無いことにも気づいた。

みんな、殺られてしまったんだ……。もう誰も助けてくれないんだ。

「うわあああああああああ……。……」

前方のゾンビに装填されているマガジンが空になるまで引き金を引き続け、最後のマガジン交換をして、さらに10体のゾンビに銃弾を浴びせた後に藤井はくるりと振り返り、髪の毛を振り乱しながら叫び続ける石井に

「ごめんね」　　と言、謝りながら眉間に銃弾を撃ち込んだ。

静かになった石井を見つめながら、藤井はUSPの銃口を口に咥えて

中野、高橋！子供達を守ってね！

そう願いながら引き金を引き、33年の生涯を閉じた。

「右！」

「左からも！」

「リロード！」

「退却するしかないぞ！」

「藤井さんと石井さんは！」

「わからん！ゾンビの数が多すぎる！出ないところちが殺られる！」

「分かりました！フルオートでいきます！」

中野・高橋達

「この道でいいんだよね？」

「もう！アンタは交通課でしょ！次の角をまがるんだよ！」

中野は高橋の方向音痴にあきれながらも道順を指示していた。

角を曲がったところで、1台のワゴン車が立ち往生して車の屋根に男が1人、手を大きく振りながら助けを求めている。

「どうする？警察官としたら助けない訳にはいかないよね」

中野に意見を求める高橋に対して、中野は

「あいつのツラ。良く見てみなよ。広域暴走族の『夜叉丸』の特攻隊の奴だよ。絶対によからぬ企みをしてるに決まってるって！無視！無視！突っ切っちゃえ！」

無視して突っ切ろうとした時に、立ち往生しているワゴン車とその周りにとまっていた車が一斉に動き出した。

「止まったら駄目だよ！ぶつけてもいいから止めるなよ」

中野は言いながら、拳銃を右手に構えていた。

「止まってつかまったら、間違いなく慰み物にされるよ！車4台だ

から最低でも5人。いや、1台運転手以外に2名としても10人以上。

10人に犯られるなんて・・・真つ平ごめんだね！」

既に、こちらが婦警ということはばれている様子で、助手席からハコ乗りして鉄パイプを振り回している男が

「婦警さんを犯すぞ！」と叫んでいた。

その車に気を取られていると、逆方向から違う車が体当たりをしてきて、高橋の運転する車は大きく蛇行した。

「高橋！この車は伊達にデカイだけじゃなくて重いんだから逆にぶつけてやれ！負けるな！後ろの子供達、どこでもいいからしがみついて！」

中野の勢いにつられて、高橋は2回目の体当たりを行おうとしているセダン車に、勢いをつけてワゴン車をぶつけた。

重量のあるワゴン車と高橋の絶妙なハンドル裁きでセダン車は大きく蛇行し、駐車されている事故車に乗り上げて他の車に突っ込んでいた。

セダン車から必死に這い出てきた暴走族達は、近寄ってきたゾンビに襲われていった。

「ゾンビまで結構出てきてるよ！とにかく、夜叉丸を振り切らないとコンビ二にも行けないよ。高橋、その調子で他の3台もぶつけて！」

婦警といえども、交通課に勤務するだけあつて高橋の運転技術は確かなものだつた。2台目の暴走車を事故車に突っ込ませた後、彼らも、流石に悟つたのか方法を変えてきた。

体当たりを止めて、助手席や後部席にハコ乗りをして、鉄パイプや釘打ちバットでワゴン車体やタイヤを叩いては離れという、ヒットアンドウエー戦法を使つてきた。

中野は後部座席に移り、サンルーフを開けると身を乗り出して、拳銃をかまえて暴走族を狙い始めた。

拳銃は4丁あるし、弾も50発はある。下手な鉄砲も数うちや当たるでしょ！絶対にあんな馬鹿供の慰み物にはなんないからね。

中野はいきなり、近寄つてきたセダン向かつて無造作に3回引き金を引いた。1発が助手席の男に命中したらしく、血を噴出しながら車から落ちていった。

10数分にわたり一進一退の攻防が続いたが、痺れを切らした暴走族の2台は急加速で一氣にワゴン車を追い越して前に出る作戦に打つて出てきた。

不幸は重なるものである、前を塞がれることを予感した高橋は一氣に減速して左右のどちらかに逃げる算段をして左と決めたが、中野はそんなことを知らずになかなか命中しないことに業を煮やし、急加速してくる左側の車に的を絞り、あろうこと2丁拳銃でめくら撃ちを開始した、見事にタイヤとガソリタンクに銃弾が突き刺さり、左側前方を走るセダンは火を噴いたが、そのままワゴン車の進行方向にノーズを向けながら右から来た仲間の車に突っ込んでしまった。

高橋は、左側の車が進行方向の正面にきた瞬間にギリギリで避けるところに向かって急制動をかけながら勢い良くハンドルを切ったが、激しいカーチェイスの繰り返しにタイヤがついていかずバーストしコントロールを失ってしまい、2台の燃えるセダン車に突っ込んでしまった。一瞬の内に残り2台のガソリントankに火が移り3台は大音響とともに炎の中で燃えていった。

第五歩 悲慘な結末（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第六歩 無力（前書き）

第五歩の藤井巡査部長の装備が途中からG36に変わってしまった。
ました。

近い内に修正します。

やはり、私の小説はなかなか話しが進みませんね。

のんびりとお付き合いくださいませ。

第六歩 無力

近藤とくるみはお互いに背をつけるような距離に接近して、互いに180度の範囲に現れるゾンビに対して夢中に銃弾を浴びせていった。

最初は、正確にゾンビの頭部を破壊する射撃が出来ていたが、あまりのゾンビの数と焦りからか徐々に命中率が下り、あれだけ用意したマガジンもすでに数本を残すのみとなっていた。

なんて数なんだよ。このままじゃ、数分で囲まれちまう。どうする？どうする？一か八か賭に出るか？やるしかないか？

「くるみちゃん！一か八か、突破するからな！合図するまで出来るだけ入り口辺りのゾンビを排除してくれ！合図したら、一気に入り口に走るんだ！」

くるみの返事も待たずに、近藤は自分の正面にいるゾンビの群れに対してマガジン2個分60発の弾丸を下半身に向けて横殴りに銃口を左右に振りながら乱射した。群れの先頭にいるゾンビ達が膝から崩れ落ち、その後ろのゾンビ達の行進をわずかに遅らせた。

空になったマガジンを交換もせず肩に掛けながら、レッグホルスターからMP7AとショルダーホルスターからP46を引き抜き、くるつと方向転換しくるみの横に並ぶなり

「走れ！」

くるみは指示された通りに、周りを無視して入り口を目指して一直線に走り出した。

半歩先に行く近藤は、正面約30度の間とそのギリギリの目の端に入るゾンビだけに引き金を弾き、ただ、ただ入り口に向かって走った。僅か15メートル、時間にして4秒とかからない筈だが、掴みかかるうとするゾンビを撃つ・避ける、時間は何倍にも感じられた。気付いた時は2人とも、警察署の入り口から30メートルほど外に出た後であった。

すぐそばに駐めてある車に向かい、後ずさりしながら息を整え、入り口から溢れ出るゾンビの頭を次々に撃ち抜き、お互いが3回入り口に入ったところで、入り口から溢れ出るゾンビがいなくなった。

正確には、いなくなったのではなく、正面出口で撃たれた150体近いゾンビの死体がまるで土囊のように入り口を塞いでしまったのだ。

「は・は・は……一体、警察署の中にどんだけいてるんだよ。まったく……」

車中に戻った2人は、喉を潤した。

だが……藤井巡査部長や石井巡査長を見捨てた気まずさにお互いに何も言えず、ただ、警察署の正面玄関を眺めていた。

「仕方がなかったんですね。」

くるみがボソツとつぶやいた。

「仕方がなかったが……仕方がなかったが、全ては俺の責任だ！」

もつと…もつと注意深く1階の安全確認をしてから単独行動に移るべきだった。そうすれば2人は助かっただろうし、3階にもたどり着いたけたかもしれない！全ては俺の判断ミスだ！」

近藤は激しくハンドルを叩き、そのままハンドルに突っ伏し、激しく肩を揺らしていた。

「……………」

何とか励ます声をかけたかったが……同じように見捨てたくるみに言える言葉はなかった。

2人が…後悔の念に駆られていようがいまいが、ゾンビ達の食欲には関係がなかった。

いつの間にか、車の辺にかなりの数のゾンビが近づきつつあった。

ぼろろと、警察の正面出口を眺めていたくるみの目にバックミラーから近づきつつあるゾンビの姿が映った。

慌てて、車の周りを見回すと正面と左側以外の方向から、正面出口で退治した数より多いゾンビが車に向かって来ていた。

「こ・近藤さん！右と後ろに凄い数が来てます！」

言いながら、MP5を手に持ち、マガジンを引き抜き残弾を確認し、新しいマガジンの確認にポウチに手を伸ばし残りを確認したくるみは……

「クソツタレめ。悲しむ暇もないのかよ。」

エンジンを掛けボヤキながら車を出そうとし、バックミラーを見ると、くるみが困った顔をして、MPⅠ5のマガジンを1個握りしめていた。

「それが最後？」

くるみの頷く姿を見て、近藤は車を武道場に向けて急発進させた。

「空のマガジンに弾を詰めるんだ！」

はっとした、くるみは、荷台に身体を突っ込み、9ミリバラベラム弾の包みと5・56ミリ弾の包みを数個ひつつかみ、無造作にシートに放り出した。

「自分の9ミリから詰めるんだ。」

そう言いながら、近藤は開いたサンルーフから身を出して、MP7Aを構えスコープを覗きながら、300メートル程離れたゾンビの集団の先頭から順番にヘッドショットで撃ち殺していった。

先頭の20体を撃ち殺し、次に近づいてきているゾンビにスコープを合わせると、撃とうとする度に頭が上下してなかなか撃つことが出来なかった。

「どうなってるんだ？進化して弾を避けれるようになったなんてオチは無しだぜ。」

助手席に置いてある双眼鏡を取り、ゾンビを覗いたところで理由がハッキリした。

何故だか分からないが、現れたゾンビ達は下半身、特に足に激しい損傷を負っている個体が多かった。

偶然とは思えないな。あれだけの数……だもんな。アレをやった奴らはかなり根性があつて冷静な奴だなあ、多分組織化してて20・30人はいてるんだろう。

ただでさえ遅いし鈍いんだ。襲う方の人数が多ければ足さえ潰せばそんなに脅威ではないわな。

しかし、それが簡単に冷静に出来ないから警察署ですらこの有り様なんだ。

ただ、止めをさしていないのは何故なんだ？止めがさせなかった？いや！いきなりの何十だったら分かるが……どう見たって見事に組み合わせがバラバラだから、たまたまここに引き寄せられただけなんだろう。まさか？ワザとか？殺せるのに殺さずに楽しんでいるのか？そんな奴らがいるとしたら……女連れ、しかも女子高生となりや……少しばかり、ゾンビ以外にも気を回さなきゃだめだな。

近藤は、色々と考え事をしながらも討ちつづけたが、考えがまとまらなかったようで、射撃を中断して運転席に戻った。

「くるみちゃん。マガジン幾つできた？」

近藤は、近づいてくるゾンビを凝視しながら尋ねた。

「6本出来ました。もう直ぐ7本目も出来ます。」

「OK！くるみちゃんはそのままマガジンに装填しといてくれるかな。」

近づいてくるゾンビ達だか、みんな足や下半身に損傷があつて頭部

を狙うつてのが厳しいんで、車で突破するから少し揺れるけど…我慢してくれな」

くるみの返事も待たずに車は軽やかに進み出した。

近藤は器用にハンドルを小刻みに動かして、ゾンビを跳ね飛ばすように車を進めた。

数分でゾンビの群れを抜け出した近藤は、最初に来た時のように警察署の駐車場に車を進めた。

黒い特殊部隊のバンの前で止まり。周りの安全を確認しながら、バンの荷台から弾の入った箱を数個選び出して後部座席に寄せ、数個の木箱の蓋を開けて幾つか銃器を荷台に積み込んだ。

「流石に、これ以上は入らないな。でも、全部はヤバイよな。警察の方も再度3階から決死隊が来るかもしれないし……容認しないといけないリスクってところだな。よっしゃ、くるみちゃん。移動するぞ。」

車は警察署を出て、コンビニとは逆の方向に走り出した。

「近藤さん。コンビニには戻らないんですか？逆方向ですよ？」

車が進む方向を不思議に思いながらくるみが尋ねた。

「まだ確証は無いんだが、さっきのゾンビ達を見てね。かなり、頭が良くて、冷静で、組織化された部下なんかを持った奴らがどこかにいてるような気がするんだ。もしかしたら、最悪に冷酷非情な奴かもしれない。」

「何故？そう思っんですか？」

「1つ目に、ゾンビの足や下半身を集中して攻撃していること。普通、ゾンビに襲われたら頭を砕くかなんかすると思わないか？」

もしかしたら、無力化しやすくするために足をへし折ったのかも知れないが、なら止めをさすだろ？また襲われたくないからね。

2つ目は、やはり頭への攻撃の方が遣りやすいはずなんだ。下半身への攻撃だと、攻撃側は中腰か、もし立って攻撃してるとしたらゾンビのあの突き出した手をかいくぐる必要があるだろ。

あの力は半端じゃないし、誰だってゾンビに掴まれたく無いはずなのに、危険な戦い方をまかつていてやっているように思える。

3つ目なんだが…自分達には危害が及ばないように……危害が及ばないと言い過ぎかも知れないが、わざわざ足を狙えるだけの技量か人手があるのに…殺してないだろ。

逆に普通のゾンビより見た目に気味が悪いよな。つまり、あの程度のゾンビなら自分達には脅威にはならないが、弱者には視覚的に『怖さ』『不気味さ』がある反面、身体的には、ただでさえ鈍いゾンビが更に鈍いんだ。一か八か！走り抜けるとか何とかかなりそうにも見えるだろ。

こんな状況の中で、それを楽しんでやってるんじゃないか？って思えるだけなんだがな。」

「だから、わざわざバンに戻ったんだ。最初は、俺達が使える量だけの銃器と弾薬だけにして、他にも武器を探しに来た奴や警察に残して思ってたんだが……」

もし、そんな奴らがいて銃器を手に入れたら？とてつもなくヤバくないか？だから、銃と弾がセットにならないようにしたんだ。

ただ、警察の決死隊の件もあるから、拳銃と9ミリ弾だけはそれなりに残して来たんだ。

後は念のために遠回りしてるだけさ。遠回りしている間に、空のマガジンに装填も出きるしね。」

怪訝そうな顔をみせているくるみに対して

「どうかしたのかい？」

「近藤さん。夜叉丸っていう暴走族知ってますか？」

「夜叉丸？聞いたことがあるような気がするけど……ごめん。名前すらこんなレベルだ。で夜叉丸がどうかしたのかい？」

「夜叉丸ってこの周辺の8県程にまたがってるんです。総長って人がこの街の出身なんです。

凄く頭がいいんですけど……冷酷なくらいに冷静なんです。多分、人の命なんか何とも思わない奴で……人殺しのクセにのうのうと生きてるんです。近藤さんの言うイメージにピッタリ当てはまります。」

くるみの目の奥にどす黒い光を感じた近藤は

「詳しいみたいだから、コンビニに戻ったら教えて貰おうかな」

近藤の話はくるみの耳に届いてはいかなかった。くるみは、手が白くなるほど強くMP-5を握りしめていた。

夜叉！見つけたら、何が何でも蜂の巣にしてやるからな。絶対に忘れないからな！

くるみの様子がおかしいことには触れずに、ゾンビを倒す方法や、ハンドシグナルの説明などをし、たまに進行上に邪魔になるゾンビを排除しながら後1時間ほどで夕闇が迫るという時間になったところで車をコンビニに向けた。

「何か、カーチェイスでもあったのか？派手に車が突っ込んでんな。いくらゾンビが出たって言っても、こんなのは今までなかったぞ。」

近藤の運転する車は数時間前に、夜叉丸の連中に追いかけて回されて、中野、高橋両巡査がカーチェイスを繰り返していた一角に差し掛かっていた。

「近藤さん、今、突っ込んでた車のステッカーみました？さっきの話しの暴走族の夜叉丸の車みたいです。」

「なら、注意が必要かもしれないな。銃の用意は大丈夫？」

「はい、近藤さんのデッカいライフルのもマガジンを10個作ります。助手席に置きますね。」

いきなり車が急停車し、ゆっくりとバックで道を戻り始めた。

「中野巡査の車のナンバーって覚えてる？」

くるみは首を振って知らないことを伝えた。

「たしか…『む 526』だったと思うんだか…」

ゆっくりと車を進めながら、3台の車が黒焦げになっている場所に到着した。

「あまり、見かけないタイプの車だったから…まさかとは思つが…」

車は黒焦げでナンバーは確認出来なかった。

周りにゾンビがいないこと確認して、車を降りた近藤は周りを調べ始めた。

車のサンルーフから見張ってたくるみは銃を構えて周辺に注意をむけながらも、3台の内2台の車のシルエットが改造車であることに気づいていた。

暫くして近藤が車に戻り、コンビニに向けて車を発進させた。

「改造車は暴走族の車みたいだった。近くに鉄パイプと、釘を打ちつけたバットが落ちていた。後これも……」

近藤の手には小さな回転式の拳銃が乗っていた。

「M37エアーウェイト。通常、警察官が持つてる銃だ。間違いであって欲しいが、珍しい車に、この銃、さらに近くには割れたライオット・シールドもあった。結局誰も助けることが出来なかったと言う訳だな。つくづく、無力な自分が情けないな……」

近藤とくるみの目から一筋の大粒の涙がこぼれ落ちた。

第六歩 無力（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしてます。

おーい お待ちしてるが、誰も感想を書いてくれないからてつまるの心は乾燥してます。

誰か！感想書いたってや！

おもしろい？くどい？

みんな どう思ってるんか 教えてえなああゝ

第七歩 再会（前書き）

相変わらずのバタバタな生活の中での執筆は厳しいですが、評価点が増えたり、感想を書き込んでいただいていることが、大きな活力になります。

今後ともご愛顧お願いします。

第七歩 再会

近藤は、車をコンビニに向けて走らせ始め、涙で目がにじむ中、助けることが出来なかった悲しみを振り払おうと袖口で涙を拭いながらハンドルをきり交差点を曲がった時、前方を走りすぎる何かを目の端に捉えた。

ゾンビか？いや、ゾンビにしては早すぎる。人か？

近藤の足は自然にアクセルを大きく踏み込んでいた。

「くるみちゃん！生存者がいるかもしれない！後を追うから！」

車の加速に少しバランスを崩しながら、近藤の言葉に反応して、くるみは、MP15のコッキングレバーを軽く叩きに初弾をMP15の薬室に送りこんだ。

「用意はOKです。かも知れないって？どついう意味ですか？」

「はつきりとは見えなかったんだ。ただ……もしあのスピードでゾンビが動けるとなると、明日は俺達の命日だろうな！走ってた！多分、生存者だろう。ともかく追いかけるぞ。」

矢先に、何かが走ってきた方向の路地裏からゾンビがぞろぞろと現れ始めた。

「路地からゾンビが出てきました！追われてたのかもしれないね。」

「わかった！1匹でもいいから減らせそうか？」

近藤がサンルーフの開閉ボタンを操作した。

「車が揺れてるから気いつけてな！」

サンルーフから身を乗り出すくみの姿をバックミラーの端に捉えながらハンドルをきり、狭い路地に車は突っ込んで積まれたゴミ箱や廃材を弾き飛ばしながら、数秒で路地を突き抜けて道路にでた。

いた！前方20メートルほど前方を小柄な人が懸命に走ってる。背丈からすると中学生くらいか？ショートカットだが女の子みあいだぞ！

「前方に発見した！前に出て『人』だったら車に乗せるんだ！くるみちゃん、確認任せてもいいか？右側だ！」

サンルーフから乗り出していた身を車中に滑るようにもどし、後部のスライドドアのロックを外し開閉ノブに手をかけながらくるみが叫んだ

「OKです！」

近藤は更に加速しながら、車のホーンを鋭く3度鳴らしこちらの存在を示し、走る人の数メートル前方を遮るように急停車させた。

車が止まると同時に、くるみが銃を構えながら車から飛び出した。近藤は運転席から周囲を警戒していた。

「あつ！」逃げていた人とくるみが同時に声を上げた。

そこには、中野巡查達と車でコンビニに先行した内の1人 八木沢香がボロボロの服装で顔には黒い炭をつけ、汗まみれの姿で立ち尽くしていたのだ。

眼よ！眼を見るの！眼は大丈夫！噛まれたような後は？無い！・・・
・よし！大丈夫だ！

素早く駆け寄ったくるみは香の手を掴み、引きずるように車に戻った。ドアのロックを閉めて

「さっき分かれた武道場にいた女の子です！カーテン閉めます。」

よっしゃあ！！近藤は車をスタートさせた。

くるみちゃんは、噛まれた後を確認しているんだな。カーテンを閉めたということは服の下まで確認か・・・

もしかしたら、他の生き残りもいるかも知れないな。戻るか？まだ日が暮れるまでには小1時間は大丈夫そうだな。

近藤は車をもう一度、先ほどの事故現場の方向に向けた。カーテンが開かれて、くるみから貰ったスポーツドリンクを貪るように飲んでいる香の姿をバックミラーが見え、その横で親指を立ててOKサインを出しながら、笑っているくるみの顔が見えた。

香がスポーツドリンクを飲み干すのを待ってから

「えっっ、ごめんな。名前が思い出せないんで・・・。もしかしたら、思い出したくはないかも知れないけど、他のみんなのこと

を教えてください。」

ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえ

「私は、八木沢 香です。中学3年です。……コンビニに向かっていたんですが、途中で変な人達が道を塞いで、逃げたら車をぶつけてき始めたんです。」

優香さん、いえ中野巡査が、何とかって言う暴走族だって言ってきた。危ない人達みたいで、絶対に捕まったらだめだ、車をぶつけてもいいから逃げてと高橋巡査に言っていました。捕まったら、女性全員犯されて乗り物にされるって……

で、高橋巡査が車をぶつけたりして、途中から中野巡査がサンルーフから拳銃を撃ち出したんです。しばらくして、急に車が傾いてあわてて掴んだところがドアを開けるノブっていうんですか？車がつのめったかと思うとまた急に動き出して、その時に、ドアが開いて私と達也と中野巡査が外に放りだされたんです。

車は、そのまま暴走族の燃えてる車に突っ込んでいったみたいで、気がついたら燃えてました。放り出された時に、達也の足の骨が折れたみたいで片足が変な方向に向いてたんです。

そうしている内に、交差点の角からゾンビが現れて……。中野巡査が囷になるから達也と逃げろって言うてくれたんですが、私じや達也を連れて逃げるのは無理だし、中野巡査は拳銃を持っていたし、達也の横には盾も残っていたんで……

私が囷になりますって、大声でわめきながらゾンビに向かって走り出して、途中で方向転換したりして走り回ったんです。でも、あっちこっちからゾンビがウジャウジャと出てくるんで、結局逃げ回るので精一杯で……。もう走れないというところがさっき助けてもらったところです。」

香が説明している間に、車は事故現場に戻ってきていた。

「そこです。その赤い車の横で、中野巡査と達也と別れたんです。」

「くるみちゃんは、香ちゃんここで待ってて。ゾンビは別にしても、その暴走族が現れると厄介だな……くるみちゃん？ 暴走族撃てる？」

ええつつつ、撃たないと……捕まったらレイプされるんだよね？
くるみさんも私も！ 初体験がレイプで、しかも暴走族に？ もちろん輪姦だよな？……嫌！ 嫌！ 嫌！ ぜっ……たい嫌だ！（香）

ガクガクと震えながら、頭を左右にブンブンを振っている香の横でくるみが冷静に言い放った。

「大丈夫ですよ。夜叉丸の奴らだったら撃てます。ゾンビじゃないから、身体はどこかに当てれば取り合えずはOKですよ！ その場合どっちの銃の方が適切ですか？」

こともなげに「撃てる」と言い切るくるみは、いつものやさしい眼ではなく、どす黒い冷酷な眼をしていた。

また、眼の色や雰囲気が変わったぞ、夜叉丸とくるみちゃんは何かの因縁があるみたいだな。聞いても話してくれるとは思えないが……しかし、今は2人を探すことが先決か。

「銃についてか……距離がある場合はMP-7。50メートルを切る距離くらいならMP-5でもOKかな。あまり離れないようにするが、今回ばかりはMP-5では、襲われていることが音で判

断がしにくいからMP-7をかな」

「わかりました。香ちゃん、手伝ってくれる？」

くるみは荷台に身を乗り出して。MP-7用の空マガジンと弾丸の包みを引っ張り出していた。

「近藤さん。装填済みのマガジンは3本あるんで大丈夫です。暗くなると危なくなるんでしょう？足りない分の装填は香ちゃんに手伝って貰いますから出発してもOKです。」

「分かった！20分で戻るから。周囲には十分に注意するんだぞ！ゾンビ相手の時は音に注意な！」

近藤は、G36を構えながら周囲を警戒しつつ、通りを進んで行き最初の路地を曲がりくるみ達の視界から見えなくなった。

くるみは香にマガジンへの弾丸の装填方法を説明し、香が1人で出来るようになったことを確認し、更に近藤用のG36の5・56ミリ弾やMP-5用の9ミリ弾などと空マガジンを後部座席の足元に置き装填の準備をした。

路地を慎重に進む近藤は、路地の中での店舗の裏口に注意しながら2人を探していた。路地の3分の2を探し終えたが、店舗の裏口はどれも鍵がかかっており内部を確認することは出来なかった。

路地を抜けて表通りに出たところで、200メートル程はなれたところのゾンビの群れを発見した。G36に備えつけてある照準器で覗いてみたが、生きた人間は見えず、ただ、20体程のゾンビが当ても無くうろついているだけであった。

「7分か！確認しながらなんで結構時間がかかってるな。少しペースをあげないと日がくれちまずぞ。」

腕時計に目を走らせて経過時間を確認した後に、近藤は通りを一瞥しながら自分ならどうするかと考えた。

香ちゃんが交差点からゾンビに向かって走り出したんだから、逆方向に逃げるのがベストだよな？位置からすると燃え盛る車を迂回して向かい側に行くには時間がかかるし、前方は路肩に乗り出した車が道を塞いでいたから、この路地を抜けたはずなんだが・・・

どこかの店舗に逃げ込んで隠れているのか？この通りの全店舗を確認は出来ないし・・・仕方が無いか。背に腹は帰られないな。

危険を承知の上で、近藤はG36を構え直して先ほど確認したゾンビの集団に対して、バースト射撃（3点射）で銃撃を開始し始めた。ゾンビの数を減らすことと、音を出して隠れている2人に救助に来ている者がいてることを知らせるためのも行動であった。反面として、1人で行動している近藤は後方の安全確認が出来ない危険な状態を作り出す可能性が高かった。

1マガジン分の30発を撃ち尽くしたところで、前方のゾンビの4分の3が倒されていた。マガジンを交換しながら周囲を確認した近藤は左後方の書店と通路向かいのレストランからゾロゾロとゾンビが吐き出されてくるのを確認した。

マガジン交換の終わったG36をスリングで肩にかけなおし、脇のホルダーからP46を引き抜き、出てくるゾンビの数を目測し数の少ないレストランから出てくるゾンビに向かい走り出した。7、8メートルのところで立ち止まり、レストランから出てくるゾンビの頭にレーザードットを合わせては撃ち、合わせては撃ち、次には書店から出てくるゾンビに同じことを続けた。全部を倒すのに2本目

のマガジンを費やした。再度周辺に注意を向けるとあちらこちらの店舗から、ゾンビが出てき始めていた。

「どれだけいてんだよ！てか、こんだけ、銃撃で音だしても生存者が出てこないって・・・」

愚痴りながらも、ゾンビとの距離を測りながら50メートルを切る位置に近寄るゾンビに向かってP46から切り替えたG36を向けて1体ずつ始末していった。

「まだかよ！この辺りにいてないのか？早く反応してくれ！もう2分が限界だぞ！」

周辺360度にゾンビが現れ始めて、近藤は焦り始めていた。

中野・達也

香が囷になってくれたおかげで、2人はその場を退散することが出来たが、足を骨折している達也を庇いながらの敗走は簡単に距離を稼ぐことが出来ず。路地を抜けたところでゾンビに見つかり手近な雑居ビルに逃げ込んだ。

事務所らしき部屋ばかりで、どこの部屋にも鍵がかかっていたが、2階に1室だけ鍵の閉まっていらない部屋を見つけて飛び込んだはいが、室内には2体のゾンビがいた。

「達也くん！下がって」

達也を庇うように、ライオット・シールドを使って両手を挙げて我先にと近づくゾンビに対峙した中野であったが相手が悪かった。2体の内の1体は少なく見積もっても中野巡査の3倍近いレスラーのようなゾンビであった。

運良く、最初に2人にたどり着いたゾンビは普通のサイズであり、狙い済ましていた中野巡査のライオット・シールドを利用したタックルがカウンター気味に入り、簡単に後方に突き飛ばし転がすことが出来たうえに、めくら撃ちした銃弾が頭に当たり1体は殺すことが出来た。直ぐに、もう1人の大柄なゾンビに向かってライオット・シールドを両足を踏ん張り構えて対峙したが、一撃でシールドごと吹き飛ばされてしまった。

「ガッ………!」

壁に吹き飛ばされ叩きつけられた衝撃で中野巡査の意識は無くなっていた。

中野を吹き飛ばした勢いのまま達也に達したゾンビは、達也を抱え上げるようにし左腕に噛み付いた。

「ぐわあつつつつ」

信じられない痛みに気を失いそうになる達也の目に、ピクリとも動かずに床横たわる中野巡査の姿が入ってきた。

「優香さ……ん……」

男勝りで勝気な性格とアイドル並の容姿がアンマッチな中野巡査は、

「ツンデレのゆうちゃん」と呼ばれて、柔道を習いに来ている男子の中では憧れの的であった。自分がここで死んでしまったら、優香も同じ用に喰われるのだ。今まで見てきた、臓物を引きずり歩くゾンビになるかもしれないのだ。

守りたい！守りたい！優香さんを守りたい！神様！力を！……心が張り裂けそうに願った瞬間に自分の中から信じられない力が湧きあがるのを感じた。

『お前らに柔道を教えるのは、喧嘩に勝つためじゃない。保護者向けに言う精神修行でもない。守る相手が出来たときに守るために、俺は教えているんだ。』

教官の言葉が蘇ってきた。やれる！やるんだ！もう俺は助からないんだ！優香だけは守るんだ！

達也は肉を喰いちぎられた左腕の痛みを耐え、何とか右腕をゾンビの首の回し、ゾンビにおんぶされる格好でくらくらいつき、肉をこっそり喰いちぎられた左腕で何とか胸ポケットのボールペンを握りしめた。

「うおおおおっ」

達也は感覚がなくなり始めている左腕を振り上げて、渾身の力でボールペンをゾンビの耳に突き刺した。耳からまっすぐに突き刺さったボールペンは脳の一部に届き、ゾンビの動きが中断した。その瞬間に達也は、自分に指を渾身の力でゾンビの耳に突き刺した、指の骨の折れる嫌な音とともに、ゾンビは崩れ落ちた。

「ま・守ったぞ……」

激しい銃撃の音で、中野は無理やりに意識を引き戻された。

何で、床に寝てんだろう？って、ここは何処？あの五月蠅い音は何？

モヤがかかる意識のままに、周囲に視線を向けたところでゾンビの死体を見て一気に意識が覚醒した。

そうだ！ゾンビに襲われたんだ！拳銃は？

辺りを見回すと頭のやや上の所に転がっていた。急いで拳銃を拾い上げ

「たつやくん？どこ？」

ゾンビを刺激しないように小声で達也の無事を確認しようと声を出した。

僅かなうなり声を聞いた中野は注意しながら、声の方向に近づいていった。

「！！！！！！！！・・・たつやく・・・ん」

そこには、左腕の筋肉がなく骨がむき出しになり手の指がグチャグチャになった達也が壁を背にして虫の息でたたずんでいた。

「優香さん。無事で良かった。ゾンビはやつつけたからね・・・」

血の気のまったくない顔を上げて達也がぎこちない笑顔で中野を見つめた。

駆け寄ろうとする中野を鋭い声で制した達也は

「ごめんなさい。さっきから、意識が飛びはじめてるんです。すごい空腹感が……。そ・それ以上近づかないで下さい。多分、俺、ゾンビになっちゃうんだ。せつかく、助けられたのに……。今度は俺が優香さんに危険を及ぼすことになっちゃうなんて……。外の音……。誰か助けに来ているんだと思います。逃げて下さい。」

出来れば逃げる前に、人間らしく死にたいです……。撃ってもらえませんか？……。」

言い切ると達也はガクリと首を落とした。

「そんな……。うそでしょう？私が助けなきゃなんないのに……。達也くん？達也くん？」

達也の肩が大きく揺れたと思うとゆっくりと顔が持ち上げられた、白濁した目、涎のたれた口元……。紛れもなくゾンビ化した達也であった。ただ、折れた足が邪魔をして立ち上がれず、中野に向かって這いずってきた。

中野は何も考えることが出来なくなり、大きく叫び声を上げて扉からビルに飛び出していった。

近藤はゾンビに包囲されながらも、30メートル程度の防衛範囲を

死守し、2人がどこかのビルから飛び出してこないか注意してここにいきなり、後方のビルから中野が叫びながら飛び出てきた。

「中野巡查！こっちに！」

前方のゾンビに適当に銃弾をばら撒きながら、近藤は中野が出てきたビルに後ずさりを始めた。前方の脅威がある程度落ち着いたところで、中野に視線を向けたところ、一目散に路地に消えいく中野が見えた。

「まったく！何やってんだよ！」

近藤は、慌てて後を追いかけて路地に突入した。

「待てって！」

走り去る中野の後を呼び続けながら走る近藤の後を、千鳥足のゾンビ達がゾロゾロと縋るように追いかけていた。

「あ！」

路地から飛び出してきた中野巡查の姿を見つけて、香がいきなり車から飛び出していった。

その、香を追いかけてくるみも車外に飛び出した。香は一目散に中野に向かって走りよったが、中野に突き飛ばされていた。

混乱している中野には香の姿がゾンビに見えたのだろうか？

何してんの？あの人？

くるみは目の前を通りすぎる中野の足元に自分の足をひよいと突き出した。その足に引っかけた中野はもんどりうって、地面を転がっていった。

転がった中野を冷静に見つめている間に、香と近藤が到着した。

「無事か？何がどうなってんだ？」

「婦警さん、何かショックで混乱しているみたいですよ。顔見知りの香ちゃんすら突き飛ばしてましたから」

「ともかく、車に乗せよう！香ちゃん手伝って、くるみちゃんは周囲を頼む。」

無事に中野を車に乗せた一行は、薄暗くなる通りをコンビニに向かって走り去った。

車庫に車を入れて、エンジンを切ったところで近藤は助手席に座るくるみに向い

「長い1日だったな。ご苦労さん。」

「本当ですね。ゾンビが現れてからまだ2日しかたっていないんですよね。夢じゃないんだ、明日、目覚めても同じことの繰り返し・・・」

「グダグダ言っても始まんないさ。中野巡査が目覚める前に荷台の荷物の一部を部屋に運ぼうか、香ちゃんも手伝ってもらえるかな。ここは、取り合えずは安心だから、今晚はゆっくり眠れるよ。さあ、

やんちゃ！

第七歩 再会（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

番外編？ 極楽温泉―1（前書き）

番外編というのもおかしいですが、一部にご要望のありました、近藤さんの妻子の状況を番編としてお届けします。

そうしないと、まだまだ救出に行くどころかくるみの救出から丸1日が経過しない状態ですので……
しばし、番外編をお楽しみ下さい。

番外編？ 極楽温泉―1

「お母さん、何か館内放送が流れてるよ。部屋から出るなっとか言ってるし」

3人でワイワイとガールズトークと繰り返していた中で、途中でジュースを買いに行き戻ってきた長女（近藤 由真）が不安そうに言った。

「ええ？これから露天風呂に行こうと思ってたのに、外に出れないと川べりの露天風呂にいけないじゃない。フロントに聞いてみるわ。」

母親（近藤 由美子）は部屋に備え付けられた電話でフロントを呼び出していた。何度かかけなおした後にやっとフロントに繋がった。

「一体全体どういうことなんですか？温泉に来て部屋から出ないなんて……は？テレビですか？ええいいですよ、7チャンネルですわね。」

由美子は由真にテレビをつけるように指示をして、テレビに映像が映るのをまっていた。黒い画面がいきなり明るくなって途端に、目が白濁して、顔半分の皮膚が無くなり骨がむき出しになった人間が何かを必死に食べている光景が映し出された。

「！」

由真と由紀（次女）が手にしていたジュースを畳に落としてしまい、

ジューズで湿った染みが広がっていった。

何故だか、由美子は画面に驚きもせずに電話に向かい

「もしかして、主人からドッキリの依頼でもありましたの？ゾンビ物の映画ぐらいじゃ驚きませんよ。もう！主人も旅館を巻き込んで・・・」

といった瞬間に、画面が切り替わり7チャンネルの有名はアイドルアナウンサーが真っ青な顔で説明を始めたところで由美子の手から受話器が落ちていった。

「ほんとに？現実の話し？・・・」

改めて受話器を拾い直した由美子は、電話口で信用しなかった非礼を詫びた後に、旅館の周囲でこのような状況になっているのかを尋ねた。

「まだ、旅館の方には現れていないのですが、仕入れから帰ってきた板前さんの話では既に、駅の周りでは変な歩き方の人が出てたということらしいんです。旅館の方としては、正面玄関以外の入り口は既に閉めまして、念のために重い什器をバリケード替わりにしていますんで、当面は大丈夫かと思っています。」

警察にも電話してのですが・・・警察自体が混乱してまして、話しを総合すると、この近辺の旅館には隣町に駐屯している自衛隊が救出の向かう予定らしいんです。」

「今の内に車で逃げる方がよろしいんじゃないですか？まだ、この辺りにはいてないんですね。いざとなったら車なら・・・」

「お客様のおっしゃる意味は重々分かりますが、現時点では何処に逃げればいいのか、避難所が安全なのかも検討がつかないのです。当方としましたは、お客様の安全を第一に考えたいと思っております。

幸いにも、本日は夕刻に到着のお客様にキャンセルが出ておりまして、現在のお客様数でしたら当面の食料なども十二分にこと足りります。

更に、支配人の決断で当方に出入りされている猟師の方を3名ほど呼んでおりまして、旅館側としての自衛手段も考えおりますので・・・
ですが、最終判断はお客様にご一任させていただきます。」

「車で逃げる人はいるの？」

「現在、お泊りのお客様50名の内20名程度の方がお車で移動されると伺っています。この事態ですので、ご精算などはいたしました。なので、当旅館を離れられる場合は人数の確認のために、ロビーで受付だけをお願いしております。危険防止のために、17時には正面玄関も閉鎖する予定ですので、お車で逃げられる場合は17時まででお願いいたします。」

受話器を置いた由美子はしばらくの間呆然としていた。

「お母さん！お・か・あ・さ・ん！」

由真の呼びかけと同時に肩を揺さぶられて由美子は我にかえた。

「もう、お父さんを置いてきたバチがあたったんだよ！よりによってゾンビだよ。まるで、来れないお父さんの呪いじゃん！」

こんな時に、ゾンビマニアのお父さんがいたら、何とかなるのに！」

「馬鹿なことを言ってるんじゃないわよ。何でお父さんの恨みでゾンビが出てくるのよ。今回の風邪だって、先週から風邪みたいだから医者に行けばって忠告を無視したのはお父さんなんだから。今日だって、由真もお父さんを置いていくのに反対しなかったじゃない！」

2人の言い争いを横目に、由紀は黙々と旅館の浴衣から普段着に着替え出していた。着替えが終わった由紀はスマートフォンを持ち出して、保存してある父親が執筆しているゾンビ小説のおまけの『ゾンビに遭遇した際の用意』を読み出していた。一通り読み終えた由紀は、未だに言い争っている母親と長女に一喝した。

「お母さんもお姉ちゃんも、浴衣のまんまだといざという時に逃げれないよ！着替えて！出来ればパンツルックよ。スカートはイザという時に動きが鈍るからね！それと荷物は最低限の着替えとかを入れて1つにしてね。逃げる時に持つ荷物だよ。それ以外は出来るだけ固めておいて部屋の移動時には直ぐに持てるようにして。お姉ちゃん、ヘアースプレー持ってたでしょ！それとライター！私に渡して！」

「ラ・ライターなんか・・・持ってるはずないじゃん！」

「いいから、いいから、生きるか死ぬかでライターもタバコもクソもないよ。出して」

由紀の勢いに押されて、ヘアースプレーとライターを差し出す由真に対して由紀子が

「由真！アンタ何時からタバコなんか吸うようになったの！」

「お母さんウルサイ！緊急時かもしれないんだからね！タバコやライターごときでグチグチ言わないで！」

「そうだ、おかあさん、剃刀もって来てたよね！それも出して！」

「あつ！それとお父さんに電話しておいてね！私は自販機で飲み物と売店でスナック菓子を入手してくるから」

「出ちゃ駄目だって……」

由紀子が止める間もなく、由紀は部屋を飛び出していった。

「お母さん、あの子が一番お父さんの影響受けてるし、一番肝っ玉が据わってるから……」

「そうね。あの子は一番あの人に似てるもんね……でも、あの子が出でいっちゃったから車で逃げるのは……出来なくなっちゃったわ。」

一方、無人の旅館内をうろつく由紀は、先ほどのスマートフォンを引っぱりだして

「さてと、お父さんのマニュアルではと……飲み物と食料の確保と……何々、甘い物だけでなく、ビスケットなども必要と……うむうむ。」

武器は木刀やバットか？旅館ではバットは手に入らないよな。でも、お土産店なら木刀くらいあるかも知れないわね。」

20分ほどして由紀が部屋に戻ってきた。

「あんだ、何をそんなに大量に持ってきてんのよ？お金はどうした

の？」

畳に広げられた、スナック菓子やビケット、ペットボトルのお茶に木刀……

「いいから、いいから、ペットボトルは1人4本ずつね。スナック菓子もちょうど3人分ずつ用意してあるから、緊急用の荷物にいれてね。」

木刀は2本しかなかったから、私とお姉ちゃんが持つわよ。いい、お姉ちゃん」

さつさと、自分の荷物を用意した由紀は、窓際に近寄り周辺の様子を確認した。

「！！居てる。駐車場の入口に変な歩き方の人影がある！」

由紀は、電話に取り付きフロントに電話を入れた。

「はい、フロントです。」

「301です。窓から見たら……駐車場の入り口辺りに変な人影が見えます。」

「本当ですか？分かりました。猟師さんも到着されたので確認に行ってもらいます。念のため大広間に非難してもらうことになると思いますので、ご用意いただけますか。」

電話を切った由紀は、窓際から様子を確認していた。

旅館フロント

「支配人！301号のお客様からです。駐車場の入り口付近に変な歩き方の人影が見えたと……」

「田中君！警察と自衛隊には連絡ついたか？」

「いえ！自衛隊より40人位の部隊がこの旅館に向かってるとだけしかわかっていません。付近の旅館やホテルも自主避難でお客様も従業員も車で脱出したみたいです。」

「市原のじっさん！竹中さんと2人で確認に行ってもらえますか？」

支配人が、年のいった白髪のたくましい身体をした老人に話しかけていた。

「支配人、3人しかいない猟師さんの2人を出てしまわれると……
・お客様を……」

副支配人が、猟銃を持つ3人の内2人が確認に行き、もしものことがあった場合のことを示唆した。

「あっしが行きます。先ほど、駅前でも変な奴らを目撃してますし。」

その時、板前の吉原が大きな出刃包丁を右手に持ち自分が市原と同行すると立候補をした。

「よし、吉原君、頼んだぞ！じっさん、頼んだよ。署長からの話ではゾンビの見分けは『目』だそうだ。白く濁っているそうだ。警察や自衛隊でも白濁した目を持つ人間は射殺命令が出ている。頭が急所らしい。頼んだよ。」

大きく頷いた市原は、猟銃の弾を再確認して吉原を連れて駐車場に向かって正面玄関を出た。

支配人は、他の従業員を集めて、2人が戻り次第玄関を閉鎖しバリケードを作る用意をして、同時に館内放送で大広間にお客様を集めるように指示していた。

「支配人！車で脱出した、大和ホテルの友達から携帯で連絡があったんですが・・・駅前を含む市内はゾンビが大量に溢れているらしく、車も事故車両などで身動きが取れないらしいです。彼も30分以上渋滞に巻き込まれているそうです。」

「そうか！我々に選択が正しかったと言えればいいんだが・・・」

「吉原君、アレがそう見たいじゃない。気をつけて近づいて確認するぞ。」

「い・市原さん。右方向にも2〜3人居てますよ！どうしましょう？」

「バラバラになるのは危険じゃから、近いほうじゃな・・・左の方が若干近いようじゃ。先ずは左の方から確認するんじゃ。もし

も、バケモノじゃったら撃ち殺して直ぐに旅館にもどるんじゃない！」

市原と吉原は前方だけでなく、周囲を警戒しながらも確認のために近づいていった。10メートル程の距離になった時に、驚いたような声を上げて出刃包丁を危うく落としそうになった。

そこには、3年前に出て行った妻がどう見ても死人としか思えない姿で、両手を突き出しながら歩いているのである。

「何故？お前がここに居てるんだ？東京に行ったんじゃないのか？」

死人の元妻に向かって大きな声で叫んだ。そう、彼女は自分の勝手で若い男と東京に出て行っていたのだ。

吉原の声に反応してか、元妻のゾンビをその周りにいたゾンビが、吉原に向かって進んできた。

ズガン！ と甲高い音がして、元妻をその周辺のゾンビが数歩退くように後退した。

「くそつたれめが！こんな弾じゃだめじゃな！スラッグを使うしかないようじゃぞ！」

ズガン！ズガン！と立て続けに2発の散弾をゾンビ達に撃ちこんで

「吉原！旅館に戻るんじゃない！」と声をかけて一目散に旅館に向かって走り出した。

「ちょ！ちょっと！」

慌てた吉原は走り出した途端に、足がもつれて数歩、数メートルの
ところの地面を転がる羽目になってしまった。

慌てて起き上がって、再び走り出そうとした瞬間に肩をものすごい
力で捕まれた。ギクリとしながら、恐る恐る振り向くと、元妻の朱
美が大きな血だらけの口を信じられないくらいに広げていた。

「うおおおおおつ」

思わず、出刃包丁を振り上げて掴みかかられた腕に振り下ろしてい
た。一流の職人の出刃包丁は毎日毎日精密に砥ぎすまされており、
とんでもない切れ味を見せた。腕を切り落とされても更にその傷口
を身体に押し付けよう近づく朱美に対して、吉原は長年に渡って我
慢していた気持ちが爆発した。

手にした、出刃包丁を上段に振りかざして、一気に朱美の頭に振り
おろした。包丁は脳天から入り頬の辺りで止まった。

その出刃包丁を力一杯に引き抜いて、再度振りかぶりめつたやたら
に朱美の身体を切り裂くように出刃を打ち据えた。

「お前が！お前が！若い男と馬鹿なことすつから、俺は・・・俺は・
・近所でも情けない思いをし続けたんだ！くたばれくたばれ！この
売女が！」

数度と無く、既に動かなくなったゾンビに出刃包丁を叩き込みなが
ら、フツと周囲を見ると、吉原は5体のゾンビに囲まれて、今にも
掴みかけられる瞬間だった。

一目散に旅館に走り去った市原が途中で振り返りつてところ、吉原
がゾンビに馬乗りになりながらも戦っている姿を見て、周囲のゾン
ビが吉原を囲むように近づくのを見て

「何をやっとするんじゃ！あいつは」

市原は、間に合わないかも知れないと思いながらも見捨てる事は出来ずに、踵を返して、吉原に向かって走り出した。

「うわああああああっ・・・」

ゾンビに囲まれた吉原は、無我夢中で出刃包丁を滅茶苦茶に振り回した。恐ろしい偶然が吉原を助け、振り回す包丁がゾンビの差し伸べる手を次から次へとなぎ払い切断していった。

最後の１体になった時に、滅茶苦茶に振り回したツケが回ってきた。その時点で大量の血肉を吸った出刃包丁は本来の切れ味を完全に失っていた。

噛まれることを覚悟して身を硬くしてまま、座り込んでいた吉原の耳に轟音が聞こえ、恐る恐る目を開けたところに頭の無いゾンビの死体が落ちてきた。

「ヒイイイ！」

思わず立ち上がったところに

「こつちじゃ！」と市原の声が聞こえた。

吉原は声の方に顔を向けると、銃口から煙が出ている猟銃を構えている市原の姿が目に入った。

腰を抜かしながらも、市原の横までたどり着いた吉原に

「なかなか勇敢じゃったのお。相手が多すぎるじゃろ！ここは逃げるが勝ちじゃぞ！走れ」

2人は必死に走って旅館の入り口まで戻っていった。入り口には心配した猟師仲間の2人が猟銃を構えて待機していた。

「バードショットじゃ駄目じゃったよ。バックショット（鹿などの中型動物猟用の弾）かスラッグ（一粒弾）で頭部を狙わんとむりみたいじゃ！」

市原の説明に猟師の1人が答えた。

「そうですか！念のためにバックショットもスラッグも旅館のツケで店から大量に持ってます。何とかなるんじゃないですか？先ずは、弾帯の散弾を交換しましょう・・・」

「支配人、予定通りに入り口を封鎖するんじゃない！」

市原の指示に、若い従業員が直ぐ近くに駐車してある1BOX車を2台正面玄関に乗り上げるようにし縦列駐車し、その車の内側に車の間の隙間を埋めるように台風や水害用の土嚢を積み上げていった。

「支配人！車の直ぐ向うまで来てます！」

既にゾンビが、車から10メートルほど離れたところに現れていた。

「急ぐんだ！とにかく、隙間に土嚢を積むんだ急げ急げ！誰か、他の者も呼ぶんだ！」

従業員がバタバタとしながら必死に土嚢を積み上げる中、弾帯の弾

をバックショットやスラッグに交換した市原達獵師が戻ってきて、開きっぱなしにしていた後部のスライドドアから車内に入り、サンルーフから身を乗り出して、ゾンビに発砲し始めた。

市原は、もともとが東北地方の熊撃ち専門のマガギであつたため他の2人に比べて、高い命中率でゾンビの頭部をスラッグ弾で破壊していった。

他の2人は、駆け出しの若い獵師の3代目達であり、主にバックショットを使いゾンビの上半身に狙いをつけて発砲していた。

「どれだけいてるんだ！ざっと見ても50か60は居てるぞ！」

若い獵師が相棒に大声で話しかけると

「いや！入り口からまだまだ入って来てるぞ！」

駐車場の入り口方向から100以上のゾンビが旅館に向かって行進してきていた。

これじゃ、埒がないのお。スラッグもバックショットも500か600ほどじゃったし

「雅坊！バードでいいから全部持って来るんじゃ！バードならどれ位あるんじゃ？」

「バードなら、俺んとくところと武の家のを全部持って来てるんで1000はあります！武！バードを取って来い！それと例の奴も持って来い！」

一旦、旅館に戻った武が3丁のショットガンとバードショット弾を抱えて戻って来た。

「なんじゃ？その散弾銃は？」

見たことのない散弾銃を横目にゾンビを撃ちながら、市原は武に聞いた。

「来月、隣町の自衛隊に納入予定とかの『ベネリ』って銃です。自衛隊への納入品なんで7発入るんで、親父を脅して貰って来ました！」

手渡された、ベネリM4をシゲシゲと見つめた市原はニヤリと笑いながら

「支配人！お前んところの鈴木と倉田を呼べ！あいつらクレ－（クレ－射撃）やつとるはずじゃから、手伝えるんじゃ！」

その後、鈴木と倉田が加勢に入り、元々猟師が持ちこんだ猟銃にバードショットをつめて、車の屋根から至近距離のゾンビに次々に銃弾を浴びせていった。威力の弱いバードショット弾であったが3～5メートルの至近距離の上、高所から頭部に向かって発砲できるので順調にゾンビを撃退していくことが出来た。

駐車場内に信じられない数のゾンビの死体を築き上げて、当面の危機は去ったかに見えた。

猟師達が安堵の笑顔でお互いの健闘を称えていたところに、2階の客室から双眼鏡で駐車場の更に奥の道路を見張っていた従業員が叫び声にちかい報告がされた。

「駐車場奥の道路に……道路一杯にゾンビがいます。100・

・・・100メートルくらいに長さにびっしりです！」

「100メートルびっしりのゾンビ？一体何匹なんだよ？武！残りの弾取りに行くぞ。着いて来い。」

雅と武が残りの散弾を取りに行っている間に、市原が双眼鏡を覗きながら支配人を呼んだ。

「信じられん数じゃ。突破されるのは目に見えておるぞ。今の内に従業員でも客でも構わんから全員で、残りの土嚢で自動ドアの内側を固めるんじゃ。土嚢を積みあげたら、どんな手段でもかまわんから、自動販売機が何か重い物でふさぐんじゃ！まだこの距離だとあやつらがここにたどり着くまでには30分くらいはあるじゃろう。」

それと、丈夫な綱を5本ほど用意するんじゃ。綱はワシや雅坊達に腰にしっかりと結びつけて端は2階に客室に！ギリギリまで車の上から撃ちまくるから、最後はひきあげるんじゃ！2階からではバードで頭を撃つのは厳しいからのお。

ワシは、この新型で射程距離ギリギリに入った奴から撃っていく。ともかく急ぐんじゃ！」

悲壮な顔をした支配人は建物に戻り、矢継ぎ早に指示出して人を集めていた。

齢63。ワシの命もここまでのようじゃのう。雅や武達、若い者だけでも助けてやりたいもんじゃが

市原は覚悟を決めて、ガシャンとポンプを上下させてベネリに初弾を送り込んだ。

番外編？ 極楽温泉―1（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

番外編 極楽温泉 救出部隊―1（前書き）

ご愛読いただいている皆様。

地獄のような仕事のスケジュールの合間をぬって、何とか番外編その2を書き上げることができました。お待たせした分13000文字の読み応えのある量にしています（あえて内容とは書きませんです。あくまでも『量』です）

今回の話しは救出に向かう自衛隊の話しです。

次話では、自衛隊が旅館に到着する？はずです。

乞う ご期待下さい。

番外編 極楽温泉 救出部隊―1

S県 自衛隊駐屯地

「今日の午前で訓練も終了しましたし、小隊長！やっと産まれたばかりのお子さんの顔を見に行けますね。もう1日遅かったら立会えましたな！」

携帯電話を見ながらニヤニヤしていた織田3尉に向かって、火の点いていない煙草を口の端に加えたままの徳川曹長が話しかけた。

2週間に渡る訓練を終えたばかりの第3師団／第35普通科連隊／第3中隊／第2小隊のメンバーは思い思いの格好で食堂内で休息をとっていた。

「待ち遠しいですよ。曹長の所のお子さんはたしか……」

「もう13ですよ。最近嫁さんと同じ口調で文句ばかりで……
・ ・ かわいいのは小学校に上がるまでですわ、女の子は」

思い出したように煙草に火を点けた後に徳川曹長は豪快に笑いながら、右手を差し出した。差し出された右手に自分の見ていた携帯電話を渡しながら

「うちは、男の子なんですが、ちょっと小さいみたいです。なんか・ ・ 携帯の画面だけだとサルみたいで、なかなか実感が湧かないですね。」

「いやいや、結構しっかりした男前じゃないですか！小さかったら、

バンバン飯食わせてデツカクすりやいいんですよ。3尉の息子さんなんだからきつとデカクなりますよ。」

大きな声の徳川に釣られて、他の部下達も周りに集まりだして織田の携帯は次々と部下の手から手へと渡っていった。

ウウウーッ・ウウウーッ

いきなり基地内の緊急警報が鳴り響いた。

「緊急事態発令。緊急事態発令。訓練にあらず。各隊長は作戦会議室に集合。各個は原隊にて集合待機。只今より、基地は封鎖する。」

繰り返す、これは訓練にあらず。緊急事態発令。緊急事態発令。各隊長は作戦会議室に集合。各個は原隊にて集合待機。只今より、基地は封鎖する。」

「曹長！全員を集めて待機しておいて下さい！」

織田は曹長の返事を待つことも無く指示を出したと同時に、椅子を蹴り出すように食堂を飛び出していた。

「何がおこったんだ？これも単なる訓練の一環だといいいんだが、嫌な予感がするな。」

モヤモヤした気持ちのまま到着した作戦会議室には、基地内の数少ない隊長達が集結していたが、誰も非常招集が何故発令されたこの情報は持ち合わせていなかった。

ガヤガヤとしているところに、駐屯地指令官である胡桃沢2佐が数

名の部下を引き連れて現れた。

「敬礼！」

「挨拶はかまわん！全員適当に座ってくれ。」

「準備完了しました。」

会議室の正面に座している大型スクリーンにどこかの都市が映し出されていた。

「梅田（大阪）か？」

高校時代に過ごした大阪の梅田の場末に記憶していたのと同じ建物が次々に映し出されるのを見て、織田は問題が大阪で発生していることを悟った。

「何だ？あれは？」

織田の前方にいた、第9師団の普通科の小隊長が画面を指差していた。

そこには、全身血まみれの人間が5名ほど写っており、その前方に腰を抜かしたのか？1人の男が地面にへたり込みながらも叫びながら後ずさりをしていた。

画面がズームアップされたと同じタイミングで血まみれの数人が飛び掛るように男に群がった。大きな悲鳴とともに、飛び掛った数人は男の身体に噛り付いているように見えた。

画面は変わり、今度は東京の渋谷駅前の広場が映し出された、そこには、大量の血まみれの人間が他の人間に噛み付き、その肉を引きちぎり咀嚼している姿があった。

「・・・・・・・・・・」

誰もが声を出せないでいた。

「諸君！画面の通りのが1時間前に日本各地いや世界各地で一斉に発生した。アメリカやイギリスの諜報機関からは、緊張情勢にあつたリビアが北朝鮮を巻き込んで、全世界で一斉に革命決起と称してバイオテロを実施したとの情報である。

使用されたウイルスは、旧ドイツ軍が終戦間際に開発した最終兵器だそうだ。元々は、アメリカと当時のソ連が冷戦状況にも係らず極秘に回収し、ワクチンの共同開発を目指していたウイルスとのことである。

現時点では、罹患した場合の発症率は100%であり、ワクチンも完成しておらず救う方法は無い。次の映像を見てもらおう。」

画面には、両手、両足を鎖で縛られた人物が立っていた。肌の色は青白く、口からは常に涎を出し、開かれた眼は両眼とも真っ白に白濁していた。

「これが、発症した人間の末路だ・・・・・・・・・・」

この時点で知能と呼べる物は殆ど無く、あるのは食欲だけであり、映画のゾンビのように生きた人間を襲い、食すことにのみに興味を持っている。

また、動きは極めて鈍く、歩く速度も非常に遅いが、常人の数倍の力を持ち、音と臭いに反応するのが特徴である。

但し、マウスの実験では、発症個体の1〜2%が通常以上の運動能力を有することが確認されているので、全ての個体の動きが鈍いとは断言が出来ないそうだ。

この情報は、15分後には警察庁を經由して全警察署にも公開される。国民への発表も近々に行われる予定ではあるが、永田町の面々はゾンビと言う事実をなかなか認めることが出来ないようだ。よって自衛隊と警察は協力して独自判断で行動を起こすことを決定した。

「

「武装排除ということですか？」

織田が代表して質問をした。

「残念だが……その選択肢しかないというのが自衛隊と警察庁の判断だ。白濁した眼を持つ人間に対しては無差別の発砲を許可する。勿論、こいつらに噛まれた人物に対してもだ。」

「噛まれた人物に対してもですか？」

悲鳴に近い声で他の隊長が質問をした。

「そうだ。噛まれた場合……即死なら2分以内にゾンビ化する、躊躇している間は無いんだ。また致命傷ではなくとも最大2日で死亡しゾンビ化する。現在で技術では助けることが出来ない。頭を破壊するか、頸椎を破壊すれば『死ぬ』とのことだ。」

一同は声を出すことが出来ずに作戦会議室は沈黙に包まれていた。その沈黙を破るように胡桃沢1佐が全員を見つめながら命令を発した。

「全部隊。実弾を装備し、ゾンビを駆逐しながら生存者の救出活動に入る。各隊の救出活動エリアは、熊田3尉から指示を受けてくれ。2時間以内に支援としてヘリコプター部隊から人員輸送用に3機。攻撃用に1機のヘリコプターが到着する。」

基地については、正面玄関を機甲化部隊で固め、避難民の引き受けを行う。

以上。質問が無ければ、解散し各部隊で装備を確認のうえ救出活動を開始してくれ。」

各隊長は口々に呪詛の言葉を吐きながら、熊田3尉の元に作戦指令書を取りに行き、各自の部下の元に向かった。

織田に至っては、この訓練直前に中堅層の隊員を異動で失い、隊の2/3が新兵や2〜3年生。3名の班長も徳川を除けば、初めての班長経験者といった状況であつたのであまりの間の悪さに天を仰ぐ気持ちだった。

中庭に集合していた小隊に戻り、織田は指令書を徳川に手渡した。指令書を見た徳川は、信じられないと言う顔をしながら、小隊内の各班長を集め作戦に必要な装備の手配を命じた。

「小隊長！これが事実としたら一体全体……どうやって隊員に説明すりゃいいんですか？」

織田は、徳川の言葉に対して両手を広げて降参のポーズをとりながらも、目と言葉は真剣そのもので

「俺達が派遣されるエリアは温泉街だそです、老人などが多いと予

測されるので、第9師団から衛生兵2班10名が追加されることになりました。その衛生班にノートパソコンが預けられているはずで、衛生班が到着次第、そのパソコンに先ほどの作戦会議室で俺達が見せられた映像や、現在判明している敵への情報があるので小隊内でブリーフィングを行います。信じようが信じまいが…受け入れなきゃならない事実つてやつですね。不謹慎だが…今の内に家族に連絡して避難させた方がいいかもしれない。俺んとも曹長んとも…」

2人はいそいそと家族に連絡をし始めた。

30分後に用意が完了しブリーフィングが終了し、隊員達が驚愕の声を上げるなか

「信じられない話ではあるが、現実には…既に一般人が襲われているのが実情なんだ。国内では唯一、我々が、この脅威に対抗するだけの火力を所持している。勿論。警察とも連携をとっている。

我々は、幸いにも他の基地に比べて、今回から実施された実弾訓練の強化のおかげで、通常の5倍から10倍近い弾薬を携行できる。その上、昨日までの訓練で自衛官になって以来通常では3年分に充たる訓練で消費する実弾量を僅か2週間で消費するほどの激しい訓練を行ったばかりである。

『人』の形をしたバケモノを撃つと言うことは人語に絶するが…
・生きている人を救う為である。全員心しかかってくれ！各個、10分後に乗車。

それまでに家族に避難など勧める…電話を許可する。」

織田3尉は、断固たる声を飛ばし、隊員達を鼓舞しながら命令を下

した。15分後、率いる第3師団/第35普通科連隊/第3中隊/第2小隊のメンバー30名と第9師団からの応援の衛生兵10名は乗車を開始した。

全員の乗車が完了し、織田3尉が乗車するライトアーマー<(軽装甲機動車)定員4名> 2台を先頭と最後尾に配し、73式中型トラック3台<(定員16名)避難民収容用>アンビ(自衛隊所有の救急車)1台、クーガー<(96式装輪装甲車)定員10名>3台は一路S県の極楽温泉へと隊列を進めた。

「徳川曹長。移動中のこの間に、警戒員を残した全員に、ありったけ空マガジンに予備弾薬を装填させておいてくれませんか？出来上がった予備弾薬は可能な限り、まあ、行動に支障が出るギリギリのところまででバックパックなどで携行させて下さい。」

「了解！」

しかし、既に指令書を無視して、全員に通常装備の2倍量を携行させてますんで……あともう1セット程度かと……」

「それで結構です。衛生班員の武装状況と実力の程はどんなもんだんでしょうか？」

「いやあゝ。第9師団と言うのか、彼ら(衛生班)がそうなのかはわかりませんが……」

うちで言うレベルでは、平均で『C』以上の技量があります。少なくとも、昨日までの訓練結果から見たギリギリで『Cマイナス』の新人達よりは役に立つんじゃないでしょうか。異動した連中にはおびませんがね……今の状況では、贅沢は言えませんわ。」

「そうですか。少なくとも衛生班の警護は必要なさそうですね……」

・・・」

しばらくして

「小隊長！第3小隊の高山3尉から入電です。」

ライトアーマーに装備されている遠距離通信機から、雑音に混じった悲鳴を銃撃の音が聞こえた。

「こちら、織田！・・・高山！高山！そちらの様子はどうだ？」

「高山だ！G市の中心街で行動中だが・・・注意しろ！とてつもなくヤバイぞ。どこから現れるんだというくらいの数だ！

観測ヘリからの情報では、市街地を中心とした半径2キロで、上空からの確認された密集度から言えばゾンビの数は最低でも1〜2万と報告されている。

各車両に積んでいる車載のMINIMI（5.56ミリを利用する軽機関銃）用の銃弾がすごい勢いで消費されているんだ。既に各車両2000は撃つてる！

でも、全然は減らないんだ。とてもじゃないが、救出活動どころか・・・誰も車両から降りることさえままならない！今、援軍を要請したところだ・・・

それにこいつらの力は半端じゃねえぞ！パンクして立ち往生したアンビ（救急車タイプの1BOXミニバン）が、20体ほどのゾンビに横転させられちまったんだ！・・・」

「こちら、第9師団／第5普通科連隊／第4中隊／第2小隊、高橋！第10師団／第10後方支援連隊の衛生隊および偵察支援小隊と合流してA県N市西部に到着したが、どこもかしもバケモノであふれ

ている。車載銃器でバケモノを排除し、第1目標の西区のN小学校の避難場所に向かう。既に、途中での一般人の救出で5名の隊員が死亡。

各個、車外での戦闘ではバケモノとは距離をとることを進言しておく。バケモノ共の歩くスピードは遅いが、殺つても殺つてもあふれるように湧いてくる！・・・・・・」

作戦行動開始から時間が経過するたびに、各地の壮絶な状況が報告されており、避難場所に到着後に車外に作戦展開を実施した部隊の大半との連絡が途絶えてしまっていた。

小隊の隊列は、避難民の移動で発生す可能性がある渋滞を避けて現地に到着する方法を選択し、県境の山越えのルートを選択したせいか、1体のゾンビとも遭遇せずにS県の極楽温泉前駅のあるメインストリートまで後数分という地点に差し掛かっていた。

「小隊長！駐屯地本部より入電です。2/3の隊との無線が不通になり、その内の半数はヘリからの上空探索の結果、救出失敗で全滅、または部隊崩壊による敗走との知らせと、駐屯地にも大量のゾンビが押し寄せてきているそうです。他地域も、自衛隊設備県に異常な数のゾンビの発生が報告されています。」

新しい命令では、駐屯地への帰還は行わず各小隊長の判断で避難民の安全を確保すること。24時間以内に、新たな救助方法と避難先を指示することです。」

基地（駐屯地）からの通信報告を受けている間に、車列はS県の極楽温泉前駅のロータリーに到着していた。

「右前方のビル4階に避難者確認！ベランダから5〜6名がこちらに手を振っています！」

織田と徳川が乗車するライトアーマーのターンレット（天井に備え付けてある銃器の射撃操作を行うために、天井部分が開閉式になっているところ）から車載するMINIMI軽機関銃で周囲を警戒している隊員から報告がなされた。

織田は車載無線に向かって指示を出した。

「クーガー2号車。前方のビル4階の避難者が確認出来るか？確認出来次第、車両にてビルまで接近して救出活動を開始！

くれぐれも言つとくが、ゾンビおよび感染者は『頭部』を破壊するんだ！動きは遅いがかなりの腕力だとの報告だ。出きるだけ距離を置くことを心がけるんだ。

尚、確保した避難者については、必ず、噛まれていないかを入念にチェックすること！チェックを拒む物には武力行使も許可する。

クーガー1号車も同行し、避難者の救出後の退路確保ために建物の入り口および周辺に散開し警戒態勢！

73トラック1号は、避難者の搭乗が出きるように待機。ライトアーマー2号車は、73トラックの警護位置につけ！

我々は、この位置を臨時のベースにする。クーガー3号車は車載銃器で後方確認。残りは360度展開で警戒。

ベース警戒の指揮は徳川曹長が実施。」

そこに無線が割り込んできた。

「小隊長！衛生班の責任者の山本（准尉）です。避難者に女性がいる場合の身体検査でトラブルが生じると厄介なんで、当方から女性隊員の木村3曹を突入班に合流させたいのですが許可をいただけますか？」

「突入はかなり危険を伴うが大丈夫か？」

「はい、衛生班所属ですが、9師では師団内でのレンジャー試験合格者です。戦闘能力は保証します。本人の立候補です。」

「了解！木村3曹の同行を許可する。クーガー2号、金本（3曹）木村3曹をピックアップ頼んだぞ。」

「衛生班、山本曹長。緊急時なので、衛生班の方からも車両運転者以外は散開警戒のバックアップの協力をお願いする。徳川曹長の指示で展開させてくれ。」

「了解！9師の衛生隊は一味違うところをお見せしますよ！」

クーガー2号が救出者の待つビルの入り口に到着し建物内に兵員が姿を消すところには、残る車両はベース周りの360度の方向が確認できる位置に散開し、その周囲で89式自動小銃を持つ自衛官が目をギラつかせながら周囲を睨んでいた。

クーガー2号車

「よし！全員装備を確認し、初弾を装填、安全装置を解除！89はバーストにしておけ。4人1組で行動。永倉、沖田、芹沢、斎藤が頭を取れ！ショットガンと89でバディを組み、近接はショットガンが対応するんだ。永倉達の次は、俺（金本）と新井、原田。しんがりは土方、伊東、藤堂。藤堂！木村衛生兵の世話を任せたぞ。」

金本班長の指示に対して全員が雄たけびのような返事を残し、クーガーの後部ハッチから飛び出していった。

小さな4階建ての雑居ビルであったが、通路は整理され灯りもしっかり点灯していた。

「前方に、ゾンビ2体！こちらに気づいた様子で、向かってきます。」

「

永倉が、携行無線のオープンチャンネルに小さな声で囁いた。

「かまわん！どうせ何時かは発砲するんだ。排除しろ！」

金本の指示が聞こえるや否や、20メートル先のゾンビに対して、

永倉が89式小銃を構え、撃ち始めた。

タン！タン！タン！　タン！タン！タン！と小気味良いリズムから発射された5・56ミリ弾は2体のゾンビの上半身に吸い込まれていき、1体の頭を破壊し、もう1体の首筋に飛び込み首の半分を吹き飛ばした。

「ビンゴ！永倉！ナイスショットだぜ！」

バディの沖田が冷やかしながら進んでいると、いきなり開いていた扉からゾンビが飛び出し、撃ったばかりの永倉に掴みかかった。

「離せ！この野郎！」

永倉は飛び掛られたゾンビに噛み付かれないように、咄嗟に89式小銃をでゾンビの口元を防いでいた。

「クソッ！なんて力なんだ！沖田！何とかしてくれよ！」

飛び掛られた勢いで、通路に倒れ込みながらも必死で抵抗している永倉に対して、沖田は素早く近づき

「永倉！何とかゾンビの頭をもちあげるんだ！」

永倉は沖田の指示に何とか反応し、渾身の力でゾンビの頭を持ち上げたところ、そのゾンビの頭の横に、沖田のサバイバルナイフが刺しこまれた。

大量のゾンビの血を浴びながら、ゾンビの死体から抜け出た永倉は、沖田に掴みかかり

「お前なあゝ。血液感染するかもしれないじゃねかよ！もっとスマートに出来ないのかよ！」

「わりい！わりい！」

おどけている沖田の背後から、いきなりゾンビの2本の腕が伸び永倉の頭が掴まれた。沖田を真ん中に挟みサンドイッチ状況である。室内にはまだ他のゾンビがいたようだ。

勢いよく手を伸ばしすぎたゾンビは、ちょうど、沖田に頬を擦り付けるような状況で永倉の頭を掴んでいた。永倉から見れば目の前に沖田と白濁した目を剥きながら必死に噛み付こうとしているゾンビ顔が並んでいる状態だ。

沖田は抵抗しようにも、下手に動けば噛まれる可能性があり、頭を捕まれた永倉はその信じられない握力で捕まれていて、身動きが取

れないでいた。

「どうすりゃいいんだよ！」

困り果てた沖田が怒鳴った時ドスンと衝撃を感じ、2人と1体は、通路を転がることになった。部屋の奥から他のゾンビが沖田、永倉めがけて突進してきたのであった。

パン！パン！と2発の銃声が響き、運良く、転がったことによりゾンビから開放された2人は、後方に控えていた斉藤に助けられた。

「何、ゾンビとダンスやってんだよ！」

銃口から微かな白煙を出しているP226自動拳銃を構えた斉藤は、2人に声をかけるながら、ゾンビが出てきた室内を覗き込んでいた。

「芹沢！まだ3体もいやがるぞ！」

「よっしやあ！」

ズガン！ シュコン！ ズガン！ シュコン！ズガン！ シュコン！
ユコン！

と芹沢は室内に飛び込みながら、ショットガンを立て続け3発発射し室内のゾンビを穴だらけにして出てきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ジト目で、永倉と沖田を見つめながら芹沢は

「ダンスペアさん達。先を急ごうぜ！」

1階はこれ以外の脅威は無く、金本班は2階へそして3階へ上がっていった。4階に上がる階段に近づいたところで芹沢が止まれのハンドシグナルを出した。

「班長。階段の踊り場にウヨウヨいるのが影で見えます。10体近くいてるような感じです。俺と沖田がショットガンで飛び込みますんで、第2派で新井と伊東を突入させてもらえますか？」

小声で7メートル後ろの金本班長に相談したところ、直ぐにOKの返事と、新井と伊東が近寄ってきた。

「1・2の3で行くからな」

芹沢と沖田がタイミングを計って階段の踊り場に飛び出した。

「！」

「！」

そこで、芹沢と沖田が目にしたものは、踊り場だけでなく4階へと続く階段を埋め尽くしたゾンビ達であった。

「ヤバイ！」

芹沢は叫びながら、一番近くにいた手をこちらに伸ばし始めたゾンビに向かってショットガンを撃ち始めた。

「班長！数が・・・数が多すぎます！」

しかし、芹沢の声は2人が矢継ぎ早に撃つショットガンの炸裂音で金本の耳には届いていなかった。

冷静に発射された弾丸数を数えていた新井は、14発が発射されたところで通路の角から芹沢達の援護のために飛びこんだ。

そこには、ゾンビ・ゾンビ・ゾンビ・・・14発の散弾を浴びせたにも係らず、既に芹沢がゾンビに掴みかかられ、沖田は空になったショットガンの引き金を必死に弾いていた。

呆然としていた新井の腕を伊東が引っ張りながら、通路角に引き下がった時、前方のゾンビの群れの中から、もの凄い絶叫が聞こえた。

「芹沢ああ！沖田ああ！」

新井が2人の名前を叫んだが、返事は返ってこなかった。

「班長！ゾンビの大群です。後退して体制を整えて下さい。新井！ここで下がりがら5発分だけぶっ放すぞ！」

その時には、既に数体のゾンビが通路角を曲がってきていたと思うと、次から次へとゾンビが通路に溢れ出てきた。

通路一杯になったゾンビに対して、新井と伊東はショットガンを撃ちながら後退していたが、あまりの数に全弾を撃ちつくしてしまい、ゾンビに背を向けて敗走を始めた。

20メートル程後退していた金本達は、89式小銃を持つ、金本、

永倉、土方、原田の4名が新井と伊東が射線から外れたところで一斉にフルオート射撃を開始した。しかし。フルオートでは狙いが定まらずに、なかなか頭を撃ちぬくことができず、ジリジリと後退を余儀なくされた。

「藤堂さん。MINIMI貸して下さい。」

啞然とする藤堂をしっかりとつけるように、木村が藤堂の手元からMINIMI軽機関銃を奪い取りながら、金本も横の位置についた。

「班長！足元！膝辺りを中心に狙って下さい！動けなくすればいいんです！」

木村は、おもむろにMINIMI軽機関銃をゾンビの群れに対して腰だめで撃ちだした。毎分750発を発射出来る能力を持つMINIMIは機関部下に装着されたプラスチック製の弾倉M27に装填されているベルトリンクの5.56ミリ弾200発をリズムカルにそして狙いよくゾンビの群れにみまっていた。

それを見た、金本、永倉、土方、原田も同じ様にゾンビの下半身に銃弾を集中して発砲し始めた。同じく、新井や伊東のショットガンも火を噴いていた。

M27弾倉2個分と89式小銃の通常弾倉（30発）8箱分 計640発の銃弾の嵐を愛せることによって、群れと化したゾンビを何とか撃退することに成功した。

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

全員が大きく肩で息をしていた。

「何とか、片付いたのか？」

金本班長はつぶやきながら、床一杯に転がっているゾンビを見渡した。そこには、死んではいないが、立ち上がることが出来ずに通路に這いつくばりながらも、こちらに向かってズリズリと近づこうとしているゾンビが何十体もいた。

下半身をズタズタにされたゾンビ、下腹部から内臓を引きずっているゾンビ……。いずれのゾンビも、自分達の姿や状態などには一切の興味はなく、ただただ、目前にいる『人』である金本達を食べようと一心不乱に匍匐前進を行っていた。

「うおおおおおお・・・」

突然、永倉が叫び出して這い蹲るゾンビ達に向かった。蠢くゾンビの頭を蹴り、踏み潰し、まるで幼い子供が虫を踏み潰すように傍若無人に手当たり次第にゾンビにとどめを刺し始めた。

「沖田ああ、芹沢ああ・・・チクショウ！チクショウ！クソッ！クソッ！ぐがああああああ・・・」

「永倉さん！冷静になって下さい。」

伊東と斉藤が永倉を止めようと近寄った。

「永倉いい加減にしろよ」

斉藤が永倉の肩に手をかけてこちらに向かせようと力を込めた瞬間、永倉自信が振り返った。

「ながくら？・・・何故？」

振り向いた永倉の目は白濁していた。紛れもなくゾンビ化した証拠であった。ゾンビと化した永倉は目にも留まらない速さで、斉藤の首筋に噛り付き一瞬で深々と首の肉を食い干切った。

『お前なあゝ。血液感染するかもしれないじゃねかよ！もっとスマートに出来ないのかよ！』

薄れ行く意識の中で、斉藤は永倉が大量のゾンビの血を浴びていたことを思い出したながら1回目の死を迎えた。

「ええつつつ？」

いきなり、永倉が斉藤を襲ったことに対処が出来ずに、伊東は棒立ちになっていた。そこへ、斉藤を襲い終えた永倉が詰め寄った、伊東が何とか反応し床を向いていたショットガンの銃口を僅かに引き上げたが、時既に遅く永倉に掴みかかられていた。

「ぎゃあああああ！」

ゾンビ永倉はゾンビ化した常人に数倍の力で、伊東の顔を掴み目の中に深々とその両親指をめり込ませていた。伊東の頭は厚みが半分ほどに圧縮され、頭中の所々の血管から血を噴出しながら絶命した。

一瞬の内に、斉藤と伊東が殺害され、残された者達は何が起こったのか分からずに反応が遅れていた。

通常のゾンビとは思えぬ、そして普通の人間にも真似できない速さで永倉ゾンビは原田と土方の目前に走りよった。

「駄目だ！殺られる！」

瞬間に勝てないと判断し原田は、自分を犠牲にして他のメンバーを助けようとする行動に出た。現れた永倉ゾンビに自ら飛びつくように突進したのである。

しかし、原田の突進を軽々と正面で受けた永倉ゾンビは片手で原田の首を掴み高々と持ち上げ、原田のわき腹を喰いちぎり、ボロ雑巾のように投げ捨てた。

原田が自分を犠牲にして稼いだ5秒程度は、金本と木村に行動を開始する時間を与えてくれた。
2人は、89式小銃の銃口を向けながら後ずさりし距離をとり始めた。

新井と土方、藤堂はその場で銃口を永倉に向け、一斉に襲撃を開始した。

永倉は、掴んでいた原田を新井に向かって投げつけあつという間に藤堂と土方の射線から姿を消した。

「何処に行った？」

目標を失った土方と藤堂は周りを見回そうとした時

「いだああああああ。離せ！ぎゃああああああ」

新井の絶叫が響いた。投げつけられた原田に吹き飛ばされた新井は、あるうことか這いつくばるゾンビの群れの中に倒れ込んでしまったのである。新井は無数のゾンビの歯牙を身体中に受けていた。

「右だ！」

土方の鋭い怒声に、右に銃口を向けた藤堂の真正面に永倉が対峙していた。姿を認めた瞬間に藤堂のMINIMI軽機関銃が火を噴いた。数発の5・56ミリが永倉を捕らえたが、そのことに臆することなく永倉は目にもとまらぬ速さで左右にステップを踏み藤堂に迫っていた。

「クッ！アレがブリーフィングで学者が言ってた1／2%の例外ゾンビか？よりによって永倉が！……」

土方は、藤堂に迫る永倉に対して側面から89式小銃を発砲したが、どうしても藤堂に当たることを躊躇して中途半端な狙いしか付けられなかった。

「ガッ！」

MINIMIを盾に善戦していた藤堂は、とうとう永倉の右斜め上空から繰り出されるブローに捕まってしまった。殴り飛ばされた藤堂は数メートル先の壁に叩きつけられた。殴られた顔の右半分は熊か何かに襲われた後のように、ざっくりと肉どころか骨の一部までもそぎ落とされていた。永倉は、拳でのブローではなく、平手の状態で指を鉤状にしていたのだ。

タン！タン！タン！　タン！タン！タン！　タン！タン！タン！

土方を襲おうとした永倉に対して、少し後方に下がっていた金本と木村が銃撃を開始し始めた。

「土方！こつちだ！」

金本が土方を呼び寄せる間にも、木村は89式小銃の狙いを永倉に合わせながら必死に引き金を引いていた。

「マジ〜〜？すつごく早いんですけど！」

ぼやきながらも、木村はギリギリのところまで永倉の動きに銃口を合わせてバースト射撃（3点射）の内、常に1発は永倉の身体にヒットさせていた。彼女は元女子ソフトボールの日本代表選手であり、類まれない動体視力を持ち合わせていたのだ。

その木村の視線の端に土方の姿が映った。

何とか3人で弾幕を張れば・・・と木村は考えながらも、もう片方の眼で必死に永倉の動きを追いつづけていた。

走り込んでいた土方が突然に立ち止まった。

「何やってんだよ！」

金本は永倉を追視することは出来なかったが、木村の銃口が向けられた方向に合わせて銃口を向けて、木村が撃つと同時に山勘で左右どちらに狙いを絞って銃弾を注ぎ込んでいた。

金本は土方へ視線を向けたために、本来狙っていない位置に銃弾をばら撒いてしまったが、そこに偶然、木村の射線を嫌って永倉が横つとびに飛び込んできた。3発の5・56ミリが永倉の首周りに着弾し、バランスを崩した永倉は激しい勢いで壁に叩きつけられていた。

そこに、すかさず木村が弾倉に残っていた残弾全て永倉の頭部に向

かった撃ち込み、永倉は2度目の死を迎えた。

安堵の気持ちを押し殺して、訓練通りにマガジン交換をした木村は、土方の顔が大きく歪み、身体の奥から何かが飛び出そうとするかのように大きく隆起し鳩尾に気づいた。

メリメリツと音が聞こえそうに、その鳩尾から人間の手が生え出して来た。いや、正確には生え出したのではなく土方の背後にいた人物が土方の背中から腕を差し込んで鳩尾辺りを突き破ったのだ。

背後には、先ほど永倉に首を噛み千切られた斉藤が己が右腕に土方を突き刺しながら不敵な笑みを漏らし

「GYOΔGU DOS Ω」

何か訳の分からない咆哮を上げて土方の骸を高々と差し上げた。

「馬鹿にするんじゃないわよ！」

木村は、土方を持ち上げている斉藤と土方に向かって89式小銃の引き金を5回引いた。15発の5.56ミリは斉藤を土方の頭部を完全に破壊した。

「危ない！」

撃ち終えた木村に、金本が横から飛びつくようにぶつかってきた。後方に投げ出されるように通路を転がる2人が立っていた場所には、原田と近藤が立っていた。

「今度は、原田と藤堂かよ！てか、例外ゾンビに殺られると例外ゾ

ンビになるのか？」

驚愕なのかボヤキなのか分からない言葉を発しながら立ち上がった金本は、89式小銃を腰だめにしてフルオートで迫り来る2人に向かって撃ちだした。

「ベース！ベース！応援を寄越してくれ！木村、今の内に逃げるんだ。早く逃げるんだ！」

金本の乱射は数発の銃弾を2人にヒットさせたが、2人は怯むことなく金本に向かって突進してきた。弾倉が空になった89式小銃を放り出した金本は、右手でP226自動拳銃を引き抜き迫る2人に発砲しながら、左手に2個のM26破片手榴弾を握り口を使い安全ピンを抜き更には安全レバーも外した。撃ち尽くしたP226を迫り来る2人に投げつけ、両手に握りなおしたM26破片手榴弾を握り締めて、原田、藤堂の2人に向かって走り出しランニングネックブリーカーの要領で2人の首に両手を巻きつけるような形で飛びついた。飛びついた瞬間にM26破片手榴弾が爆発し、金本、原田、藤堂の頭が吹き飛んだ。

「金本……はんちよう……」

金本の捨て身の攻撃で高速型ゾンビは葬ることが出来た。

木村は流していた涙を袖口でグツと拭き去り、顔をつぶされた伊東、ゾンビに全身を食い尽くされた新井、そして、通路の這いつくばるゾンビに次々と5・56ミリを撃ち込んでいった。

数分後……

「何だ！何があつたんだ？」

待機していたクーガー1号車の隊員の4名が応援に駆けつけた。

3階の通路の惨劇を眼にした、1号機の隊員の内の1名が思わず通路の隅で胃の中を空っぽにする作業を開始していた。

「例外が・・・例外ゾンビが現れました。早く4階の避難者を助け出して退散しましょう。」

気丈に4階を目指す木村に、応援に駆けつけた4名のうち3名がバツクアップ体制で続いた。

30分後

無事に9名の避難者を保護した一行は、ホテル、旅館街に向かって進んでいた。

クーガー2号車の中で、織田と徳川、山本が建物内で起こったことの報告を受けていた。

「曹長。例外ゾンビについての能力をオープンチャンネルで連絡してくれませんか。木村3曹。大変な目にあわせて申し訳なかった。少しでも休憩を取ってくれ。」

木村の上官の山本曹長に目配せをしながら織田はこの先の長い道のりは一体どうなるんだろうと遠い目をしていた。

番外編 極楽温泉 救出部隊―1（後書き）

今回は、かなり厳しい状況で執筆しました。
実は今も新幹線で移動中の執筆の投稿です。

是非！是時！ご感想とご意見 ドシドシ お願いします。

番外編 極楽温泉（前書き）

この度の東北の大震災でなくなりになれた方々にご冥福をお祈りいたします。

また、震災に会われて、不自由な避難所生活を余儀なくされている被災者の方々の一刻も早い復興をお祈りいたします。

このような震災の中、フィクションである物語といえども、人の生き死にを面白おかしく発表することには、激しい葛藤がございました。

そんな自分勝手なことをと、1週間以上悩みましたが、この数日のアクセス数やお気に入り数の伸びを鑑み、こんな状況でも、楽しみにしていただいている読者の方々がいらっしゃるということが自分を後押ししてくれました。

不謹慎かも知れませんが、執筆と更新を継続していくことにしました。

ご批判などありでしょうが、お楽しみいただけると信じていると思っています。

2011年3月25日 0時40分。 てつまる

番外編 極楽温泉

極楽温泉 旅館

腰を太い綱で結ばれた、3人の猟師と2人のクレー射撃経験者は青ざめた表情のままで。ワゴン車の天井に立ち尽くしていた。

「一体全体、何匹いるんだよ？てか、市原のじっさまよ。握り飯つとる場合じゃないだろ？」

鈴木（従業員）が言った。

「最後の飯かも知れんぞ。お前らも食つとけ。奴らは鈍いから、後10分かそこらは大丈夫じゃろう。」

「ねえ？ねえ？」

いきなり2階からかわいらしい女性の声が聞こえた。彼らの真上の2階のバルコニーから、近藤由紀が幼い顔を突き出していた。

「なんじゃい？お嬢ちゃん？ここは危ないから宴会場に非難して置くように聞いておらんのか？」

市原がその勢いのままに旅館関係者を大声で呼ぼうとした瞬間に、2階の少女がガンケースを引っ張り出した。

「??????」

ガンケースの意味が分からない市原に対して

「これって、誰も使わないんですか？この距離だとこっちの方がベストじゃないんですか？」

由紀がガンケースを指差していた。

「雅坊！アレには何が入ってるんじゃない？」

怒鳴られた雅坊こと中山雅紀が

「ボルトアクションの銃ッス。豊和のM1500とか言うライフルで、あれも自衛隊への納入品で……でも、じっさまはライフル嫌いだから……」

市原がライフル嫌いになった理由を知っている中山はそれ以上の言葉を発しなかった。

「ねえ！ねえ！使わないんだったら。私が使ってもいいですか？」

いきなりの提案に市原を除く全員が一斉に吹き出してしまった。

「嬢ちゃん、テレビゲームじゃないんだから。それに、その銃は7.62ミリって言う反動の強い弾を使ってるんだよ。女性のか弱い肩では受けきれないよ（衝撃が）」

もう片方の若い猟師の高山 武が笑いながら応えた。

「大丈夫ですよ！去年、ウエザビーのマグナムをハワイまで撃ちに行きましたから、1日で400は撃ちましたし、狙撃練習もしたん

で・・・てか、既にセットして予備弾倉にも装填しちゃってるんですけど？」

「な・なんで・・・嬢ちゃんみたいな若い娘さんが、ハワイにライフルを撃ちにいったんじゃ？自信はあるのかえ？」

「えっ・・・と。親父がゾンビフリークで。いつかゾンビが現れた際に狙撃が出来るほうが助かるって・・・今はまだお母さんが反対してるけど、将来はライフルも入手するって言ってます。信じてなんか・・・なかったんですけど。アレだけの数だし、少しでも手助けになればと・・・」

由紀の目をまっすぐに見つめたまま市原が

「おかしい話したが、現実にはそのおかしい事が起きとるんじゃない！好きにすればいい。どうせここの者には扱えん代物じゃて。ただし、最後に・・・残り2弾倉になったら、宴会場に逃げるんじゃないぞ？約束できるか？」

「了解！です。弾倉（1弾倉5発）は14個しかないんですけど、弾はまだ100以上あるんで、支配人さんが空になったら装填してくれるって言うてるんで・・・4つは逃げるようにしますね。じゃ！」

まるで、遊びにでも行くような感じで手を振りながら少女はバルコニーから引っ込んだ。

1分もしない間に、重厚な銃声が鳴り響いた。

「当たったよ！由紀ちゃん！」

隣で、双眼鏡を覗いていた支配人は上ずった喚起の声を上げた。

「流石！自衛隊への納入品だけあるわ。スコープの狂いもないです。」

「

支配人に応えながら、銃についているレバーを上へ上げ、引き抜くように引っ張りながら空薬莖を排出し、逆の動作で次弾を薬室に入れないながら、由紀はスコープを覗いた。

息を吸って吐いて吸って吐いて、そして次に吸ったまま呼吸を止めて慎重に人差し指に力を入れて絞るように引き金を引いた。

ダアアアーーーーン

スコープの向こうに見えるゾンビの頭がスイカの様に赤い色をぶちまけながら吹き飛んだ。

スイカや標的じゃないってのは……嫌な感じ！でも、誰かがやらないと！全員、食べられちゃうもんね。しばらく、お肉は食べれそうにはないわ。お父さんったら、こんな時にいないんだから！お母さんもお姉ちゃんも震えてばっかで、全然役に立たないんだからね！

ブツブツと言いながらも、ほぼ90%以上の確立で、ゾンビに2度目の死を与える続ける、トンデモナイ女子高生であった。

銃声の都度に、ゾンビの頭が弾け飛び、数が減る様を見ながら、ワゴン車の屋根にいる5人は勇気付けられていった。

「スゲエ！」

鈴木は、ただ呆然を見ているだけであつた。

「おい！全員。気を引き締めろ！もう3分か4分で、こつちの射程距離に入るぞ！鈴木！倉田！お前らは無理をせんと、自信のある距離まで引き付けるんじやぞ！」

雅坊と武は、多少の無理でもぶつ放せ！遠いのは上の嬢ちゃんに任せるんじや！用意じゃぞ！」

自衛隊／第3師団／第35普通科連隊／第3中隊／第2小隊

クーガー2号車の1分隊が壊滅してことは、一部の兵士に緊張と使命感を、また一部の兵士には絶望感を与えていた。その時、先頭のライトアーマー1号車より入電が入った。

「この近くのはずなんですが……あつ！銃声が聞こえています。隊長少し飛ばして先行します！」

ライトアーマーが、急加速していった。

「全車両に告ぐ！目標に接近！全員、先頭準備！戦闘準備！アンビとトラックは後方に退却！ライトアーマー2号車は、アンビとトラックの警護。」

クーガー1、2、3は突っ込むぞ！車載銃器準備！」

「^{ライトアーマー}RA1。旅館発見！凄惨な数のゾンビです！車載のMINIMIで叩きます。出来るだけ早く来てください！撃て！撃て！……」

無線機からは激しい銃撃音が炸裂した。

「急げ！急げ！R Aじゃ、取り囲まれると厄介だぞ！」

クーガー全車は全速力で加速した。

「なんじゃ？こりゃ？どんだけいてるねん？」

栗原（クーガー3号車運転手）は、運転窓から見える範囲全てにウジャウジャというゾンビを見て鳥肌が立った。

「全員、クーガーの上にながれ！何でもいいから！撃つんだ！運転手！無茶な動きは厳禁だぞ！車載手！M I N I M I は前方の45度だけでいい！残りは我々でやるんだ！クーガー2！お前達はR A 1の近くまで行って、R Aに纏わりついているのを何とかしろ！あのままでは、いずれ引っくり返されるぞ！」

「クーガー2！了解！」

クーガー1と3は、決して止まらず、僅かずつでも動きながら、車の周りにいるゾンビに銃撃を浴びせ続けた。

クーガー2が、R A 1と接触ギリギリまで近寄り、クーガーとR Aでゾンビをつぶすように挟みこんだ。

取り巻くゾンビの群れが少なくなつてところで、R Aは少しポジションを下げて後方から援護射撃を行っていた。

旅館前ワゴン車

「よっしゃ！撃て！」

市原の掛け声とともに、雅坊と武が発砲を始めた。

「うっしゃ！流石は！軍隊用！調子いいぜ！」

中山は、ポンプを引いては撃ち、引いては撃ちを繰り返し、弾がなくなれば銃を引っくり返して弾を装填して、また撃ちだした。

しかし、どんどんゾンビは旅館に近づき、僅か数分の間に、鈴木や倉本も銃撃に参加し始めていた。

「どれだけ！いてるんだよ！」

撃ち終えた銃に装填しようとした鈴木は、ワゴン車に体当たりしてきたゾンビのショックでワゴン車の屋根から滑り落ちてしまった。

「わあああつあ！た、助けて！」

バタバタと騒ぐ鈴木を倉本が綱を引っ張りながら

「綱があるから落ちねえよ！つたく！注意しろよ！」

「じいっ様！もう限界じゃねえ？」

撃ちながら武が大声で怒鳴った！

「まだ！弾はあるじゃろ！撃つんじゃ！つべこべ言っな！」

それから、全員はただ機械のように近づくゾンビに対して撃って撃って打ちまくっていた。あまりにも多いゾンビを撃つことに専念しすぎ、自衛隊が近づいていることすら気づいていなかった。

「じつ様！最後だ！」

雅坊が最後の100発入りの箱を持ち上げた時に、数体のゾンビの体当たりで今まで以上に車が揺れてしまい、雅坊の手から箱が落ちてしまった。

「あっ！」

既に、箱はゾンビが闊歩する地面に落ちてしまっていた。

「雅！武！箱の周りのゾンビを集中して撃て！」

命令の意味も分からずに、雅と武と市原は箱の落ちた辺りのゾンビに銃弾をばら撒いた。

箱が見える段になり、市原がいきなり腰につけている綱を鉋で切り落とし、ワゴン屋根から飛び降りた。

飛び降りるや否や、周辺のゾンビがわれ先に襲い掛かってくる。そのゾンビに果敢に鉋で挑みながら、市原は地面に落ちた箱を掴み、雅に投げつけた

「その弾が半分になったところで引くんじゃぞ！」

言った途端に、迫り来るゾンビに向かって一身腐乱に鉋で切りつけていった。その勇猛な攻撃は数分に及び、市原の周囲10メートルのゾンビは全員絶滅していた。勿論、市原自体も数々の傷を負っていた。

2
階
由
紀

「支配人さん！自衛隊！自衛隊が来ました！もう少しもう少し頑張れば！」

「よし！下に伝えるよ！」

支配人はバルコニーから顔を出した。

「!!!!!!!!!!!!」

そこには、仁王立ちで鉈を振り回してゾンビと対決している、市原の姿があった。

「何がおこったんだ！」

バルコニーから怒鳴る支配人に向かって、右手に、弾の入った箱を持った雅が目を真つ赤にしながら

「俺が……俺が……どじっちまって……」

「綱！引け！引けえええええええ」

部屋の外に待機していた男の従業員達が一斉に、自分達が任されている綱を引っ張り始めた。

雅坊、武、鈴木、倉本の身体が宙に浮き、2階のバルコニーに引つ

張られていった。

「じ・じつさま〜」

中山の声が虚しく響くなか、市原の身体は少しずつゾンビの群れに飲み込まれていった。

引つ張られている中山を除く3人は、それぞれの散弾銃に装填されている銃弾の全てを不安定な状態にも係らず、市原に向けて撃ち出していた。

「せめて、じつさまを人のままで、送つたらなあかんぞー」

武が雄たけびを上げて連続で市原に散弾を浴びせ、市原の頭が吹き飛んだ。

「じつさま〜。俺が・・・俺が・・・」

バルコニーに引き上げられた後も、中山は自分のミスで市原を死なせたと号泣し続けた。

自衛隊

RA1号車

「班長！右方向！ゾンビが2体走ってます！」

ターンレットから半身を乗り出して車載銃器のMINIMIを構えている兵士が、報告をしながら、走るゾンビに向かって銃口を向け

射撃を開始した。

「早ええええ」

MINIMIの5・56ミリは全て、ゾンビが走り去った後に着弾していた。

「隊長！（織田。先ほどの救助の後にRA1号車よりクーガー2号に乗り換えていた。）こちら、RA1。クーガー3に向かって走るゾンビ2体高速で移動中！捉え切れません！」

「クーガー3。車上の者注意しろ！」

織田は無線に向かって叫びながら、車載カメラの向きを3号車に向けた。丁度、ゾンビが2体、クーガー3号車に飛び乗る瞬間であった。一瞬のうちにクーガー3号車の上部にいた隊員7名の内4名がゾンビに襲い掛かれた。

「誰か！クーガー3を援護しろ！」

織田が叫びながら、自らもクーガー2号車の上部に出ようとハッチに手をかけた瞬間に、ゾンビの1体の頭が吹き飛ばされた。

「誰が撃った！」

「わかりません！我々ではないです。ここからでは狙いが定まりません！」

徳川がクーガー2号車の上部からクーガー3号車に向かって狙いを定めようと必死になりながらも、携行無線に怒鳴るように返事をし

た。

「誰でもいい！襲われた隊員もすぐにランニングゾンビになるぞ！そちらにも注意しろ！」

旅館2階 由紀

スコープで自衛隊の隊員を覗いていた由紀の視界に、いきなりゾンビが現れて隊員を襲い始めた。思わず、引き金を引いてしまったが、運良く隊員の首の後ろの噛み付いたゾンビと隊員の頭を吹き飛ばすことに成功した。

「何？アレ？いきなり現れたじゃない。どうやって登ったの？」

ブツブツと疑問を言いながら、スコープを左右に振ったところで、もう1体のゾンビと隊員が揉み合っている姿を捉えた。

どうやら、ゾンビに噛まれてはおらず小銃を盾に何とか噛まれるのを阻止している様子だった。

「なむさん！」

ここで、由紀が撃たなければ、噛み付かれてゾンビになるのは明白である。一か八か由紀は引き金を引いた。ゾンビの顔半分が吹き飛んだが、揉み合っている隊員も銃弾の衝撃派で倒れこんでしまっていた。

由紀は素早く、戦車の様な乗り物の上部を隈なくスコープで見渡し

たが、他にゾンビはいてそうになかったが、上部に居てる全員がある方向に対して、小銃をフルオートで撃っている姿が見えた。

「何？何であんなに必死に撃ってるの？」

由紀がスコープをその方向に向けた一瞬、ゾンビの顔を捕捉したがアッという間にスコープから見えなくなった。

何度か、同じ状況が繰り返された後に、由紀の頭の中ではかなりの速さで動くゾンビが居てるのでは？と結論付けられていた。

「あんなの、この距離で撃てっこないじゃん！………スコープの倍率下げれば何とかなるかな？」

倍率を下げたことで、ゾンビの全身をスコープで捕捉することは出来たが、それでも恐ろしく早く、引き金を引こうとした瞬間には、そこにゾンビはいなかった。

「何？自衛隊が自衛隊を襲ってるの？なんで？………あつ！襲ってる方がゾンビ？血だらけだもんね！」

「！……！」

しかし、由紀は、ゾンビがある特定の方向に向かって狩りのごとく迫り・下がりしていることに気づいた。冷静に、ゾンビの動きを見定めて、由紀は3体のランニングゾンビの身体の一部に7・62ミリ弾を当てる事に成功した。

7・62ミリは、現在自衛隊員達が撃っている89式小銃の5・56ミリと違い、1発でゾンビの動きを止める威力があり、3体のゾンビは命中された肩や足や胸などに大きな傷を負い、地面に倒れるか、または大幅に動きが鈍くなっていた。

そこに、隊員達の5・56ミリ弾が雨、嵐の様に降り注いで、ランニングゾンビを葬ることに成功した。

流石は、ゾンビフリーク、近藤雄一の娘である。信じられない射撃センスは勿論だが、女子高校生をハワイに連れて行き、1日中ライフル射撃の練習をさせる親父とは・・・だから家族に嫌がられるのだろう。本人の悩みは自業自得であつた。

自衛隊

「何だか、分かんが。ランニングゾンビは葬ることが出来たみたいだ！

全員周辺は十分に注意しろ！

これだけのゾンビの数だ！後4〜5体は覚悟しないとイケないぞ。トラック！後方の幌から突入されない様に、簡単なバリケード代わりに荷物を積み上げるんだ！急げよ！」

「隊長！旅館の2階バルコニー奥に、狙撃手発見しました。彼女がランニングゾンビを殺してくれたみたいですな。」

徳川が双眼鏡でバルコニーの由紀を見つけて、手を振っていた。

「彼女だと？女性なのか？SATが来ているとの報告はないぞ？」

織田が、納得のいかない声で徳川に返答してきた。

「隊長、ここのゾンビを何とかしてからのお楽しみですが・・・かなり若い女性ですな。中学生か？高校生くらいでしょうか？」

「中学生？」

素っ頓狂な織田の声が、オールチャンネルで全隊員の耳に届いていた。

「よくわからんことばかりだが……とにかく！ゾンビ殲滅だ！」

その後、20分近くに渡り、MINIMIを中心に銃撃を続けた自衛隊は、旅館周辺にいる50体程のゾンビ以外を全て葬ることに成功した。

「隊長！旅館前の奴等は、ここからじゃ、流れ弾が旅館に届いてしまいます。かといって既に我々の車両のタイヤも血糊でズルズルですから、上手く横方向への展開が出来るか？怪しいです。」

徳川の報告を聞いた織田はしばし考え、無線でトラックを呼び出した。

「山本曹長！トラックのタイヤはどんな感じだ？滑りそうか？」

「山本です。先行するクーガーの後を付いて行ってるんで、まだ大丈夫です。何かお手伝いですか？」

「そちらには、ショットガンは搭載してるか？」

「M870とベネリが3丁ずつあります。」

「よし、申し訳ないが、先行して、ゾンビのギリギリのところで反

転して、ショットガンでゾンビの下半身を吹き飛ばしてくれるか？出来るだけ旅館には当てたくないんだ。正面玄関のワゴン車が爆発されても厄介だからな。」

「了解！お任せ下さい。」

衛生班の乗る73式トラック2台が慎重に前進して、ゾンビに向かってショットガンの散弾を嵐のように降り注いだ。

10分あまりで、旅館の前にいた50体余りのゾンビを駆逐した後、クーガー1号車から降り立った隊員達が、確実に1体1体にとどめを刺して行った。

その後に自衛隊車両は、ワゴン車に並ぶように駐車し、バルコニーを経由して銃弾や医薬品、食料を旅館に運びこみ、バルコニーにショットガンや狙撃銃を持つ3名の警戒班を残し全員が旅館内に立て籠もる準備を始めた。

「第3師団／第35普通科連隊／第3中隊／第2小隊　織田3尉です。」

支配人と握手しながら織田が自己紹介を行った。

「救助に来ましたと言えば格好もつくのでしょうか……現状から言えば、他に救助に赴いた各隊との連絡も途絶えていまして……。当面の指示としては24時間待機状態です。我々も旅館に籠城させていただきます。」

徳川が支配人と籠城場所などの相談を始めたところで、織田は、M1500を抱えている由紀の元に歩み寄り、正式な敬礼を行った。

「第3師団／第35普通科連隊／第3中隊／第2小隊 織田3尉です。」

先ほどはランニングゾンビに対しての狙撃援助ありがとうございました。おかげで被害を最小限に抑えることが出来ました。」

「い、いえ。あの・・・こちらこそ、助けに来ていただいております。ありがとうございます。私は、近藤由紀。高校1年生です。」

えええっと、これは、雅さんという猟師さんが、地元の銃砲店から自衛隊への納入物ですが、緊急という事で借りてきたそうです。無断で使って申し訳ありません。」

オズオズとM1500ライフルを差し出す由紀に対して、織田は、ライフルを受け取るうとはせずに

「この非常時です。使える方に持っていた方が我々も心強いですよ。しかし、何故、ライフル狙撃を？」

織田が不思議そうに訊ねているところに、由紀の母親が現れた。

「ゆきちゃん！何やってんのよ！何それ？・・・あつ！鉄砲ね！」

この時点で由美子は自衛官に気づいた様子で、いきなり、まくし立て始めた。

「無許可で鉄砲を撃ったかも知れませんが、緊急時だからお咎めはないですわよね？」

人助けですし、そもそもこの子は未成年ですものね！

そもそも、うちの主人がですね。

この主人なんですけど、本当はいやしないのに、アンデット？やらゾンビ？やらが大好きなんですのよ。

今日の旅行も置いてきたんで、このゾンビもきつと主人の呪いですね。

それで、海外旅行の都度に鉄砲を撃ちに行くんです。困ったものですわ。

それを、この娘たら2年前から鉄砲撃ちに付き合い始めちゃって、困ってるんです。危ないでしょ？

あら、兵隊さんに鉄砲が危ないなんて・・・釈迦に説法ですわね！ごめんなさいね。」

止まりそうにない勢いとゾンビマニアの父親が高校生にライフル射撃を教えていたという突拍子もない話に戸惑った織田は

「いえいえ、我々もお嬢さんに助けていただいた部分もありまして・・・その、よろしければ、当面はそのままお使いいただいてもと・・・」

「まあ、素人の未成年が・・・女の子が鉄砲を持ってウロウロしなさいっておっしゃるの？」

織田に、詰め寄る由美子を邪魔者を弾き飛ばすように由紀が割って入り

「了解です。このまま私が保管しておきます。でも、7.62ミリも残弾が20発もないんです。予備弾薬から分けてもらえますか？それに、これだと長距離がメインになるんで、出来ればハンドガンもお借りできると助かるんですが？」

「ハンドガンも使いこなせるんですか？」

織田は由紀の提案に驚きながらも質問した。

「お父さんの話したと、ハンドガンの方が筋がいいらしいです。ただし9ミリまでにしとけて言われてます。」

「分かりました。7・62ミリは狙撃班の予備から都合をつけさせましょう。ハンドガンについては、貴方の知識を確認させていただいてからにします。紹介する木村士長がOKすれば彼女から手配させます。

木村3曹！！こつちへ」

木村が人ごみを縫って近づいてきた。

「3曹。この娘さんが先ほどのランニングゾンビを狙撃してくれた方だ。まだ高校生だそうだが、M1500はそのまま使ってもらうことにした、狙撃班から7・62ミリを1000か2000ほど都合してくれ。

それと、本人は近接用にハンドガンを希望している。簡単な基礎知識を確認して、実際に操作してもらい、問題がないか確認してくれ。渡せるかの最終判断は君に一任する。以上。」

「了解！」

織田と木村は軽い敬礼をし、織田はそのまま籠城場所の確認に向かった。

「何？言ってるのよ。私が武装しているほうがお母さんやお姉ちゃんを守りやすいでしょ？生き残る確立の問題よ。」

木村が由紀の方に振り返った時には、母親対娘の対決が始まっていたが、自分や姉を守るという娘の意見を覆す方法が見つからず、由美子は渋々ながら了承した様子だった。

「宜しくね。私は木村3曹よ。では、こっちへ」

木村は由紀の手を引いて隣の部屋に向かった。

「さっきの狙撃は助かったわ。あのゾンビは普通のノロマのゾンビと違って、信じられないスピードと身体能力があるの……。貴方が狙撃してくれなかったら、後4〜5人は自衛隊から犠牲者が出ていたと思うわ。」

でも、何処で習ったの？高校にライフル部なんてあるのかしら？」

由紀は、またかよ！といった感じで父親のゾンビフリークの説明を始めた。

「ふーん。結構ナイスな父ちゃんじゃないの。お陰で、普通の女子高生の100万倍は生き残れるじゃない？いやいや、もしかしたら、普通の自衛官より生き残れる確立が高いかもね。」

木村は、由紀にSIG P226と実弾の入ったマガジンを手渡した。

「さあ、まずは撃てる状況にしてもらえるかな？」

由紀は、マガジンを銃把に装填し、P226の上部のスライドを引き、初弾を薬室に滑りこませ、安全装置をセットした。

「上出来！その銃の装弾数は分かる？」

「これって、自衛隊の官給品の220とは違いますよね？226ですか？なら15発だと思っんですが？」

「OK！それも正解。出発前の装備倉庫にテスト品として1箱（50丁）ほどあったらしいの、この小隊の曹長が目ざとく見つけて来てね。全員P226を装備してるのよ。15発は魅力でしょ？」

片目でウィンクをしながら、木村はハンドガン用のホルスターと予備マガジンプウチのついたベルトを由紀に渡した。

「予備は6本。でも、勝手に発砲はしないようにね！原則は、交戦指示があつてから撃つこと。いいわね？」

「了解です。 けど、こんなに簡単に渡してもかまわないんですか？」

「何、言ってるのよ。M1500をあれだけ上手に扱えるんだから、最初からOKのつもりで3尉は言ってたのよ！」

「7.62ミリは後で届けるわね？ベルト用のポウチ4つ程度とバックパックで全部入るかしら？」

「ありがとうございます。十分です。」

由紀はペコリとお辞儀をして、母親や姉が待つロビーに駆け行つた。その後ろ姿を眺めながら

「高校卒業したら、SATとかに取られる前にスカウトしなくちゃいけないわね。この騒動が片付けば、だけど……」

「木村3曹！」

携行無線から、織田の声が流れてきた。

「木村です。P226とスベアマガジンを渡しておきました。」

「ご苦労。2階のバルコニーに陣取って、街の方からチョロチョロをやってくるお客さんをうちのメンバーと共同で、叩いておいてくれないかな？山本曹長の話しだと、狙撃もなかなかのものだと聞いたが？」

「了解しました。病人や怪我人が殆どいらっしやらないんで、本来業務では役に立たないですから、ゾンビ駆除くらいには役立ちたいですわ」

89式小銃のマガジンの中身を確認しながらバルコニーに近づいた途端に、バルコニーで警戒態勢を敷いていた3名の隊員が騒ぎ出した。

「出たっ！出たぞーお！ランニングゾンビが5体も現れやがったぞ！右だ！右だ！右、右！」

木村はバルコニーに飛びつく様に近づき、警備が指差している方向を確認した。確かにランニングゾンビが走っていた。

「織田3尉！織田3尉。こちら木村。」

「何だ！上が騒がしい様子だが、何があったんだ。」

「ランニングゾンビが5体。約200メートル先に現れました。1階の窓で強化していないところと正面玄関にショットガン手を数名ずつ配置してください。」

「分かった！1階は手配する。由紀君を捕まえて上に上がってもらうように手配するから、しばらくの間持ちこたえてくれ。」

「織田さん……待って下さい。彼女は駄目です。」

今回ばかりは彼女じゃ荷が重そうです。小隊の狙撃手と1級射手を集めてください。それと山本曹長を捕まえて、郷田と池内にフル装備で越させるように指示してください。」

「彼女じゃ駄目な理由は何だ！情けない話したが、今の段階では彼女が一番だぞ！」

「分かりました。指示だけお出しになられたら、あがって来てください。ご自分の目でご確認いただければひとめで分かります。」

30秒もしないうちに織田が階段を駆け上がって来た。

「どうということなんだ！」

怒鳴る織田に対して、木村はランニングゾンビの走っている方向を指さした。

「な？……
間違はなくランニングゾンビなんだよな？」

啞然とした表情で織田はランニングゾンビから目が離せないでいた。

「全員、口の周りと、身体の正面が真っ赤な鮮血で染まっていますから……間違いはないと思いますが……」

織田の目にしたランニングゾンビは、どう見ても、小学生の高学年、5〜6年生程度の男女の児童ゾンビであった。

「あれは……人間の手だよな？」

目を凝らして織田が確認しようとした。

「ええ。さっきからあの手。正確には生前はかなりの凶暴な男性と思われる右手の取り合いでしょうか？私には遊んでいるように見えます。」

織田に、観測手用の双眼鏡を手渡しながら、木村は自分の目でみた事実を説明した

「なるほどな……あれだけの刺青なら、さぞかし名の通った親分さんなんだろうな」

双眼鏡で右手を確認した織田は、まだ信じられないという顔で木村や他の部下の顔を交互に見つめた。

「あれ……撃てるか？吉岡？」

「小隊長。あんなに無邪気？に遊んでるんですぜ。撃てっこないですよ。しかも、相手は子供ですぜ。」

「でも、ランニングゾンビだぞ！」

「でも、子供っす！」

織田以下3名で、どうするかと言い合いあいをしている時に、M1 500を担いだ由紀がバルコニー現れた。

「どうしたんですか？下で聞いたら激ヤバの走るゾンビが5体現れたって……」

黙って指差す、織田と木村の指先の方角を見た由紀は

「餓鬼？のゾンビですか！」

「ガ・ガキ？あれは子供って言うんだろっが！」

吉岡がワナワナと両手を震わしながら、由紀に詰め寄ってきた。

由紀は無言で、バックパックから1台のスマートフォンを取り出して、織田に差し出した。

そのスマートフォンには『ゾンビに遭遇した際の用意』と書かれたページが映し出されていた。

「4章＜火器編＞第1項 3条。

知り合いだろうが、自分の親だろうが子供だろうが、ゾンビになっちまえば、俺たちは餌だ。昼間ならビクマ。ク、朝ならソーセージエッグマフィ。見たいなもんさ。夜に出会ったら、食べ放題の焼肉だな！」

躊躇するな！哀れみを持つな！生き延びたいのなら、守るべき仲間がいるのならば、迷わず撃て！圧倒的な戦力があれば、粉碎してお

け。

って、その作者が書いてます。ちなみにその作者は中学3年生にラ
イフル射撃を仕込むゾンビフリーク。つまり、私のお父さんです。
今までのところは、その付録が役に立ってるんで、私は従います。」

説明しているうちに、由紀のM1500は射撃姿勢が整い、既にス
コープを覗きランニングゾンビに照準を合わせていた。

「木村さん！こいつら、さっきの走るゾンビより強力かもしれませ
んよ！目つきが違います。顔は無邪気に笑ってるように見えますが、
眼は獲物を狙う獰猛な眼です。」

もしかしたら、襲うのに知恵みたいな物があるのかもしれない。
こちらを油断させてるんじゃないでしょうか？」

あわてて木村も89小銃のスコープを覗きこみ、ランニングゾンビ
に焦点を合わせた瞬間に由紀の言葉を信用していた。

「3尉！由紀ちゃんの言うとおりです。ヤバそうです！マジに殺ら
ないとこっちが全滅するかもしれません」

その時、由紀、木村が焦点を合わせていた、幼いランニングゾンビ
が見られているのが分かってるかのように、スコープに向かって、
ゆっくりとニヤリと顔を歪めて笑った。

「クッ！」

由紀と木村は同時に引き金を引いたが、既にゾンビの姿はなく、一
房の髪の毛が舞っているだけであった。

「早い！どこ？」

由紀は素早くスコープの倍率を下げて視野を広く取るようにした。

「いた！」

と、気づいた瞬間に人差し指は引き金を引いていた。

スコープの向こうでは、幼い男子のランニングゾンビが頭から血や脳漿をぶちまけながら、身体をクルクルツと回転させ地面に叩きつけられていた。

その銃声を合図としたかのように、瞬時に他の4名のランニングチャイルドゾンビはバラバラに散り、方々から高速で旅館に向かって走り出していた。

「来ました！警戒態勢！」

木村が叫びながら、バースト射撃を開始し始めた。

「クツ！早すぎて、当たらない！」

銃口を右に左に小刻みに動かしながら、バースト射撃で3発ずつの5・56ミリ弾を発射しているが、ランニングチャイルドゾンビはまるで弾丸が見えているかのように瞬時のところで方向転換をして弾丸を避けていた。

バルコニーで警戒していた隊員達に、必死な二人に巻き込まれるように、ランニングゾンビに発砲を開始し始めていた。

「総員！戦闘配置！戦闘配置！徳川は自分の班を連れて、宴会に宿泊客と従業員を誘導！立て籠もれ！入り口を地元の猟師たちと固めるんだ！

1階の窓および正面玄関警護！突き破ってくる動く物があれば容赦なく発砲するんだ。

山本3曹！2階からの階段下で防御陣形を！」

「了解！」

「了解！」

そこに、郷田と池内の2名の木村の同僚が慌しく到着した。

「どうしたんだ？」

と叫ぶ郷田に対して

「走る奴です！簡単には当たりません！」

マガジンを交換しながら木村が怒鳴り返した。

「3尉、ここは、我々で面倒見ます。1階をお願いします！」

池内の提案に対して

「よし！任せた。吉岡は残れ！他の2名はついて来い！部屋の外に出るんだ！階段前で警戒態勢を取るぞ！任せたぞ！」

織田は2名を引き連れて部屋から出て行った。

「由紀ちゃんも下がって！この距離じゃ、ライフルは意味がないわ！早く！」

単発でしか射撃が出来ないライフルでは、近づいてくるランニングゾンビを迎えうつことが出来ない。

「お願いしま〜す！」

由紀は、山本の指示通りにM1500を担ぐようにして部屋から駆け出していった。

激しい銃声を響かせながら、郷田は他の隊員が置いていったMINIMI軽機関銃をランニングゾンビに向かって撃ちこんでいた。

「当てなくてもかまわん！スピードを殺せ！」

カチツと音が鳴り、MINIMIのベルト弾帯で供給されていた5・56ミリ弾がなくなった。

「池内！」

郷田は、新たな弾帯をMINIMIに装填させるために池内にMINIMIを手渡し、池内は給弾の作業を始めた。

郷田は自分の89式小銃を構えて、ランニングゾンビに向かって発砲を続けた。

「全然！あたらねえ。あたらねえぞ！どんどん近づいてきやがる！」

吉岡が、銃口を右に左に振り回しながら怒鳴り散らしていた。もと

もと、相手が子供の姿をしているうえに、吉岡自体の射撃能力が低いことも相まって、彼が受け持つ範囲を走り回っているランニングゾンビが一番早く旅館前に達していた。

「どこに行った？」

怒鳴る吉岡に反応して、池内が給弾の済んだMINIMIを床に置き、自分のベネリショットガンを構えていた。

吉岡が見失ったゾンビは、急加速し、一直線にワゴン車に向かって走り、ワゴン車を踏み台にして一気にバルコニーに飛び込んだ。きた。両手を目一杯に広げ指は僅かに鉤状にし、触れた物を引っかくような体勢であった。

その左手鉤は吉岡の左顔半分をこつそりと挟み取り、右手鉤は郷田の顔を狙ったが、郷田は咄嗟に89式小銃のストック（肩当）でかわしたが、飛び込まれた勢いのエネルギーを正面で受け止めることになり、派手にバルコニーの隅に転がってしまった。

飛び込んだ丁度真正面に位置していた池内は冷静に、飛び込んできたゾンビの顔面付近に対してショットガンを発射し、その凶暴な爆発力は一瞬にして子供ゾンビの顔を吹き飛ばしていた。

銃身の下にある、スライドを引きながら、空になったシエルを排出し次弾を装填した池内は、そのまま吉岡の頭も打ち抜いていた。

「来ます！」

木村の警告と同時に2体のランニングゾンビがバルコニーに飛び込んできた。

木村の真横に降り立ったゾンビに対して、89式小銃では間に合わない。咄嗟に小銃をゾンビに投げつけて、P226を引き抜きながら、我武者羅に引き金を引き続けた。P226から発射された9ミ

リパラベラム弾は、至近距離でゾンビの腰から大腿部に15発近くがめり込み、ゾンビの下半身をボロボロにしていた。

スライドが後退した時点で、弾切れに気づいた木村は、バックステップを踏みながら、腰のポウチからスペアマガジンを抜き出してP226にマガジンを叩き込むように装填し、スライドストッパーをリリースして、初弾を薬室に装填し、下半身がボロボロになりながらも動こうとしているゾンビの頭部に対して、4発の銃弾を叩き込んでいた。

飛び込んできたもう1体は、池内の真正面に飛び込んだ形となり、池内の放った散弾で身体を真つ二つに寸断されていた。しかし、ちぎれた上半身は池内に乗りかかる状態になり、池内はガチガチを葉を鳴らしながら、噛み付こうとしているゾンビを必死にショットガンを盾に防いでいる状態であった。

「クッ！なんて、力だよ！くそつたれメ！」

バルコニーの隅で転がっていた郷田が、何とか意識を取り戻し、頭を振りながら起き上がり、上半身だけのゾンビに組み付かれている池内を見つけ

「うおおおおおつ」

叫びながら、ゾンビの胸元を渾身の力で蹴り上げた。身長190、体重110キロの郷田の蹴りに、流石のゾンビも耐え切れず、池内のショットガンを掴んだままの状態で、1メートルほど吹き飛んだ。

足元まで吹き飛んできたゾンビに対して、木村はP226を構えて3発の銃弾をその頭に撃ち込んだ。

「あと1匹いてるはずです！」

木村が、落ちていた吉岡の89式小銃を拾い上げて、射撃姿勢のまま周囲に銃口を向けて、最後のゾンビを索敵し始めた。

「いない？何処？何処にいったの？」

必死に銃口を左右に振るが、銃口の向こうにランニングゾンビは発見できなかった。郷田と池内も見ることが出来ない様子であった。

「郷田です！ランニングゾンビ4体は殺害確認できましたが、1体ロスト（見失う）しました。各個、厳重注意して下さい。ワゴン車を踏み台にして、やすやすを2階のバルコニーに飛び乗ってくる身体能力です。我々はこのまま警戒にあたります。館内の2階以上で動く者には容赦なく発砲してください。」

「了解した。旅館の周辺監視カメラに何か映っていないか、支配人に確認してもらうので、しばらくバルコニーを任すぞ。今のところ外部からの進入路はそこだけのはずだからな。」

各個！よく聞いてくれ。ランニングゾンビの1体をロストしている。現状では2階からしか進入は出来ないはずだ。バルコニーの3名と2階からの昇降階段で警戒班を残して全員宴会場に入るんだ。警戒班、他の者が宴会場に撤収したら、動く者は何でもかまわんから撃て。躊躇するなよ！」

その後、監視カメラの映像から、ランニングゾンビの最後の1体は、誰かが乱射した数発の弾丸が足（大腿部）にあたった様子で、足を引きずりながら旅館から去っていった様子が映し出されていた。

「当面の脅威は去ったみたいだな。さて、2階のバルコニーをどうするかだな？ 位置的には迎え撃つのに最適だが……ランニングゾンビには格好の進入口になってしまふな。」

織田と徳川が籠城するにあたっての2階バルコニーの処遇を健闘していた。

「バルコニーから入った部屋に、FFV013（指向性対人地雷）＜一般的にはクレイモアというタイプが有名だが、自衛隊はスウェーデン製の類似品を使用している＞を設置しよう！」

「FFV013はリモコン操作だろ？ どうやって監視するんだ？」

織田は、徳川の提案を評価はしたがリモコン操作の場合、進入を感じ知すること、今回の場合は監視する方法がないことを懸念していた。

「小隊長、蛇の道は何とやらです。坂下が元工兵所属でして、以前に簡単にワイヤートラップ型に改造できると言っていましたので、緊急時でし、相手はゾンビですから、対人地雷禁止条約はこの際無視しても問題はないでしょ！ 2、3台設置すれば破られることはないでしょう。念のために通路側のドア前に簡単にバリケードも設置しましょう。」

「………それしか、ないみたいだな。よし許可する。改造には十分に注意させてください。それと、指向先は必ず、室内から室外の方向で設定してください。」

「了解！ ただちにかからせます。小隊長は少し休んでください。警戒備のパトロール順は山本曹長と相談しておきますから………」

「ありがとう。お言葉に甘えるよ」

重い腰を上げて、織田は宴会場の方向へと身体を引きずるように歩き始めた。

こうして、極楽温泉旅館には、織田以下第2小隊の生き残りと宿泊客、猟師、旅館従業員が籠城することになった。

番外編 極楽温泉（後書き）

次回からは、本編に戻ります。

物語の流れ上、ランニングチャイルドゾンビを登場させましたが、不愉快に感じられた方がおられましたら、この場をおかりして、陳謝いたします。

ご意見、ご感想、ご批判 宜しく願います。

第8歩 新たな展開（前書き）

ご無沙汰しています。

ゴタゴタがありまして、なかなか更新が出来ませんでした。

今回は、ちこつとちよいエロ気味になっています。

第8歩 新たなる展開

コンビニに到着した一行は、意識を失った中野巡査やG S G - 9のバンからの銃器などを部屋に運び込んで、束の間の休息を取っていた。

くるみは香と商品棚から真新しい下着を引っ張り出して、浴室に汚れた身体を洗い流しに行った。

さてと…まずは銃のクリーニングだな。

近藤は、手馴れた手つきでM P - 5を分解してクリーニングを始めた。

M P - 5はその高性能故にしっかりとしたメンテナンスを怠ると使い物にならないのだ。

M P - 5は何かとなったが、M P 7とP 4 6とG 3 6は初めてだかんな…

近藤は3丁の銃器のそこそこぶ厚い取扱説明書を開きながら、分解整備を始めた。

浴室

「何か…女の子同士でも、初対面の人とシャワーを浴びるのって…
…恥ずかしいですね。」

勢いよく下着を脱ぎ捨ててたくるみに対して、香はなかなか下着を外すことが出来ずにモジモジしていた。

「何？女の子同士で恥ずかしがっても仕方ないでしょ！早くシャワーを浴びて近藤さんにもかわったてあげなきゃだめでしょ！さっさと後ろ向いて！」

くるみは香を無理やり後ろに向かせて、ブラジャーのホックに手をかけた。

「く・くるみさんは巨乳だから…いいけど、私は貧乳だから…」

「ば、馬鹿なこと言ってんじゃないわよ！おっぱいの大きさなんて関係ないでしょ！」

「そ、そんなこと無いですよ！学校でだって…道場でだって、胸の大きい娘たちはチャホヤされてるもん！わ、私なんて…柔道馬鹿の干しぶどうちゃん！とか洗濯板の毛玉乳ちゃんとか…」

それに…生き残れたけど、くるみちゃんは可愛くて巨乳でしかも近藤さんの右腕みたいに信頼されてるし、優香ちゃん（中野巡査）は、凄い綺麗でやっぱり巨乳だし、くびれも凄いし…大人の女性だし、いざとなったら多分私なんか…一番最後に助けられる…って立場になるんですね、きつと。」

バチ…ンと小気味良いほどの音がして、香は右頬が真っ赤になるほどの力強く頬を打たれた。

「……………」

香は、叩かれたショックで、涙目になり、更に大粒の涙をボロボロと落としながら、ヒクヒクと泣き出した。

「こ・近藤さんはそんな人じゃないよ！まだ会って2日だけ…そんなくたらない人じゃないよ！」

昨日の夜だって、香ちゃんの言う可愛くて巨乳？しかも女子高生の私と同じベッドで寝てても…何にもなかったんだよ！

それどころか、助けて貰った時も恐怖でお漏らししちゃってたんだけ、さり気なく接してくれたんだよ。心配すぎだよ。」

「グスン、グスン…：それなら、近藤さんって…その…：女の人に興味が無い人なんじゃないですか？」

ならイケメン君を助けたら…私達はお役ご免になっちゃいますよね。

「

今度は…くるみが言葉に詰まってしまった。

「だって…こんな世紀末ですよ？女の私から見ても…スッゴい可愛い、ピチピチの巨乳女子高生。しかも真正銘のコギャル系コスプレ制服のくるみちゃんをほっとくなんて考えられないですか？」

そ、そう言えば…近藤さんて、私がベタベタするとさり気なく身体を離そうとするわ！

「で…でも結婚してるし、子供もいてるわよ！同じ学校の先輩だから間違いないよ！」

「でも…。世を騙す仮の姿かも知れないですよ。よく知らないけど…両方OKって人もいるってことも聞いたことがありますし…」

「ば、馬鹿なこと言ってないで…さっさと脱ぎなさい！とつとシヤワー浴びるからね…」

紆余曲折しながら、2人はシャワーを浴びて身体の汚れを落とすはじめた。

香の発言に軽いショックを受け、近藤のことを考えていたくるみは……上の空状態で黙々と身体を洗っていた。

女じゃなくて男が好き？あの近藤さんが？

結婚までしてるのもカモフラージュ？

私達よりイケメン君　が好き？

「きゃっ！」

いきなり、くるみは後ろから両胸を揉まれいた……

「ちょ、ちよつと……香ちゃん？

何してるのよ！辞めてよ。」

「凄いです！くるみさんのおっぱいって……大きいだけじゃなくて、形も綺麗だし……色合も白いし……お・女の私からみても……たまらないくらいですよ！」

私って、自分が胸がないから……大きい胸を触るのが大好きなんです！クラスの友達に嫌がりますけど……」

「か、香ちゃん。香ちゃんの方が……ヤバイよ。

も、もしかして香ちゃんってGLの気があるの？」

「私、おっぱいフェチなんです。でもGLじゃないです！」

て・てか……か・香ちゃん……その触り方はマズいって！
声がでちゃうじゃない！

アッ！駄目。駄目。マズい！マジで声が出そう！

くるみは、最後の気力を振り絞って、香を突き飛ばすように離し、ヤワーを冷水に切り替えてゼイゼイと僅かに火照りかけた身体を冷やすかのように浴びた。

同じように香にも冷水を浴びせて、努めて冷静を装い

「で・出るわよ」

不満そうにする香を後目に、くるみはさつさと浴室から上がり手早くタオルで身体を拭き始めた。追い掛けるように浴室を出た香は

「くるみさん。優香ちゃんがあんな状態だから…近藤さんのイケメン君好き疑惑を何とか確認しとくべきじゃないですか？」

「ど、どうやって確認するのよ！」

「簡単ですよ。まずはロリコンかの確認をしないとイケないでしょ？それは私が適任でしょ…胸もないし、毛も殆ど生えてきてないし…」

「そ、そんなの、裸になるか…しないと見せれないじゃない」

くるみは香のトンでもない発言にビックリしながら反論した。

「簡単ですよ！ブラジャーやパンティーを外したままで服をきて…胸は…シャツのボタンを出来るだけつけないで、屈んだら丸見え状態にして…」

下はお互いに短いスカートだし、何か物を取る振りをして四つん這いでお尻見せて動けば…

それと、もしかしたら大人じゃなきゃ駄目かも知れないから、優香

ちゃんが噛まれなにかの確認とか言って全部脱がしちゃいましょう。緊急事態だから、優香ちゃんもきつと分かってくれますよ。私は恥ずかしいけど…未来がかかっているかも知れないから、反対されてもやりますからね。

くるみちゃんも手伝って下さいよ。」

言いながら、香は用意していた下着をさっと取り浴室に投げ入れた。これで、くるみはびしょ濡れの新しい下着か洗剤まみれの洗濯途中の汚れた下着を履くか、何も履かないかの選択を迫られた。

くるみは仕方なく香の提案に乗るしかなかった。

用意をしたくるみは

「で？どうやって、近藤さんが、そうか・そうじゃないかを見極めつもりなの？」

「えっ？簡単じゃないですか！

おつきくなるか・ならないかですよ！

くるみちゃん高校生のくせに、そんなことも知らないんですか？」

「し、知ってるわよ。でも、男の人がそうなったら……我慢するのが大変なんだよ！

逆に火に油を注ぐことになりかねないじゃないのよ！

そうなったら、どうするのよ？」

しまったと言う顔で香は黙りこんでしまった。

しばらくの沈黙の後に、またもや香がとんでも無い解決策を持ち出した。

「私は…まだ経験がないから………相手をするのは無理。」

く、くるみちゃんは経験ないの？」

「な、無いわよ。手前までは経験あるけど……」

「て、手前つとどの辺りまでですか？つてか、そうなった男の人と一緒にだったんでしょ？なら、その時とおんなじにしたら……」

「ば、馬鹿言ってるんじゃないわよ。何ヶ月か付き合った彼氏なんだよ。いくら……近藤さんがいい人でも、それとこれは別だよ。

それに……香ちゃんの目の前じゃん！無理！ぜつつたいいにムリ！」

「えええっ！私達の未来がかかってるんですよ？」

またしばしの沈黙があり、二度有る事は三度有るなのか？三度目の正直なのか？

「あのおゝ。最初に優香ちゃんで行きますかあ？優香ちゃんなら25歳だし、経験はあるって言ってたし……」

「ハアアアア？香ちゃん？あんたは、近藤さんを強姦魔に仕立て上げるつもりなの？」

「で、でも……イケメン君を助けたら、私達は追い出されるかも知れないんですよ。追い出されたらどうやって生きていくんですか？ゾンビに食べられちゃうじゃないですか！

あっ！どうせ噛まれると痛いんだから、初めての痛さの方がマシなんじゃないですか？」

きつと、生きたままかみ殺されるより痛くないですよ！」

結論が出ないままで二人が言い争っている間に、脱衣場の扉が叩かれた。

「お〜い！2人とも、もう一時間以上経ってんぞ！中野さんも気がついたから早く出てきなさい！」

2人を急かした後に、近藤は部屋に戻って中野に暴走族に襲われた経緯を確認していた。

怖ず怖ずと部屋に現れた2人に対して、近藤と中野は机の上に置かれた、レトルトを温めた食材とカップラーメンを指差した。

「くるみちゃん、香ちゃん。助けてくれてありがとうね！もう大丈夫だから。」

ご飯をや用意したから食べてね。私達は食べたから…さっ！早く食べなさい。」

中野巡査に、急かされて2人は食事を始めた。

「香ちゃんはカップ麺にお湯を入れといてれる？あつ！MP-5が綺麗になってる！」

くるみは香に指示した後に、近藤の直ぐ横に置かれたクリーニングされたMP-5を発見して近寄り徐に屈んで広い上げようとした。

「もう〜。先に食事しなさい？……………！！！」

「後でクリーニングの……………！！！」

言いながら、2人の方向を見た2人の目に…

白いお尻を丸出しにして、電気ポットに四つん這いで這っていく香と、大きな白いおっぱいを剥き出しに近い状態でプルプルと震わせ

ながらMP-5を広い上げるくるみの姿が……

「あんたち！なんて格好してるの！」

ドガン！

中野巡査の激しいカミナリが落ちた。

勿論、2人は近藤の股間を確認する余裕などなかった。

その後、近藤も同席のまま2時間に渡って中野巡査は鬼のような形相で2人を縮こまらせた。

唯一の救いは、『中野巡査人身御供、我慢してね』作戦について一切検知されなかったことだけだった。

数時間後、くるみや香は疲れ果てぐっすりと寝入っていた。

お互いに順番にシャワーを浴びた、近藤と中野は缶ビール（一本とすること）で労をねぎらっていた。

「明日なんですが…出来るだけ早い時間に中野さんと香ちゃんに射撃訓練をして貰おうと思ってます。俺とくるみちゃんだけでは、流石に心許ないですからね。」

「わかりました。射撃訓練は苦手ですが努力しますわ。」

「でも、ご家族がご心配でしょ？いつ頃にS県に向かわれるおつもりですか？」

「そうなんですが…あなた方を放っておく訳にも行きませんし…無手ではS県に到着するのすら難しいでしょうから…はつきり言っただうした物かと……言った次第ですよ」

「私と香ちゃんが何とかなれば…くるみちゃんとS県に向かえるんですよね？」

「ハア…しかし、くるみちゃんを連れ行ってもいいものなのか…：考えあぐねてるところです。家族の無事が確認出来ている訳でもないですし…暫くはこの方が安心であることには間違いないですから……」

「難しい選択ですね。でも、私なら可能性にかけてみたいですね。私で良ければ何なりと仰って下さいね。」

「ありがとうございます。」

今日はお疲れになったでしょうから、休んで下さい。

俺も、戸締まりと周辺の様子を確認したら休みますんで…」

「あつ！あのう……」

「はい？何ですか？」

部屋から出かけた近藤は中野巡査に向かって振りながら答えた。

ビールの酔いが仄かに回ったのか、幾分赤い顔をした中野巡査は…立ち上がり近藤に近づきながら

「さっきのくるみちゃん達の件ですが……」

「いやあゝそんなに元気な年じゃないですよ。分別もありますから心配……」

近藤の言葉は途中で遮られた……

いきなり、中野巡査の唇が…近藤の口を塞いでいた。

ビックリして固った近藤は中野巡査を振りほどくことも出来ずに…

中野の柔らかい舌を受け入れてしまった。

唾液を引きずりながら口を離れた中野巡査は

「助けて頂いて感謝してます。私なら大人ですし…分別もあります。こんな状況ですから…必要でしたら構いませんので」
一言も発することが出来ずに近藤は部屋を後にした。

あんな、美人の婦警さんが……

俺は夢を見てるのか？このゾンビ騒ぎ事態が夢なのか？

「痛っ！」

近藤は自分で自分の頬をつねってみたが……

やはり夢ではないみたいだった。

気を取り直して戸締まりを確認した終えた近藤は、何気なくコンビ
二の玄関に面する部屋に入った。

中野巡査との一件が、いつもの近藤とは違う行動を引き起こしていたことが、最大限に幸運をもたらしていた。

部屋に電気をつけずに入り、カーテンも僅かにそつとだけ捲ったのである。

外には、数体のランニングゾンビが獲物を探してうろついていたのである。

偶然にも、近藤がカーテンを捲った瞬間にランニングゾンビ達が逆報告に視線を向けていたので気付かれるなかったのである。

慌ててカーテンを戻し更に注意をしながら外の様子を窺ったところ、ランニングゾンビ達は少し離れたマンションに入って行った。

数分後に、マンションから数十発の銃声とたくさんの叫び声が聞こえた。

「クッ！」

近藤の目には、2名の女性を庇いながら拳銃を乱射しながら、マンションの廊下を逃げる人が飛び込んできた。

しかし、あっという間に数体のランニングゾンビに飛びかかられて視界から消えていった。

「ランニングタイプまで出てくるのかよ!？」

これこそ、夢であってほしいぜ。」

気付かれないように注意しながら、ランニングゾンビがその後にとちらに向かうかを確認した後に、近藤は装備を再点検し無理やりに眼を瞑った。暫くして、疲れ果てた身体は深い眠りに引き込まれていった。

第8歩 新たな展開（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第9歩 夜叉丸・1（前書き）

うーん。ゾンビ物のはずなんですが・・・少し脱線してしまっています。

まあ、冒険活劇なんで何でもありという事でご勘弁下さい。

予定では、1人1話のつもりなんですが・・・1話分の戦いなんてかけるんでしょうか？

第9歩 夜叉丸 - 1

激しいスکیل音と衝突音や爆音が鳴り響き、近藤達は無理やり眠りから引き剥がされた。

「な、なんだ！」

「な、なに？」

飛び起きた近藤は枕元のG36アサルトライフルをひつつかみ、いそいそと予備弾倉の詰まったベストやらの装備を装着した。

隣の部屋に頭だけ突っ込んで、くるみに装備の用意を指示して、コンビニの正面玄関に面する部屋に移動し、カーテンの隙間から外の様子を窺った。

また、ランニングゾンビじゃねえだろうな？

そこには、スポーツタイプの自動車と高性能セダン車が7、8台、コンビニの広めの駐車場でジムカーナ大会よろしく、数台ごとにタイヤを軋ませながらカウンターをあて走り回っていた。

籠城がバレたのか？

心配しながらも、もっとよく見渡せる位置に移動した近藤の眼に映ったものは……

グルグルと円状に回っている車の中をゾンビに追い回されている数名の人々であった。

「どうです？」

いきなり隣に、くるみと中野が現れた。

近藤は黙って駐車場を指差した。

「！」

「あれって！夜叉丸？だわ」

中野が鋭い眼で車を睨み付けていた。

「間違いなく夜叉丸なんですか？」

くるみは車と中野を交互に見ながら聞いた。

「間違いないわね。ほら見て！駐車場の入り口の真っ赤なアウディ！夜叉丸の親衛隊長の車よ！

あいつが出てきてるってことは……

隣の黒いベンツが総長かも知れないわね！なぶり殺しにするつもりよ！」

「近藤さん！」

くるみが今にも飛び出しそうな勢いで近藤に指示を求めた。

「見捨てる訳にやいかんが……

助けても、こちらの車には乗せれる人数じゃないぞ！」

近藤はしばし考えた後に

「中野さん、香ちゃんと昨日運び込んだ荷物と、食料と水を適当に車に運んでもらえます？」

で、エンジンはかけたままで、用意が出来たら呼びに来て下さい。その間に、香ちゃんには空のマガジンに弾を詰めさせて！くるみちゃんも俺は一旦部屋に戻って、ありったけの予備弾倉を持って！」

「分かりました。」

中野とくるみはきびすを返して部屋から飛び出した。続いて近藤も残りの弾倉を取りに戻った。

全員が揃った部屋で、皆が無言で頷きあい、それぞれが持ち場に移動した。

「くるみちゃんは、MP-7で、まずはゾンビを無力化してくれ！」

「俺は夜叉丸を叩くから！出来れば、セダン車は無傷で手に入れたい！」

「了解！」

2人は勢いよく、扉から飛び出した。

店舗正面の2階部分の通路に陣取った2人は、銃撃を開始した。

「まだ、2人は助けられそうです！」

最初に見た時は5名程逃げ回っていた人々も今は2名に減っていた。慎重に狙いすまして、くるみは8体のゾンビを準々に射殺していた。

横では近藤がスポーツカーのタイヤに向かって、G36をバースト（3点射）で打ち始めていた。

ゾンビと違い、そこそこの高速で動く自動車のタイヤを狙うのはなかなか骨が折れたが、近藤の計算通りにタイヤを撃ち抜かれて動けなくなったスポーツカーが邪魔になりセダン車も徐々に動きが取れなくなり始めた。

既に2台のセダン車からはバットやゴルフクラブを握り締めた若者が飛び出してきていた。

そこに、激しい音に引き寄せられたゾンビ達が四方から集まりだしてきて、若者達がバットで応戦し始めた。

「車の中に逃げ込んで!」

くるみの叫ぶ声に気づいた2名はセダン車に向かい走り出した。

あと少しでセダン車にたどり着くという時、2名の内の1名の首が高々と血飛沫を撒きながら宙に舞った。

「あっ……………」

頭の無い、首から血を吹き散らかした死体はビクビクと痙攣しながら地面に崩れ落ちていった。

その後ろには、日本刀を携え鮮やかな緑色の巻き髪に不気味なメイクをした、ゴスロリ衣装を着た長身の女が立っていた。

刀身についた血を下品に伸ばした異様に長い舌で舐めながら

「なぐに？邪魔しないでくれる、折角の楽しい催しなのに……
殺して欲しいのお……」

と言いながらケタケタと笑っていた。

なんじゃ？あのデカい変な女。しかも、あのメイクは？……筋肉
。女隊とかの大槻なんたらをえげつなくした感じじゃねえかよ！薄
気味悪いいやっちゃな。近藤世代にしかわからないメイクの解説
であつた。

「いやあああ！離してえええ……」

新たな悲鳴に、近藤とくるみが顔を向けると……

顔じゅうのあちらこちらにピアスを付けた、坊主頭にウサギ耳をつ
け、金色のボディコンを身に纏った男？がもう1人の生き残りの女
性の髪を掴み引きずっていた。

「五月蠅いわね！」

ボディコン男は、徐に女の頭を踏みつけた。

「ぎゃあああ」

鋭い悲鳴とともに女性は動かなくなった。

「あらーやだあ！刺さっちゃったわ」

女性の頭には、ボディコン男の履くピンヒールが深々と突き刺さっていた。

「変態！」

大きく叫んだくるみは、MP-7をボディコン男に向けてフルオートで撃ちだした。

しかし、銃弾は地面を削り、殺された女性に突き刺さっただけであった。

数メートル横でボディコン男は口笛を吹いていた。

「えっ？」

外れる筈がないと思っていたくるみは茫然としてしまった。

「なんで…弾をよけるのよ」

ダダダダダ……

ボディコン男に銃弾の嵐が襲いかかった。

「弾を避けたんじゃない！撃つ前にくるみちゃんが叫んだから予測して動いただけだ！」

10発ちかい5・56ミリを受けたボディコン男は、それでも起き上がった。

「ハアアア。ゾクゾクするわぁーエクスタシーだワアア！」

アバラが折れたみたいよお。嬉しいわねえ。あんたを切り刻む理由が出来たわよお。」

ニタアアアと笑いながら、ボディコン男は近藤に向かって、舌なめずりをしながら右手中指を突き上げながら叫んだ。アメリカ人の大好きな相手を馬鹿にする仕草である。

「糞つたれ！あのボディコンは防弾仕様か！？」

「最新式なのよぉー」

とボディコン男は言いながら、両手をスカートの端に這わせた途端に、マジックのごとく、左右の指に6本の投げナイフ挟んでいた。

「死ね！」

叫びながら、ナイフを投げつけた。

「あまいな！こっちは射撃姿勢のまんまだぜ。」

飛来するナイフにG36の銃口を向けて5・56ミリの銃弾で6本すべてを粉碎した。

「うっーん。殺り応えがある。いい男ねえ」

ボディコン男はクネクネしながら近藤にウィンクをした。

「ありがとうよ！なぜだか、昨日から人生最大のモテ期みたいだね。相手に不自由はしてないんだ！よ！」

近藤は、言うや否や、G36を肩にかけホルスターからP46を引き出して、ボディコン男に狙いをつけた。

ボディコン男はまたまたどこから出したのか、鳥の羽根でできた扇子を持ち出して頭部を隠し

「拳銃なんかじゃ、あたしは殺れないわよ！なにせ、痛みを感じないんだからねえ。しかも最新式のボディアーマーでしょ？負ける要素がないじゃない？」

扇子をヒラヒラとさせながらボディコン男は笑い飛ばした。

「なら、喰らってみな。H&K作、対ボディアーマー用の4.6mm×30弾だよ。GSG-9の御墨付きだぜ」

パン！パン！パン！パン！

近藤は4度引き金を引いた。

1発目はボディコン男自慢のボディアーマーの腹部を貫いた。

2発目は左肩を撃ち抜き扇子が地面に落ちた。

3発目、4発目はそれぞれ左右の膝頭を撃ち抜き、ボディコン男は膝から地面に落ち、まるで許しを乞うような姿勢になった。

「なんで？なんで、あたしのボディアーマーを撃ち抜けるの？」

ボディコン男は、信じられないといった驚愕の顔をして撃たれた腹を両手で押さえながら近藤を見た。

その目に真つ赤なレーザー光線が当たり

「悔い改めな！」

パン！

5発目の4・6mm×30はボディコン男の右目から頭に入り、脳みそに壊滅的に損傷を与え頭の後ろに大きな穴を贖って飛び出した。

「ざまあみるってんだ。」

「もう！」

くるみが隣で痼癰を爆発させていた。

くるみは、近藤がボディコン男と対決している間、ゴスロリ女に対して必死にMP-5で銃撃を行っていた。（MP-7より手馴れたマシンガンに切り替えていたのである。）

ゴスロリ女の衣装も防弾の様子で、身体に弾が当たってもケロッとしていたので、頭や剥き出しの手足を狙ったが、ことごとく刀で銃弾をはじかれていた。

パン！パアアアーン

車のホーンが鳴り響いた。

「ボスがお呼びだわ。今日は勘弁しておいてあげるわね。ウサギ禿の変態を倒した程度で浮かないでねえ。あんなのは雑魚だからね！」

ゴスロリ女は、悠々と真っ赤なアウディに向い大股で歩き去った。

ゴスロリ女は車に戻りながら、進路を邪魔するゾンビやそのゾンビと戦っている仲間であるう若者達を関係なしに容赦なく斬り捨てながら進んだ。

「酷い！」

くるみが顔を背けた時

ターン！と1発の銃声が響いた。

アウディの手前で迫りくるゾンビを斬ろう振り上げた、ゴスロリ女の刀が鐔のところで真っ二つに折れた。

「そっちこそ。油断大敵だぜ」

近藤がG36のスコップ越しに返事を返した。

「チッ！予備を持ってやがるのか。」

ゴスロリ女は、折れた刀を地面に捨て、慌てた様子もなく背中から新たな刀を抜き、迫り来る数体のゾンビを簡単に斬り捨てアウディに乗り込み、黒いベンツと共に走り去っていった。

その後をバットやゴルフクラブで武装した仲間達数名が走りながら追い掛けていった。

走り去る車に向かって、MP-5に装填されている残弾をフルオートで全て撃ちきったくるみが

「逃げられちゃいましたね。」

と言いながら、空になったマガジンを外して新しいマガジンを装填していた。

「ああ。これからが大変になりそうだな。あのゴスロリ女みたいのが何人もいたら、かなり厄介なことになるぞ。それより、この騒ぎで寄ってきたゾンビを何とかしなきゃ……車で突破できる数じゃねえぞ！」

コンビ二前の駐車場には、ゆうに100体近いゾンビがうようよし、そのうちの半数ほどがコンビ二の2階にいてる近藤とくるみに気がつき、コンビ二に向かい始めていた。

「仕方がないな。くるみちゃん、中野さんと香ちゃんを呼んできてもらえるかな？車のエンジンは切って、そうだな……。装備はMP-5とUSPでそれぞれ10本ずつ予備マガジンを……。あつ、それとG36と予備を3マガジン取ってきてもらえるかな？この際だから、下のゾンビの排除を兼ねて2人に射撃訓練をしても

らおう。」

くるみが2人を呼びに行っている間、近藤は『夜叉丸』について考えを巡らせていた。

どれぐらいの規模なんだ？

なんで、あんな変な奴が混じってた？

あのゴスロリ女が忠誠を誓うボスってのはどんな人物なんだ？

それに……なんで防弾仕様の服なんて持ってるんだ？

考えれば考えるほど、謎ばかり増えていく「負」の連鎖に、近藤は無理やり考えることを中断した。

まずは、中野さんと香ちゃんが銃をともに撃てるようにしなくちゃ！この先、身動きが取れなくなっちまう。このコンビ二も、今晚は使えそうにないし………

新しい休憩場所も確保しなくちゃなんねえな。どこかにいい場所はないだろうか？

近藤が必至に頭の中の地図を捲っている間に、装備を用意した3人が戻ってきた。

答えの見つからないままに、近藤は中野の香にMP-5やUSPの取り扱い方や撃ち方を説明し、中野は近藤が、香はくるみがつきつきりで射撃を教え始めた。

両名が10本のマガジンの全てを使い切って練習を行ったところ、香はほぼ7割程度の命中率（但し、ゾンビに当てるだけなので、致命傷を与える命中率に至ってはよくて4割である）で及第点であったが、中野に至っては4割に満たない命中率であった。

なんで？レーザーショットが当たった瞬間に引き金をきくだけなの？
？どうやったら外すことが出来るんだよ！

近藤は、顔には出さないように愚痴っていた。

中野には致命的な弱点があった。何度教えても、引き金を引くときに、カー杯に引くために、銃口がブレてしまうのだった。

これ以上は、弾の無駄使いだな。残りのゾンビを始末して……新しい隠れ家を探さないと、このまま夜を迎えると厄介なことになるぞ。昨晚の走るゾンビもいつ現れるか分からんしな。早いところ、ここからズラかる方がよさそうだ。

「よし！3人は戻って、装備の再点検と空マガジンへの補充。それと、出発までに簡単に食べられる物を2〜3食分見繕ってくれ。

俺は、下のゾンビを全部始末してから降りるから、それと、くるみちゃん机の上に小型トランシーバーがあっただろ？チャンネルは6番にしてある。持っていてくれ。充電式だけど数時間なら近距離の連絡手段にはなるだろう。

さあ、夕方の4時過ぎには新しい隠れ家を探さなきゃなんから、急いで行動するんだ。」

それから10数分後、全員で装備の再確認を行い、運転席に中野、助手席に近藤。後部座席にくるみと香が乗車した。

「さあ、開けるぞ」

扉の上がり具合に合わせながら、軽自動車がスルスルを駐車場を滑り出た。

「ちょっといいですか？」

中野が、返事も待たずに『夜叉丸』達が乗り捨てた、車に向かって軽自動車を進めていった。

「あつ！あれあれ！」

1台のセダン車の中を覗き込んでいた中野は何かを発見したらしく、唐突に車を止め、車を飛び出しセダン車の中に潜りこんだ。

慌てた近藤も飛び降りて、P46をホルスターから引き抜きながらセダン車にもぐりこんだ中野をバックアップできる位置に走りこんだ。

同時に、くるみはサンルーフから身を乗り出して、MP-5を構え周囲に向かって注意の目を向けていた。

「中野さん！安全確認もせずに車に乗り込んだら駄目ですよ！」

「ごめんなさい！これが欲しかったんだ！」

車から這い出して来た中野の手には、二振りの木刀のような物が握られていた。

「木刀なら……車の中にあ……」

近藤の言葉を遮るように、中野はその木刀の柄の部分を引きいた。

それは、木刀ではなく日本刀であった。中野は抜いた日本刀の刃を四方から眺めて

「ふーん。結構、いい代物じゃん！……」
あつ！ごめんなさい……」

私、銃が下手でしょ？でも、これなら皆の足を引つ張ることはないわよ！少なくとも接近戦なら十分な戦力になれるわ。さあ、いきましょ！」

マイペースな中野巡査に引きずられるように、近藤は車に戻った。
コンビニ駐車場の出口で中野が

「5キロほど離れたところに私の自宅があるんですが？メゾネットタイプでお隣は未入居ですし、駐車場は簡易ですがゲート式の扉もついてます。車も燃えちゃったんで入ってませんし……」
食糧もそれなりにありますし、女性用の着替えも手に入れますよ。」

「現時点で、贅沢など言ってもらえません。是非お願いします。」

近藤の一言で、中野巡査の自宅に向かうこととなった。

数分の沈黙を破ったのは近藤であった。

「中野さんは『夜叉丸』については詳しいんですか？」

中野は前方をしっかりと見つめ、下手な破片などを踏みタイヤがパンクすることのないように慎重に運転を行っていた。

「ええ、たぶん署内でも詳しい方だと思います。生活安全課で4年交通課で2年の付き合いになりますから……まあ、ある意味警察官になってから今までずっとの付き合いなのかもしれません。」

「よろしければ、『夜叉丸』について教えていただけますか？」

「わかりました、この近くに見通しのいい高台があります。ちょうど戻る途中なんで、そこで少し休憩を取りながらの説明でもよろしいですか？こみいった部分もあるので、運転しながらというのも・・・」

「わかりました、そうしましょう。見晴のよい場所なら周囲を警戒しながらお話を聞くことも可能でしょう。」

更に数分上り坂を上がったところに中野が指定した高台があった。高台は民家から離れた位置にあり、下りきるまで他の民家もなく周辺にはゾンビがいる気配もなかった。この場所しか知らなければ、街中に人肉を求めて徘徊しているゾンビがいて、人々が死にもの狂いで逃げまわっているとは信じられないであろう。

「夜叉丸はもともこの街にできた小規模な暴走族だったらしいです。設立されたのは10年くらい前だそうです。」

変化が現れたのが、私が警察官になって生活安全課の少年係に配属になった前年だから7年前だと聞いてます、それまでは小さなやんちゃな暴走族で構成員も30名足らずだったんですが、総長が変わった途端に、急に武闘派として過激集団化していき、わずか2年で近隣8県の名だたる暴走族を配下に収めたんです。圧倒的な暴力支配で・・・・・。

ただ、拡大しただけでなく、対抗していた暴走族のリーダーの数名が行方不明にもなっており、単なる暴走族の抗争事件以上の可能性もあると、各県から選抜された刑事課や交通課や少年係が捜査を開始しました。我々の署は地元であった為、交通課と少年係は総動員でした。我々は全員でその総長と言われる人物の特定に奔走したの

ですが、名前を確認することすら出来ませんでした。勿論、何らかの形、別件逮捕などでの突破口すら見つからなかったんです。

唯一の手がかりが、その総長が入ってくる直前に家庭事情で引退した特攻隊長が残した言葉だけです。その家庭事情というのは、付き合っていた少女の妊娠でした。その少女も、自身の家庭不和で深夜徘徊を繰り返す少女でして、私の担当だったんです。

『2年間は我慢して見守ってきたが、危険な方向に進んでいる後輩達に活を入れに行ってくる。中防の糞餓鬼にいい様にされやがって』と言葉を残して単身で集会に乗り込んだらしいんです。

その後彼は行方不明です。当時私は他県の応援で長期不在だったので、私の先輩が相談を受け、先輩と少年の奥さんが当時の仲間や後輩に尋ねまわったんですが………3週間後に、奥さんは監禁の果てに暴行・凌辱を受けて………身体中の穴という穴に瞬間接着剤を注入されるといふ惨たらしい方法で殺害されました。2歳になる息子さんも首を絞められて………

ほぼ、同じ時期に先輩は………ひき逃げに会い即死でした。ひき逃げに使われた車は盗難車で遺留品なども見つからずです。

その後、県警本部長や県の公安委員会のメンバーの身内や捜査関係者の身内に、偶然では済まされない事故が多発して………いつの間にか自然と捜査は打ち切り………関係者は口をつぐむようになってしまいました。

当時の上司が、その後に組織犯罪対策部に異動になったんですが、近隣8県の暴力団や一部広域指定暴力団すら夜叉丸に歯向かうどころか、その配下のごとくにこき使われているが判明したそうです。

現在は、組織犯罪対策部長の特命で7名の捜査官と5名のサポートメンバーが極秘で専従捜査を行っています。私もそのサポートメンバーだったんです。

1週間前によく、リーダーの名前が判明しました。現在の名前は、影丸一馬。21歳です。丁度当時の年齢が中学生です。」

一気に説明した中野は、ペットボトルのお茶で喉を潤していた。

「影丸？もしかして影丸知事の？」

近藤が信じられないという顔で尋ねた。

「そうです。父親は影丸知事。祖父は影丸元総理ということになります。」

ですが、この影丸一馬。巧妙な手口を利用していますが影丸性を名乗るまでに少なくとも3回の養子縁組で性を変更していることが判明しています。つまりは、影丸家の養子ということになってます。影丸性の前が、高柳性でした。ご存じのとおり高柳家はこの地方一体に広大な土地を持つ大地主です。その前が山崎性です。山崎性は有名ではありませんが、隣街の総合病院の理事長一族です。」

突然、くるみが会話に割って入ってきた。

「その前は、高須性ですよね？」

高須健一、るみこの長男。

高須健一は事故死。

一馬は実母や実妹への過度な暴力行為が認定されて保護矯正施設に入所、しかし1週間で脱走。その後行方不明？違いますか？

ついでに言えば裁判所命令により、実母や実妹は新戸籍に異動し移動情報は抹消？ですよね」

くるみが、MP-5の銃杷がミシミシと音なるほど握りしめていた。

「そ……その通りだけど。なぜくるみちゃんが知っているの？……えっ？もしかして？くるみちゃんが？」

「その、悪魔のような男の妹です……」

私が10歳だった時です。お父さんは、あいつに殺されたんです。当時、お父さんが発明した研究結果が欲しかっただけで……。私やお母さんを人質にとつて、何か月もお父さんを追い込んでいったんです。

そして、忘れもしません。あいつは、笑いながら……。笑いながら国道にお父さんを突き飛ばしたんです。誰にも見つからないように細心の注意を払っていたんでしょうけど……。普段から馬鹿にして空気みたいにしただけで感じていない私が見ていたことには気づけなかったんです。

高校を卒業したら、警察官になって……。拳銃であいつを撃ち殺すって誓ってたんです……

でも、3年間入院して、4年前に再婚したお母さんが2年前からやつと笑顔で笑えるようになったんですよ。だから……。決心が鈍っていたんです。でも、許せません。」

「でも、くるみちゃん。今の『夜叉丸』は単なる暴走族じゃないのよ。暴力団や海外の犯罪組織とも関係があるのは間違いないの。もしかしたら、国家の秘密機関なんてところとも関係があるかもしれないのよ。」

私たちがつかんでいる情報だけでも、異常殺人を常に行っている護衛みたいな取り巻きが8名もいてるの……

禿頭のオカマのナイフ投げ、琉球空手の達人の双子兄弟、身長2メートルの元ロシア特殊部隊の伍長、人切りサイゾーと呼ばれた九州の暴力団員、ゴスロリ衣装のオカマのナンシーと呼ばれる関東No.1暴走族の元リーダー、一馬の頭脳と呼ばれる闇医者上がりの40台の男、それと正体不明の『龍』（ロン）と呼ばれる20台の男。龍は一馬の寵愛を受けて夜伽までしているそうなの。

でも、この情報入手した、公安の捜査員はあまりにも深く関わり

すぎて未だに組織から抜け出すことが出来ていないの。」

「夜伽よとぎってなんなんですか？」

緊張した会話の中でくるみのいきなりの質問に、近藤と中野はおもわずズッコけてしまった。

「近頃の高校生はこんな言葉も知らないの？……内容が内容なんで近藤さんから説明して頂けます？」

中野巡査に話しを振られた近藤はドギマギしながら

「お、俺が説明すんのか？女性からの方がいいんじゃないかい？そうだ！中野さんは少年係だから…若い子たちに説明するのは慣れているんじゃない？」

「私がですか？近藤さんってこの娘たちくらいの娘さんがいらしたんじゃないかったでしたっけ？何事も経験ですよ。ほら、頑張っ！」

近藤は、中野巡査に押し切られる形で渋々と説明し始めた。

「もともとは女性が男性の相手をして共寝することなんだが…共寝っていうのは一緒に寝ることの添い寝ではなく…つまり、そのだな、夜のお相手をするってことなんだわ。」

「わああ！男同士ってことですか？いやあ、不潔！超キモいんですけど…」

香が口を挟んできた。

「まあ…嗜好ってえのは、人様々だかな。ほら、宝塚みたいなも

んだよ！」

苦しい言い訳をする近藤であつた。

「宝塚は女性同士だから、見た目も綺麗だから許せるじゃないですか！

男同士ですよ？松潤とはるな愛なら許せるけど…松潤とマツコDXとか松村とか出川じゃ、キモ・キモでしょ？」

「それは例える相手次第だろうが！松潤とキムタクとか竹野内豊とか小栗とかならありじゃね？

女性だって、久本とイモトとか山田花子とか泉ピン子とかならキモいだろ？」

「でも、久本とイモトだって後ろ姿ならありかもしれないですよ？」

近藤と香がくだらない言い争いを始めたところで、中野がわって入ってきた。

「もう。近藤さんってば、中学生の香ちゃんと同じレベルで言い合いでどうするんですか？

そんなんじゃ、お家でも娘さん達にかなわないでしょ？大人なんだから、きつぱりと言い切らないと駄目ですよ。最近の若い娘は屁理屈が多いんですからね。

香ちゃんも、しょうもない疑問を持つんじゃないやありません！男同士って云うのもあるんです！」

中野巡査にピシヤリと言われて、モゴモゴと口の中で反論をしながらも香は納得せざるを得なかった。

はむかえば、大目玉を食らうのは必須と言う顔を中野がしていたの

である。

おお！久しぶりに嫁並みにこええ女性だわ！昨日、勢いに呑み込まれてたら……おおお、こわっ！嫁や娘達にバレたら、ただじゃすまねえどころか、こつちも強いから……挟まれたら命はないかも知れないな！

こつそりと自問自答している近藤であつた。

「えつと……話しが大きくそれちまつたが……夜叉丸とは既に一戦交えちまつたからな。」

8人衆？だっけ、禿頭のオカマのナイフ投げとゴスロリとは顔見知りになつちまつたぜ。

ただ、禿頭は……ケバいボディコンスタイルで顔中にピアスしてた。」

「うさぎの耳もつけてました。」

ボソリとくるみが呟いた。

「そうそう、ありやきつとバニーガール！そう！バニーちゃんのつもりだったんじゃねえかな」

中野に睨みつけられて、近藤は続きの言葉をゴクリと呑み込んだ。

「禿頭のオカマは……近藤さんが始末してくれました。ゴスロリには逃げられました……ゴスロリはオカマには見えなかったです。」

くるみがボソボソと情報を補正していた。

「既に8人の1人はやつつけた。と言う訳ね？」

考えこむ中野に対して、近藤が頭をかきながら情報を訂正した。

「正確に言えば…ゴスロリの刀を銃弾でへし折ったから……十分に恨みも買ったぜ。多分はらわたが煮えくりかえってると思うぞ。」

「逃げても追われると言うことですか？」

「そいつはわからないな。」

まず、通信手段がないだろう？だから、8人衆がどの程度近い距離にいてるかだな。

それに、俺達を捜にしても、どうやって通達を出すかだな。身近にそんなにたくさんさんの兵隊がいるとは思えないんだが？

それと……無用な心配をかけたくなかったのと。タイミングがなかったんで伝えてなかったが…

ゾンビあなたが……どうも、のろまなタイプだけではなく、走るタイプもいてるみたいなんだ。」

既に何度もゾンビと遭遇しているくるみがささず反応した。

「走るって？スピードはどれくらいなんですか？」

「夜中にむかひのマンションを走り回るところを見ただけだが…結構なスポーツマンレベルだと考えた方がいいかな？」

これだけたくさんさんのゾンビに遭遇して初めて見たし、数もせいぜい7〜8体だけだったから、走るランニングゾンビは全体の1パーセント以下くらいじゃないかなあ。

しかし、1万人の住人がいれば100体はいてる計算になるから油断は出来ないな。

普通の、のろまゾンビは凄い数で押し寄せてくるし…

夜叉丸の兵隊に8、いや7人衆にランニングゾンビ……こっちは4人。逆立ちしたってかないっこないって感じだわな。よほど慎重に行くのと、悪運が強くなかつちゃ……な。」

少し青ざめた表情で中野巡査が言った。

「どっちにしろ。コソコソと逃げ回っても無駄と言う訳ですね。」

「ああ、この騒動は世界各地で発生しているらしいからな。警察は装備からみて役にはたちそうにないし、そうなれば自衛隊と在日米軍がどの程度統制がとれた状態で活動してくれるかが問題だ。

自衛隊は、今のところゾンビが発生していないらしい北海道で部隊の編成を実施しているか？本州を見捨てて爆撃でも考えているかな。

どっちにしろ、情報が少なすぎるから……何とか情報を入手したいもんだ。

かれこれ、1時間はここの止まったままだが、夜叉丸にもランニングゾンビにも遭遇はしていないというラッキーな状態だし、すくなくとも尾行されていることもないわけだから取り急ぎは中野巡査の家にいくしかないな。

ここからだとのくらいかかるのかな？」

中野巡査は、ギアをドライブにいれながら

「ここを下って、もう一度小高い丘を登った中腹なので、ゆっくり走って10分くらいです。出発しますね。」

5分ほど下った後に、緩やかな坂道を小高い丘に向かって登り始めたところで前方に黒いキャデラックが止まっていた。

車に寄りかかりながら、煙草を啜っていた運転者らしき人物がこちらに向かって手を振りながら手招きをしていた。

「生存者だわ。こんなところで止まっているなんて、ガソリンが切れているのかしら？どうします？近藤さん？」

「キャデラックで着流しですよ？いかにも田舎のヤクザ屋さんじゃないですか？しかも、今日の流れから言えば……」

「人切りサイゾー！？」

香が素つ頓狂な声を張り上げた。

「中野さん、7、8メートル離れたところで止めて下さい。俺が話しをします。」

キャデラックから8メートルほど離れたところに停車し、助手席から近藤が用心深く降り立った。無用な争いを避けるために、G36小銃は車に置いたままである。

「くるみちゃん。サンルーフは開けてあるから、もしもの時には加勢してあげてね」

心配そうに中野がくるみに声をかけた。

「はい。そのつもりで、向こうからは死角になるように中野さんの影に隠れてます。怪しくなったら声をかけて下さいね。」

くるには、MP-7のコッキングレバーを操作して初弾の薬室に送り込み、前部のハンドステイク立てて、後部のショルダーストック

を引き出し、フルオートで射撃できるように準備を行った。

「どうかしましたか？この一帯は化け物がうろついているから危険ですよ！」

近藤は努めて明るい感じの声でキャデラックに寄りかかる男に声をかけた。

「ご親切にどうも。アメ車ってやつはいけませんね。燃費がわるうてガス欠なんですわ。JAFを呼ぼうにも携帯電話がつかないのですね……」

その、お身なりからすると警察の特殊部隊のお方ですかい？」

「いえ、民間人です。この装備は緊急避難的処置ってことで……」

「そうですかい。あつしは、人を探していましたね。あんさんと同じ様な格好をしてライフルを持って、若い娘さん連れをいなさるそうなんです。」

「その人が何か？」

「仲間の仇らしいんですわ。あつしは、機械が苦手ですわ。無線たう言う機械が一方的に喋りかけてきたんですわ。既に、仲間が1人殺されたそうですねん。」

まじかよ！人切りサイゾーで確定じゃないかよ！

「何故、そんな話を私に？」

「そうでんな！あんさんの背丈に格好に装備に人相。伝え聞いてとるのとそっくりですね。しかも、市内からここまで……度、程よい時間でっしやる？」

あんさんに恨みはありませんが、これも渡世の義理でんねん。堪忍しとくれなはれ。」

てか、人切りサイゾーは九州の出身じゃないのか？まるで関西人じやねえかよ？

「でも、俺の装備は拳銃。いわば飛び道具ですよ？貴方は見るからに拳銃などはお持ちのように見えませんか？」

「若いもんは直ぐに飛び道具に頼りますが……あっしのこれがあれば、弾の一つや二つ、難なく弾き飛ばせますのや。何なら、試さしますか？」

近藤は、この自身ありげな言葉に背筋に冷たい汗をかいていた。

ハッターリじゃなさそうだな？さて？どうする？

第9歩 夜叉丸 - 1 (後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第10歩 夜叉丸 - 2 (前書き)

一応、ゾンビ物の体裁は保てましたが……

この先の8人衆(残り6人)との対決その後の一馬との対決。

一話、一話、まともな量の物語にしないでいけない……胃が痛くなりそうです。

空手との対決や特殊部隊との対決。

妙案あれば、どなたか、お助け下さい。

相変わらず、無謀な作者でした。

第10歩 夜叉丸 - 2

近藤は意を決して

「人切りサイゾーさん…なんですね？」

「いかにも」

サイゾーは死角にあつた右手を見える位置に出した。その手には、白鞘の刀が握られていた。

サイゾーはゆつくりと刀を抜き鞘を地面に落とし、近藤の真正面に正眼の構えで対峙した。

「本気でやるんですか？見たところ……あなたは夜叉丸。いえ、影丸一馬に荷担する人物とは思えないんですが…」

躊躇しながらも、近藤はP46をホルスターから引き抜き、軽く右肘を曲げてP46構え握る右手に左手を添え、左足をやや前方にし軽く膝に溜めをつくり、サイゾーの胸元、心臓の真上にレーザーダクトの紅点を向けた。

「一馬のボンのやり方や考え方には……決して納得はしていやせんが、おやっさんとおのお嬢がお熱でしてね。ボンから離れないんですあ。

親のためなら、おてんとう様に顔向けできないことだろうが、あつしには出来ねえこたあねえんですよ。

あんさんには何の恨みもありやせんが…

いえね、どちらかと言えば、幼児姦の変態オカマ野郎に制裁を加え

てくれたことにや感謝したいくらいなんですがね。

おやっさんの泣き顔は……あっしには直視出来ねえんでさあ。」

そう言った途端にサイゾーの目の色が変わり、ゾクツとする寒さを感じらるた。

こいつはマジだな。かなり時代錯誤の旧世代のヤクザ屋さんか……

いきなり、素人にもハッキリと分かるほどの殺気を放ったサイゾーは一気に近藤との距離を詰めようと踏み出した。

パン！パン！と乾いた銃声にキン！キン！と軽い響きが木霊した。

サイゾーもゴスロリ・ナンシ・なみの剣技で簡単に4・6mm×30を弾き返したのである。

「飛び道具はあっしには通用しやせんぜ。申し訳ありやしやせんが、お命頂戴！」

更に距離を縮めようと前進するサイゾーに向かって、近藤は発砲を続けた。

くるみはサンルーフから身を乗り出して、MP-7で援護射撃を行おうとしたが……サイゾーはたくみに、くるみとの直線上に近藤を挟むような位置取りをしていたため、援護射撃が出来ないでいた。

「中野さん！駄目です。常に近藤さんが射線上に！………撃てないです。」

15発の銃弾を弾き返した段階で

「15発を撃って、まだスライドが後退していないってこたあ、薬室に1発入れてなすったてえことみたいですね。次の1発で…あんさんの拳銃はただの鉄屑になりはてやすぜ。おつとと…マガジンチェンジの時間は…差し上げられやせんぜ？もちろん、車からの援護射撃をご期待なさっても、あつしは常に死角にいてやすんで無駄ってもんですぜ。」

言いながら、ズイツと一步を踏み出したサイゾーに対して、近藤は更に1発したが相変わらずサイゾーはいとも簡単にその刀身を目にも止まらない速さで振り抜いて弾き返した。

ニヤリと左口角を釣り上げて刀を上段に構え直したサイゾーが、必殺の袈裟切りを放とうとした瞬間に……

今だ！完全に油断してる！

パン！と更に1発の銃声が鳴り響いた。

その瞬間にガクンとサイゾーが膝をおり、倒れ込みそうになりながら刀を地につけ耐えていた。

「???17発目が…ありなさったんですか？」

「日々、進化とさえいいんですかね。この拳銃はサイゾーさんが知ってらっしゃるのは違うんです。」

痛みをこらえながら立ち上がったサイゾーは

「17発…撃ちなさってもスライドが後退してないってこたあ…ま

だ撃てるってえことですな。

しかし、この1発であつしに決定打を決めないってえのは甘過ぎやしやせんか？」

そう、何故か近藤はサイゾーが根っからの悪党とは思えずに、わざと狙いを外して足に銃弾をかすらせようとしたのである。しかし、抜群の射撃センスの近藤ではあつたが……所詮は経験不足なのだろう。

銃弾は、サイゾーの左大腿部を貫通していた。

「何、甘いことを！」

言いながら、中野巡査は先ほどセダン車から手に入れた日本刀を片手に車から飛び出して言った。

「考え直しませんか？ 今、人間同士がいがみ合ったり殺しあつたりしている場合じゃないですよ。サイゾーさんが大事に思ってる親父さんですか？ その親父さんだって、今頃はゾンビと戦ってらっしゃるかも知れませんよ。」

「そうかも………知れやせんが、あつし達は………例え白でも親が黒といやあ黒なんでさあ。

嬢を哀しませるなと言われりや………

一馬ボンの……手駒としてやるしかないんでさあ。」

サイゾーは言うや否や、足を撃たれているとは思えない速さで、刀を振りながら近藤に接近し必殺の袈裟斬りを放った。

ガシーン

サイゾーの切り込んだ日本刀を近藤は咄嗟にP46を放り出して、右足から蛮刀を引き抜いて受け止めた。

「お見事、よくぞあつしの一の太刀を防ぎなさった。蛮刀でなかったらへし折れましたんやがな。しかし、あつしと斬り合いで勝負しなさるおつもりで？」

近藤は、サイゾーの言葉に返す言葉もなく、刀を受け止めることに必死であった。

足を撃ち抜かれてるのに……なんてえ踏み込みの力なんだよ。こりゃ戦法をまズったかもな。俺の判断の甘さが……くるみちゃんや中野さんや香ちゃんを危機に落とし入れちまいそうだな。

最低でも、差し違えるにはどうすりゃいいんだ？

額から汗を滲ませながら、近藤は自分の甘い判断を呪った。

鏑迫り合いはジリジリと押し込まれて、更に近藤は劣勢にたたされていった。

どうする？ いや……どうすりゃいいんだ？

額から吹き出る大粒の汗が目に入ってしまった近藤はその僅かの瞬間にグツとサイゾーに押し込まれた。

しまった！

必死に押し返そうとした瞬間にサイゾーはバックステップで1→2歩後ろに下がり、体勢を崩した近藤目掛けて一気に上段から刀を振り下ろした。

駄目だ、ごめん！

近藤は覚悟を決めて、来るべき痛みを待った。

キン！と甲高い音と共に近藤の目の前に誰が割り込んできた。

「邪魔！下がって！」

サイゾーと近藤の間に中野が割り込んできて、サイゾーの一撃を中野の刀がはじいていた。

「おやおや、助っ人さんですかい？
あつしの必殺袈裟斬りを、おなごのくせに弾くとは……………なかなか
の腕前とお見受けしやす。どちらさんで？」

「中野優香よ。」

「なかのゆうか？……………
柳生の？」

木刀で人を斬ることが出来ると言われた平成の女十兵衛？

ハ、ハハハハッハ…………ハ
こりゃ、とんでもない大物とのお手合わせが叶ったわけで…………
示現流…永倉才蔵！いざ！」

サイゾーは大きな掛け声とともに大きく一步を踏み出し、優香に斬り架かってきた。

「キイエーイ」

優香はサイゾーの袈裟斬りを刀で受けるわけではなく、紙一重のサイドステップで避ける。

すると、そこへすかさず地面から突風が吹き出るような逆袈裟斬りが地を這うように放たれかけたが、一瞬にしてその太刀筋は優香の40〜50センチ前方を通過した。

「あつしの袈裟斬りを避けながら、合わせて……胴を薙ぐとは……」

バックステップで後方に飛んだサイゾーの左脇腹から中心に向かい、着流しが切れ、身体に赤い線が走っていた。

「浅かったみたい……ですね。」

優香は息も切らずにニヤリと笑い平然と言つてのけた。

「まあ、6年ぶりだから……サイゾー-さんにご納得頂けるかどうかしら」

ぜ、全然見えねーぞ！どんな次元の闘いなんだ？P46を拾い上げマガジンチェンジをしたままで、啞然として2人を見ていた近藤であつた。

同じくサンルーフから身を乗り出するみと車中の香も、口をあんぐりと開けたまま声も出せないでいた。

「浅かっただけですかい？もしかして、人を斬ったことがねえんじや？」

サイゾーは、正眼の構えから八相の構えに切り替えていた。正眼の構えより初太刀のパワーを上げる方法であるが……最初から刀を振り上げているために達人同士の場合には、逆に胴体に大きな隙を作

ることになる構えであつた。

全力で初太刀を浴びせるつもりみたいだね。

優香は冷静に状況を分析していた。

サイゾーが必殺の袈裟斬りを放とうとした瞬間に
パン！パン！パン！

鋭い銃声の音が響いた。

「ヤバいぞ！走るゾンビだ！くるみちゃん！車の中に戻るんだ！」

車の後方から凄まじい勢いで10体程のゾンビが走りよってきていた。

くるみは慌てて車中に戻り運転席に滑り込むと同時に、優香が開け放しにしていたドアを閉め、ドアロック下げ、とサンルーフの開閉スイッチを操作していた。

「くるみちゃん！閉めちゃったら、近藤さんと優香ちゃんが！」

「こっちの方がゾンビに近いのよ！まずは安全を確保しなくっちゃ
！」

ランニングゾンビは、車中の2人には見向きもせず、近藤達3人に迫っていった。

「クソッ！めったやたらに速いじゃねえかよ。」

近藤はP46を乱射気味にランニングゾンビの集団に向かって発砲した。

数発の4・6mm×30弾がランニングゾンビに当たったらしく2体のランニングゾンビのスピードがガクンと落ちた。

近藤や車中のくるみや香に一瞬気が向いた優香に凄まじい殺気が向けられた。

「ヤバい！」

優香がサイゾーに向かい直した瞬間に

サイゾーは優香の脇をすり抜けながら

「一旦お預けにしようや！」

脱兎のごとくランニングゾンビに走りより、先頭にゾンビを袈裟斬りをおみまいした。

先頭のランニングゾンビの上半身が斜めにずり落ちたが、そのずり落ちる隙間から2体目のゾンビがすり抜けるように現れた。

2体目のゾンビに逆袈裟斬りを放ちかけたサイゾーであったが、先程、優香に斬りつけられた傷が初太刀の満身の力を振り絞ったせいで若干開いてしまい、思わず膝をついてしまった。

「おやっさん！すいやせん。」

サイゾーは自分の死を覚悟した。

そこへ、若干遅れた優香が走りより

2体目のゾンビの首をやすやすと跳ねた。

続いていた6体は、減速し2人を囲むように散開し始めた。

囲まれた2人を横目に近藤は、自分が撃ったスピードの鈍ったゾンビに蛮刀で対峙していた。スピードが鈍ったと言っても常人以上の速さで近藤の周りを回りながら攻撃をされていた。

「中野さん！サイゾーさん！こいつら、連携攻撃が出来るみたいですよ！」

何とかそれだけを伝えることが出来たが、その後は2体と対決するだけで精一杯であった。

優香とサイゾーはお互いに背を付けながら、緩やかに自身も回転しながら高速で周りを回るゾンビに対峙していた。

「姐さん、聞きやしたか？こやつら、少しばかり知能があるらしいですぜ。」

「年上のサイゾーさんに姐さんって呼ばれるのは抵抗あるんですけど。今はそんな状況じゃないですから我慢します。」

「で、姐さん。あつしの知ってるゾンビとやらは、のろまで怪力なんですが……走るやつてえのは初めてお見かけするんですが、やっぱり怪力なんですかあねえ？」

この状況でも相変わらず惚けたことを言い放つサイゾーであった。

「知らないわよ。あたしだって初めて見るんだから！あつちの近藤さんは昨晚見かけたって言ってたけど……誰も闘ったことはないから、未知数ってことで納得していただけないかしら？」

「さいですか。なら…問答無用で行くしかないっちゅうわけで。」

「そりゃ、そうなんだけども……こうクルクルとまわらるてちゃね。下手に斬り込むと左右と後ろから詰め寄られちゃうしね。」

「あつしが後方を受け持ちますんで…姐さんが正面ってことでいきやせんか？」

「何であたしが一番手で斬り込まなくっちゃいけないのよ。」

「剣技の実力差ってことですかねえ。姐さんの実力の方があつしより何枚も上手ですから……」

これが、ヤクザもんなら経験値から言ってもあつしなんですがあねえ。

どんな反応をされるのか皆目見当がつかねえ相手ですから…あつしより手数に優れた姐さんが…」

「わ、わかりましたよ！でも、サイゾーさんこそ大丈夫ですか？さっきの傷が開いてて動きが鈍りませんか？」

「さつきは……お恥ずかしいところをお見せしちまいしたね。相手の実力が掴めないもんですから

しまいやしたわ。力一杯でいきやしたが、手応えから行けば、7分の力で十分とわかりやしたんで、姐さんの足い引つ張ることあいたしやせんぜ。」

「何か……信用していいんだか？わかんないですけど…」

考えるのも面倒くさいんで、5数えたら突っ込みますからね」

「5でスタートで？それとも5で初太刀を？」

「サイゾーさんって、意外と細かいんですね。5でスタートていいですか？」

「合点！」

「では、行きますよ。」

「イイチ」

「ニイイ」

「サアン」

「シイイ」

「ゴォ！」

優香が脱兎のごとく、前方のランニングゾンビに向かって突っ込んでいった。

予想通りに左右と後方のゾンビが距離を縮めてきた。

優香は、前方のゾンビに対して上段から振りかぶって左首から右脇にかけて一気に切り裂き、そのままの太刀筋を左から右斜め上に風ぎ左側から接近するゾンビの左脇腹右肩を切り裂いた。その太刀筋のまま身体を回転させ独楽のように回り、右から接近するゾンビの正面に対峙し八相の構えに似た状態から、ゾンビの頭を斜めに切り裂いた。

片やサイゾーは、後方正面から迫るゾンビに逆袈裟斬りを浴びせて上半身を斜めに切り裂き、返す刀で右方向から迫り来るゾンビを袈

袈斬りで両断した。そして、左方向から来るゾンビに身体を向けた瞬間に

そう来やしたか…

ランニングゾンビはその身体能力をフルに利用して、2メートル程の跳躍を行い優香に狙いを定めて上空から落下し始めた。

「南無三！」

優香が3体目のゾンビを切り裂いた瞬間、サイゾーの怒鳴り声が聞こえ、優香はサイゾーに突き飛ばされていた。

「きゃっ！」

突き飛ばされた優香は地面に倒れ込むか込まないかの瞬時に、踏み足を調整して何とか踏鞴たたらを踏みながら耐え凌ぎ、突き飛ばされた方向に目を向けた。

丁度、落下してきたゾンビとサイゾーが接触する寸前であった。ゾンビはサイゾーの下からの突きを僅かに首をそらせ、そのままサイゾーの肩に噛みついた。

「ガッツッ」

噛みつかれたサイゾーはゾンビ共々地面を転がり込んだ。

「ガハッッ！」

口から地を吹きながらもサイゾーはゾンビの肩口に突き刺さった己

が日本刀を力ずくで無理やりゾンビの首まで引き、ゾンビの首の半分を切り裂いた。

一方、近藤に対峙していたゾンビは回転を中止して2体が一直線上になり突風してきていた。

近藤は正面のゾンビに蛮刀を投げつけながらP46を引き抜き構えた。

蛮刀は運用先頭のゾンビの眉間に突き刺さりゾンビはもんどりうって倒れこみ、後ろを走るゾンビが無防備になったところを近藤のP46から発射された4発の4・6mm×30弾がゾンビの頭部を捉えた。

「サイゾーさん！」

近藤は、優香の叫び声を聞き、踵を返して2人の元に走り寄った。

そこには、肩口に噛み傷を受けたサイゾーが横たわり、その横には首を半分に裂かれたゾンビがピクピクと末期の痙攣をさせていた。

「サイゾーさん」

近藤が地面に跪いてサイゾーの肩口を触ろうとしたところ

「触るな！………か、感染………するかもしれない……」

「サイゾーさん！気をしっかり持って下さい！」

優香も無駄だとは知りながらもサイゾーを励まそうと声をかけた。

「ゾンビに噛まれた奴の末期は散々見てきましたよ……
あ、あつしはバケモンの仲間入りは御免こうむりたい……、姐さん……
……あつしを人のままで送っちゃいただけませんか？
こ、近藤さんとやら……ボ、ボンは執念深……い。全員、む、無線機を装備してやす。」

あんさんは……第一級手配……8人衆が……狙って……むせん、持つていき……チャンネルは……12時間表示でマイナス3……1時間ごとにかわ……い、意識……ひ……ひと……お、お、おやっさん」

サイゾーは意識を失ったようだった。

2人は立ち上がり……近藤がP46をサイゾーに向けた。

「近藤さん。私が……サイゾーさんの約束ですから……」

優香は静かに刀を引き、サイゾーの額に突き入れた。サイゾーは人のままで最後を迎えることが出来た。

近藤と優香の目にはいっぱいの涙が溜まっていた。

「優香さん。辛いし名残惜しいが……また、ランニングゾンビが来たら厄介だ。」

サイゾーさんの好意に甘えて無線機をいただいて……移動しよう。銃声でゾンビが寄ってくるかもしれない」

「はい。」

何で、何で、こんな状況なのに……人同士で闘わなくっちゃあならないんでしょう？」

「申し訳ないが、俺には……その答えはない。」

生き延びて優香さん自身で答えを探すんだ。」

2人を紅い夕焼けが包んだ。

第10歩 夜叉丸 - 2 (後書き)

ご意見・ご感想・ご批評お待ちしております。

第11歩 夜叉丸 - 3 (前書き)

夜叉丸編の3話目です。戦闘シーンはなく、行き当たりばったりで登場させてしまった8人衆との闘いに向けての状況設定です。

だんだん、ゾンビ物から遠ざかってますが……気長にお読みいただければいづれ元の路線に戻りますんで、暫くの間お付き合い下さいませ。

それと……女たらしの魔猫ドロンジョちゃん存在を忘れてしまってたんですが……きっちりとくるみちゃんの膝の上に座ってますのでご安心下さいませ。

第11歩 夜叉丸 - 3

サイゾーの骸を道路横の草むらに横たわらせ、キャデラックに積まれた無線機を取り外し、一行は中野巡査の自宅に車を向けた。

しかし、昨日、取り乱して錯乱してた人物と同一とは思えんな！この実力なら木刀一本でも、のろまなゾンビなら100体くらいは簡単に殲滅出来る腕前じゃないか？

サイゾーさんが言ってた平成の女十兵衛ってなんなんだろう？

中野巡査のギャップに疑問を感じながらも近藤は先を急ぐことを優先することにした。

中野の提案で、大人しか車の運転が出来ないと、今回のような事態に陥った際に援護も脱出も出来ないことになることを避けるために、残りの行程を香が練習がてらに運転することになった。

本来ならば、年上のくるみと言う流れであつたが、香自らが立候補したのである。香なりに全体の戦闘力を考え、一番戦闘力の低い自分が役立つ方法と判断したのであつた。

更に、香の自己申告では、長野の祖父の牧場で夏休みなどに遊びにいった際にお手伝いで牧場内（公道ではないという理由で）を軽トラックを運転したことがあるとのことであつた。

助手席に近藤が座り、香に指導しながら小高い山道を車は登っていた。

「そう！その調子で、ハンドルは今のタイミングよりちょっと遅いめでも大丈夫だから……じゃあ、ちょうど直線みたいだから、もう少しスピードをあげようか？」

近藤の指示に対して素直に操作する香であつた。

「香ちゃん、結構上手じゃない！流石に無免許運転経験者じゃん！いい感じだよ！ねえ？中野さん？」

とくるみが後部座席から声をかけていた。

中野も軽く頷きながら

「そうね。無免許運転経験者だつてことは、多目に見てあげるしかないわね。まあ、既に法治国家としては機能してないしね。香ちゃんが運転出来るとなると心強いわ」

「む、無免許つて言わないでよ！」

頬を膨らませながら香がバックミラーで2人に照れた表情を見せていた。

「その大きなカーブを曲がって100メートル程のクリーム色の家だからね！」

カーブを曲がったところで近藤が車を停止させた。

「車が止まつてる。中野さん、知ってる車ですか？」

中野の家と思われる家の反対車線に大型の4WD車が止まっていた。

「純也！」

中野が車を見るなり名前を発した。

「従兄弟の車です。心配しなくて大丈夫ですわ。」

「でも、ゾン」

くるみが心配を口に出す間もなく

「裏柳生の現、頭首ですし……本人もですが、多分隣に核爆弾みたいな娘がくつついていると……」

中野の言葉を信じて車を進め4WD車に車を横付けしたところ、2名の男女が乗車しており、運転席側の男性がこちらに向かってにこやかに微笑んでいた。

2台は揃って移動し、数分後には全員が中野の自宅のリビングに座っていた。

「純也は何しに、こんな混乱した状態の中、奈良くん dari から来たのか説明して貰えるかな？」

普段の優香らしくない突き放した言い方で会話が始まった。

「相変わらず愛想がねえなあ、優香姉ちゃんは。婆ちゃんがさ、優香姉ちゃんの封印を解いてこいって……うるさいんだよ。自分が封印したくせによ。」

「封印？」

近藤が思わずに呟いてしまった。

「ええ、実は私の実家が柳生の分家にあたるんです。

本来、この純也が柳生を継がなくっちゃいけないんですが……

剣技の方に今ひとつ本気にならないと言うのか、どちらかと言えば裏柳生と言う体術……にのめり込んでしまつて」

「当麻兄ちゃんに憧れたただだよ。それに、剣技じゃ優香姉ちゃんにはかなわなかったし……

優作叔父さんも、俺には裏柳生の方が合つてるって……」

口を挟む純也を睨み付けて黙らしながら優香は説明を再開した。

「純也の話しに出た、優作はあたしの父親で当麻は兄です。

元々、分家の父が裏柳生を継続させ、本家が柳生を継いでいくのですが……

純也の母親が純也を産んで直ぐ他界してしまったので、赤ん坊の時からあたしの母が一時的に母親代わりになり引き取っていたんです。だから、純也は小さい頃から兄の修行を見ながら育ったんです。あたしと兄が6つ違い、あたしと純也が2つ違いでした。

兄当麻は、裏柳生に関しては天賦の才を持つと言われてまして……物心がついた頃から純也はずっと兄にくっついて修行を積んでいました。

その兄が21で治療法の無い不治の病を患つてしまい、半年で他界してしまつてから、純也が勝手に裏柳生を継ぐ気になって……しかも、兄と変わらぬ才を持っていたんです。

裏柳生は原則一子相伝で、それ以外には高弟を6名しか採らないんです。この点は柳生も同じなんです……

で、本家の柳生を継ぐ者がなくなっただけです。

そんな時のために、柳生の3つの分家では産まれた子供は全員が柳生の修行を15までは行わなくてはならない決まりなんです。

あたしが17の時です。他の2つの分家からの伝承者候補達と併せて5名で伝承者選びが行われる運びになったんですが……………

過去から冷遇されていたと不満を抱いていた一つの分家の伝承者候補が、自身の兄を筆頭に他の候補を闇討ちし始めました。結果1名死亡、1名植物人間、もう1名も右手と左足をなくしました。

最後にあたしも襲われたんですが……………完全にキれていたあたしには記憶がないんですが……………

あたしが襲われている現場にかけつけてくれた父と純也の話では……………

あたしが木刀で、伝承者候補と荷担した高弟5名を斬り殺していたらしいんです。」

「凄かったんすよ。木刀なのに……………うちの家宝の『村正』の斬り口と寸分変わらない程だったんですよ。

ただ……………キレた優香姉ちゃんを止めるのに……………裏柳生の頭首の優作叔父さんと俺が2人がかりで……………

結局叔父さんの右腕を引き換えにしてやっとだったんだ……………

で、本家の婆ちゃんも優香姉ちゃんの『危険な本性』『村正に魅入られた力』だとか言っ……………その力を封印したんです。」

説明中、あまりにも荒唐無稽な話しに口をあぐりと開けていた3人は純也の話の後に思い出したようにお互いの顔を見回した。

「申し訳ないが

一子相伝やら伝承者争いやら……………柳生やら裏柳生やら……………

北斗の拳に柳生一族の陰謀みたいな世界をいきなり聞かされても……………

そんな世界が現実にあるなんて……なかなか頭ん中の整理がつかねえわ。

まあ、ゾンビが闊歩する世界も信じられないっていつちゃ、信じられないんだが……」

「柳生とか裏柳生の人って普段は何をしているんですか？ 優香ちゃんみたいに警察官なんですかぁ？」

香が素朴な質問をした。

「説明してもいいけど……余計混乱するだけになるかも知れないけど構わないかい？」

純也は困惑している3人に優しい笑顔を振りまきながら優香の顔をうかがい、許可が出たと判断した純也はあとを続けた。

「柳生は政府要人の影の護衛を専門にしてるんだ。我々の護衛対象者は、選挙の度にすぐかわる政治家ではなく実質的に日本を動かしている次官などの実務者なんだ。原則は対象者にも知られずに近づく危険人物を排除するのが主な役割なんだ。裏柳生は主に公安関係政府機関のうち対外的に非合法な任務を行っているんだ。簡単に言えばスパイとか諜報員とかって言えばわかりやすいのかな？」

ただし、柳生も裏柳生も実質的には6名しかいないので自衛隊や警察から適当にスカウトした部下で成り立っていたんだ……」

少し話しくそくに純也は自身の隣に座る女性にチラリと目をやった。

「この先は純也では説明し難いので、あたしが説明します。」

話しを継ごうとした優香に純也と連れ的女性はびっくりした様子をしていた。

「柳生も裏柳生も時代とともに、なかなか、なり手や人材を確保するのが難しくなってきたんです。まあ、日本が豊かになつていったという証明みたいなものですけど……」

しかし、見かけの平和はあくまでも見かけでしかなく、情報戦や諜報戦は日々激しさを増していき、とても柳生や裏柳生だけでは手に負えなくなつてしまい父の先代の時に風魔（歴史的には風間党）と協力して、国内に残存し外国の諜報機関と関係を深めていった黒脛巾組、根来衆などの忍者組織を一掃し、柳生は風魔と組んだのです。その証として、父の代より裏柳生の頭首は風魔より嫁をめとることになつたんです。

あたしの母も風魔の頭首の長女でした。もちろん、純也の隣の女性も風魔最強と言われる大角の次女、子虎です。」

「えつつ、優香姉ちゃん！私は虎じゃなく、猫だよ。子猫って言つてよ！」

「何言つてんの！SAS（イギリスの特殊部隊）との訓練で、オリエンタル・アトミック・ボムとかアジアン・タイガーなんて渾名を貰つたお転婆が！」

あんたが参加して以来、SASが訓練に呼んでくれなくなつたんじゃないのよ！」

「えっ？私のせいじゃないよ。コネリー大佐が賭に乗らない奴はSASの訓練には参加させないって言うからだよ。」

「だからと言つて模擬戦で8名も半殺しにしてどうするのよ！」

「だって、『賭』の対象が……私の貞操だったんだよ？」

初体験が外人で、しかも特殊部隊のゴツい男の上に弱い奴だなんて……超サゲサゲって感じじゃん？無いって！」

言い訳を続ける子虎に対して、更に説教を続けようとする優香に対して

「てか、優香姉ちゃん？もしかして、封印解けてね？」

純也が先程の自身が怪訝に感じた疑問を尋ねた。

「あー、封印ね。多分、『危険な本性』『村正に魅入られた力』以外は解けたみたいね。剣技の感も完全に戻ってるし……」

ゾンビに襲われて、道場の教え子があたしを守り通しながらもゾンビになっちゃって……錯乱したみたいなの。錯乱したことで封印の一部が解けたみたいだわ。

………もつと早く解けたくれてたら……
助けられた人がたくさんいたんだ。情けないないね。」

目に涙を溜めながら悔やむ優香にくるみが

「でも、近藤さんと私や香ちゃんは助けてもらいましたよ。
そんな事を言ったら、近藤さんや私も……藤井さんや石井さんを助けられなかったし……」

でも、悔やんでも悔やんでも……仕方なっただんだって。その時には、そこまでの力しかなかったんですよ。

そう思わないと生き延びるだけで、どんどんと背負わないといけないものが増えちゃって……生きるのが苦しくなっちゃいますよ。

私は…最初に久しぶりに再会した幼なじみに助けられたんです。だから、彼の分までは生きようと思ってます。」

「俺も、その通りだと思うな。助けられなかった命の数だけ悲しみを背負いこむんだっただけ…生きるのが辛いだけになると思うんだ。生きて、生きて、生き抜いた時に答えがわかると信じている。それまでは、精一杯生きるしかないんだ。」

近藤の言葉に一同がそれぞれの想いを抱きながら聞いていた。

「ところで、柳生はこの状況をどうやって打破するつもりなの？」

「うん。実は、うち（裏柳生）は、3組から6組が海外で活動中なんで国内には2組しか残っていないんだ。海外組とは連絡がとれないから状況は不明。」

国内では、1組は、柳生の4、5組と合同で東京で実務者達の安否確認と保護をさせているんだ。

2組は風魔に向かわせてる。着き次第、大角の親父さんの指揮の元にゾンビの殲滅活動に入る予定なんだ。ただ、無線からの連絡によると走るタイプのゾンビがいてるらしくて、奴らは群れで狩りをするようなんで…遭遇すると排除するのに時間がかかるみたいで厄介な存在なんだ。

それに、風魔の総数と合わせも150名程度なんで、大角の親父さんは自衛隊の装備品を入手するつもりで既に20名程を一番近い基地に向かわせてるらしい。

柳生は、奈良の本家の警備に1組を充ててる。親父や優作叔父さんや引退組が張り切って全面に出ようとしてるんで困ってるけど、実質的には2組で警備している状況かな？1組は優香姉ちゃんの代役の静香さんだから年寄り連中も上手く扱ってくれると思うよ。

6組はいつも通り皇族についてる。

3組は風魔の新米の訓練で北海道なんで、向こうの自衛隊の再編成を手伝ってる。

2組の正人ところが休暇中だったんで、まだ全員と連絡がとれてないんだ。携帯が使えないんで………作戦合同中の組は無線があるから連絡がとれるんだけど、休暇中の柳生の丸腰メンバーでは走るゾンビはキツいかもしれない。」

「走る奴らはほんの一握りだから、運次第ね。本家を静香さんが指揮を取ってくださってるのなら安心だわね。今の状況なら、あんた達2人がいなくても当分の間は大丈夫よね？」

「えっ？まあ、数日位なら大丈夫だと思うけど………なあ、子虎？」

「えええ？優香姉ちゃんの顔みてみいや！絶対にろくなことにならないで、厄介なことに巻き込むつもりやで！」

小声で純也に返事をしている子虎ではあるが、狭いリビングの中、その声は全員に聞こえていた。

「お前なあ、優香姉ちゃんに丸聞こえやで？」

優香の口元は涼しげに微笑んでいたが、その眼はまるで子虎を射抜くように鋭い狩人そのものであった。

「怖っ！」

子虎は純也の影に隠れるように優香の視線から逃げようとした。

ザーザー…ガッ・ガッ

いきなりサイゾーのキャデラックから取り外してきた無線機が音を発し始めた。

「夜叉丸の通信だ！みんな静かに！」

近藤が無線に飛びついてボリュームを上げた。

「田中つす。・ま、サ・ゾーさんの車、…発見」

「チャ・ネル7に」

通信状態が悪いからなのか？他に聞かれないからなのか？チャネル変更の指示が聞こえてきた。

カチカチと指定されたチャネルに変更した途端に鮮明な声が聞こえてきた。

「サイゾーさんの車を発見しました！回りにサイゾーさんは見当たりませんが……えつつつと……刀で斬られたゾンビが10匹程います。」

「たった10匹？サイゾーがそんな数のゾンビに遣られるはずがないでしょうが！てめえら薬をキメてんじゃねえだろうな！」

「ナ・ナンシ・さん！俺たち、薬も何もやってねえっすよ。ナンシ・さんに嘘つく奴なんかいるはずないっしょ？
ジで、ゾンビが10匹斬られてんですよ！」

「周辺をきっちり探さないよ！本当にサイゾーは何処にもいない

の？」

「すみません。辺りはもう真っ暗なんで……探しようがないですよ。それよりもいつゾンビが現れるかも知れないんですよ。」

「だ！誰や！」

「どうかしたの？」

「だ、誰かに回りを囲まれてるみたいっす。暗くて全然見えへんけど……確実に何かいてます！クルクルと周りを回ってます！こら！鈴木！止めとけてっ……近寄んなくて！バット持って近づくなって！あつ！す、鈴木がいきなり消え……ぎゃああああく！く、来るなあああ……ぎゃあああああ！」

「田中？田中？………わりやあ！返事せんかああああ
」

それっきり無線は黙ったままであった。

無線のポリウムを下げながら

「あの辺りにはまだ走るゾンビがいてるみたいだな。くそっ！行動範囲がわからんが、ここも無事とは言い難いかも知れないな。」

近藤がG36に手をかけようとした時、またもや無線機から通信が始まった。

「ウラジミールだ！今の通信で俺、ナンシー、田中の無線を三角測定してだいたい場所は特定出来た。」

今、A県N市に展開している自衛隊の後方だ、3～4時間で双子がこちらに到着する予定だ。到着次第、自衛隊に奇襲をかけて装備を奪う。奇襲と殲滅に2時間。移動に6時間。明日の朝6時～8時には現地に到着してサイゾーの件はこちらで確認をする。

先程捕まえた自衛官を痛めつけたところ、詳しいことはわからないが……どうも新手の走るゾンビが各所で確認されているらしい。サイゾーや田中を襲ったのもそいつらかも知れない。生け捕りにしたら、ドクターやボスが喜びだろうぜ。」

「ウラジミール！場所の座標を言いなさい！あたしが今すぐに行くから！」

「おい！おい！手柄を独り占めするつもりかい？」

ボスは、あんたにお尋ね者を捜して、男の方は首を。女の方は生け捕りにしろ！って言う、最優先命令があるんじゃないのか？命令違反をすると『ロン』！が枕元に現れるぜ！せいぜい、頑張んな！じゃあな！」

「ウラジミールッ！ウラジミールッ！糞ロシア野郎め！次、会った時はただじゃおかないからね！」

無線の会話を聞いていた、優香はニツコリと微笑みながら

「さっきの話しただけど……このロシア野郎と双子。を始末したら、奈良に帰ってもいいわよ。良かったじゃない、チヨチヨイとやれば半日仕事じゃない？」

知ってる情報だけは話しておくわね。ロシア野郎ってのは身長2メートルの元ロシア特殊部隊の伍長。

双子は琉球空手の達人らしいわよ。」

「身長2メートルの元ロシア特殊部隊の伍長でウラジミール？それって……根来の？」

子虎が、何とも残忍な笑顔を見せ、ニヤリと笑った口元にはいつの間にか尖った八重歯が2本ニヨキリと生え、まさしく虎、いやサーベルタイガーのようであつた。

「子虎！何、牙を出してんの？あんたが牙を出すとろくな事にならないんだから！今回は綺麗な仕事にするんだよ！」

「優香姉ちゃん、牙じゃないってば！八重歯！ヤ・エ・バ！」

「暴れる時だけに、ニヨキリと生えてくる八重歯なんかあるもんですか！普段は八重歯なんかないくせに！あんたのは、牙！キ・バ！って言うのよ！」

ところで、純也！根来ってどういう意味よ？お爺様の代で潰したんじゃないかったの？」

「何か、婆ちゃんたちの封印ってえのも信用出来ねえよな。封印されていたのに子虎の牙のことを覚えていたりしてんだから。」

まあ、そんなこたあ、どっちでもいいけども、優香姉ちゃんが封印された後のことで婆ちゃんたちの命で優香姉ちゃんには伝えてなかったんだけど、どうも、黒脛巾組も根来衆もいづれ国内組織は我々に壊滅的打撃を受けると踏んでみたいで……密かに海外で組織を構築していたらしいんだわ。

で、馬鹿なロシアが9年前に活動し始めたんで当時の1組と風魔の遊撃隊で潰しにかかったんだ。ウラジミールはなかなかの使い手だったんだろっね。風魔の遊撃隊の4名を返り討ちにして行方を眩ましたんだ。

だから、子虎にとっては一族の敵って訳なんだ。牙が出るのもしょ

うがないよ。遊撃隊には、子虎の幼なじみの娘のお兄さんがいたらしいし。

それに、この牙だけは婆ちゃんも封印出来ないそうだから……しかも、俺も初めて見るくらい伸びてるし……」

「優香姉ちゃん、ウラジミールは頂戴ね。ついで双子も引き受けるから！」

満面の笑みでニコニコとしている子虎の八重歯こと牙は更に数センチ程伸びていた。

人間の歯って？気分で伸びるものなの？（くるみ）

きつと、全て夢なんだよね。もう少ししたら目が覚めるんだよね？ね？みるみるうちに歯がのびるなんて（香）

うーん。もう暫くしたら陸奥園明流とか範馬刃牙とか勇次郎とか、拳史郎なんかも出てくるんじゃないか？いやいや、もしかしたら仮面ライダーとか聖闘士星矢か？

本来のゾンビ物なら忍者なんかじゃなくB・O・W・（Bio Organic Weapon - 生物兵器）とかが一般的なのに……なんなんだよ？この世界観は？（近藤）

三者三様に頭の中の疑問符を何とか整理しようとしているあいだに、優香は夜叉丸について、8人衆について純也と子虎に説明を始めていた。

ひとしきり話を聞いたところで、純也と子虎が難しい顔を始めた。

「な、何？あんだ達が難しい顔をする相手が混じってんの？」

「いや。そのロン（龍）ってのが少し気になるんだ。この数年来、きな臭い話しの裏に必ずと言って出てくる名前なんだ。でも、そんな人物がたかが暴走族の用心棒ってのはなあ？」

純也の言葉を子虎が引き継ぎながら

「て、言っても、その暴走族の用心棒に風魔の遊撃隊の4名の隊員を殺すだけの实力があるウラジミールがいてて、無線の会話から判断するとそのウラジミールが、ロンとそのロンが主従しているボスに対して明らかに服従しているんだから………無視は出来ないような気がするんですね。」

「優香姉ちゃん、ちょっと静香さんとも相談したいんでちょっと中座させてもらうわ。」

まだ、お連れさんとはお互いに自己紹介してないけど、ちょっとの間失礼させてもらいます、先に食事でもしておいて下さい。」

純也は、優香と近藤やくるみ、香に笑顔で挨拶をして子虎とともに部屋から出て行った。

「何か、キツネにつままれたみたいな感じだが、心強い実力者が味方になったみたいだし……明日に向かって英気を養いましようか？くるみちゃん、銃のクリーニングを説明しようか。優香さんと香ちゃんは食事の用意をお願いしますか？」

警戒の方は、裏柳生や風魔の方が2人もいてるんだから特別視しなくても大丈夫ですよな？」

優香は微笑みながら

「休憩としましょうか。お茶でも用意しますわ。」

一行は、しばしの休息の時間をむさぼることとした。

第11歩 夜叉丸 - 3 (後書き)

ご意見、ご感想 お待ちしております。

今回より、簡単に次話予告を……………

第12歩

純也&子虎VSウラジミール&双子空手家

壮絶な闘いの中……………子虎の慎ましい初恋が披露される。のか？

極楽温泉に立てこもる由美子・由真・由紀のその後が明らかになる。
のか？

全ては、夜叉丸編の皆様方の評価で決まります。

さて、どちらの今後がはつきりするのか？

一部知り合いからは町内会長のその後を！と言うマニアックな意見
もある中……………

次話 乞つご期待？てか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5038p/>

親父の楽しく険しい旅

2011年10月7日13時54分発行